

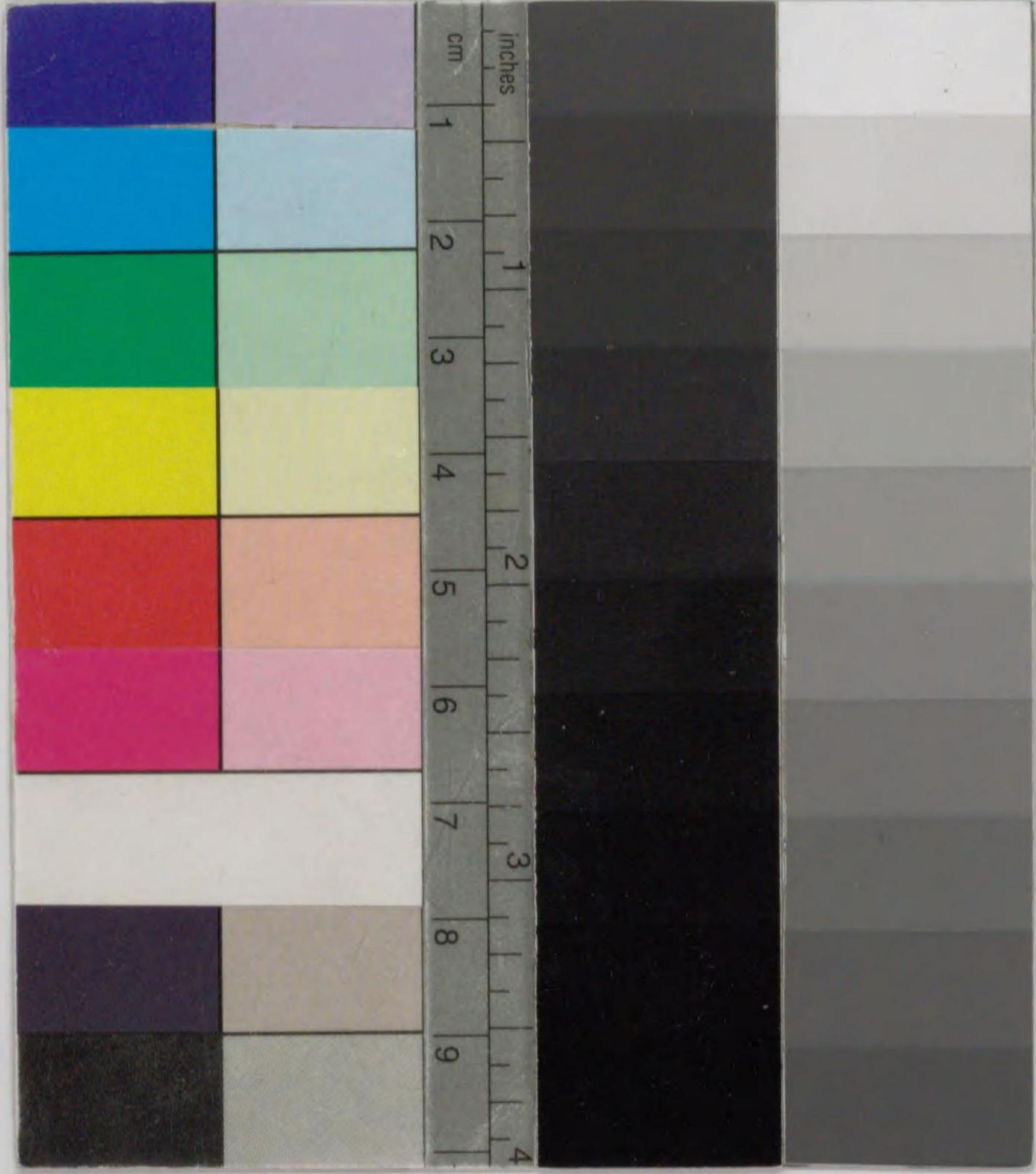
569-61



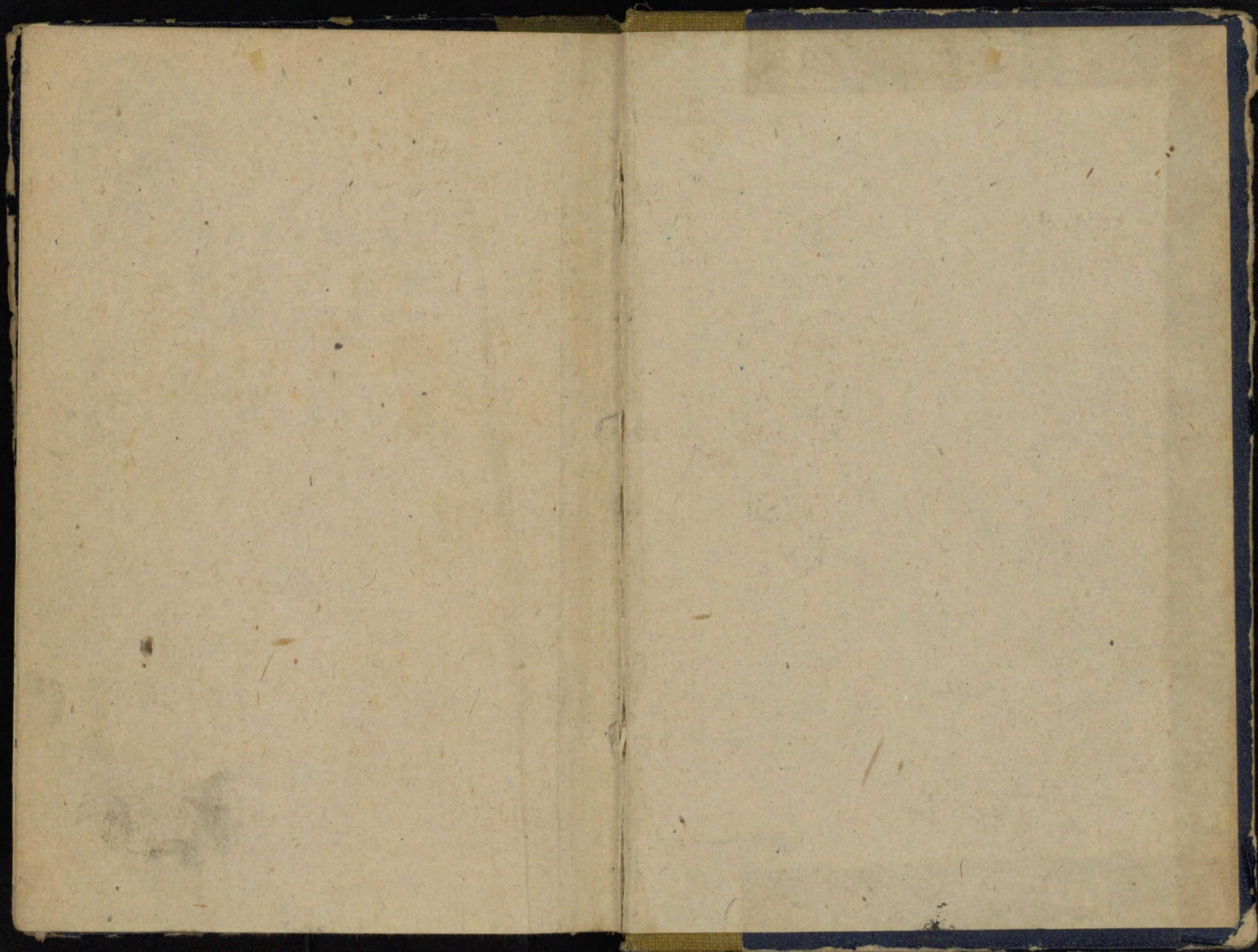
1200501517056

569  
/

×  
複写



Inches  
cm  
1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
1  
2  
3  
4



納本

世界大衆文學全集

28卷

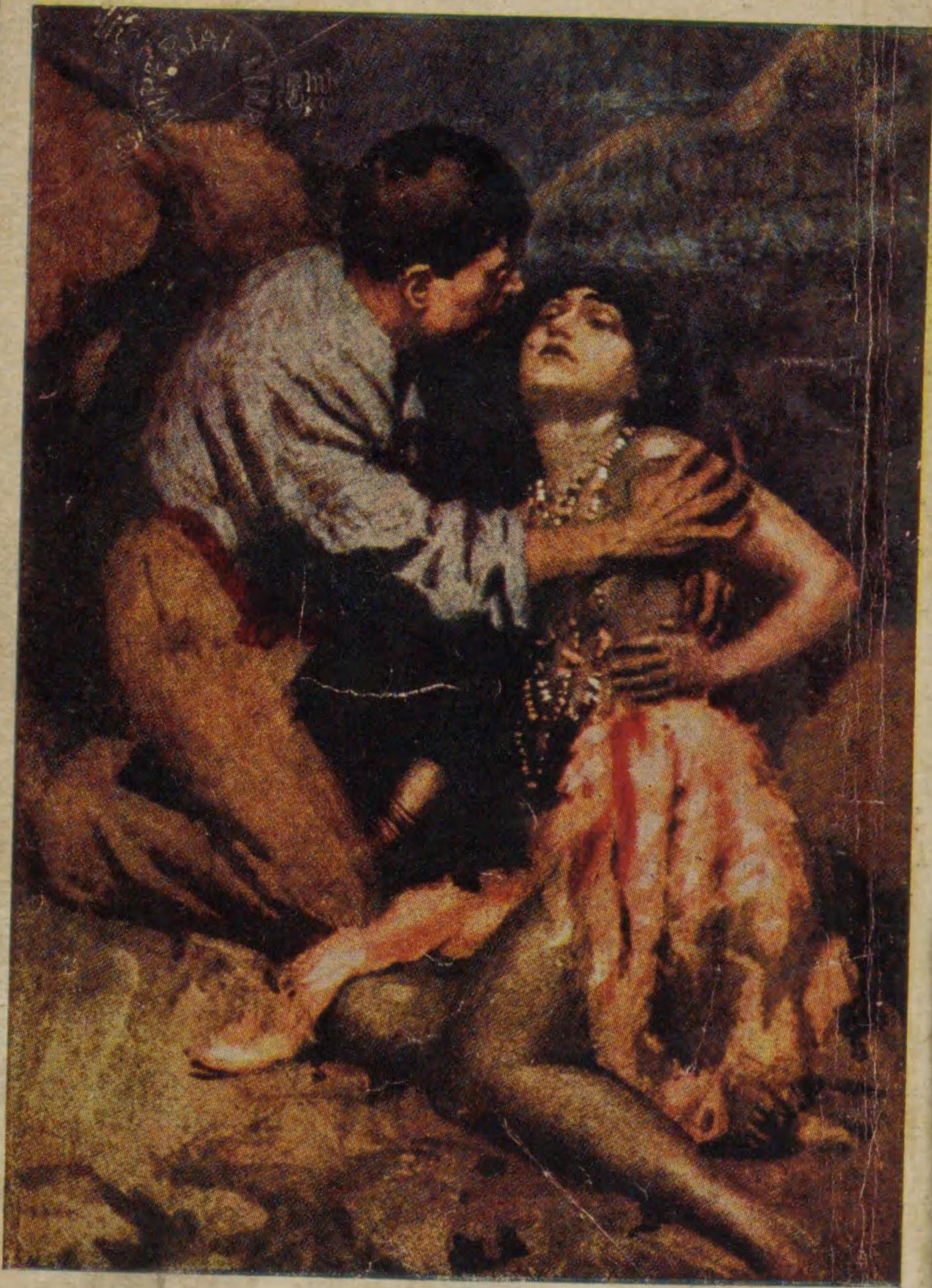
洞窟の女王  
ソロモンの寶窟

平林初之輔



改造社





るれらみてき生てく若も年千でいばついにめたの愛は胸の妾……」  
(照巻頁四八五)

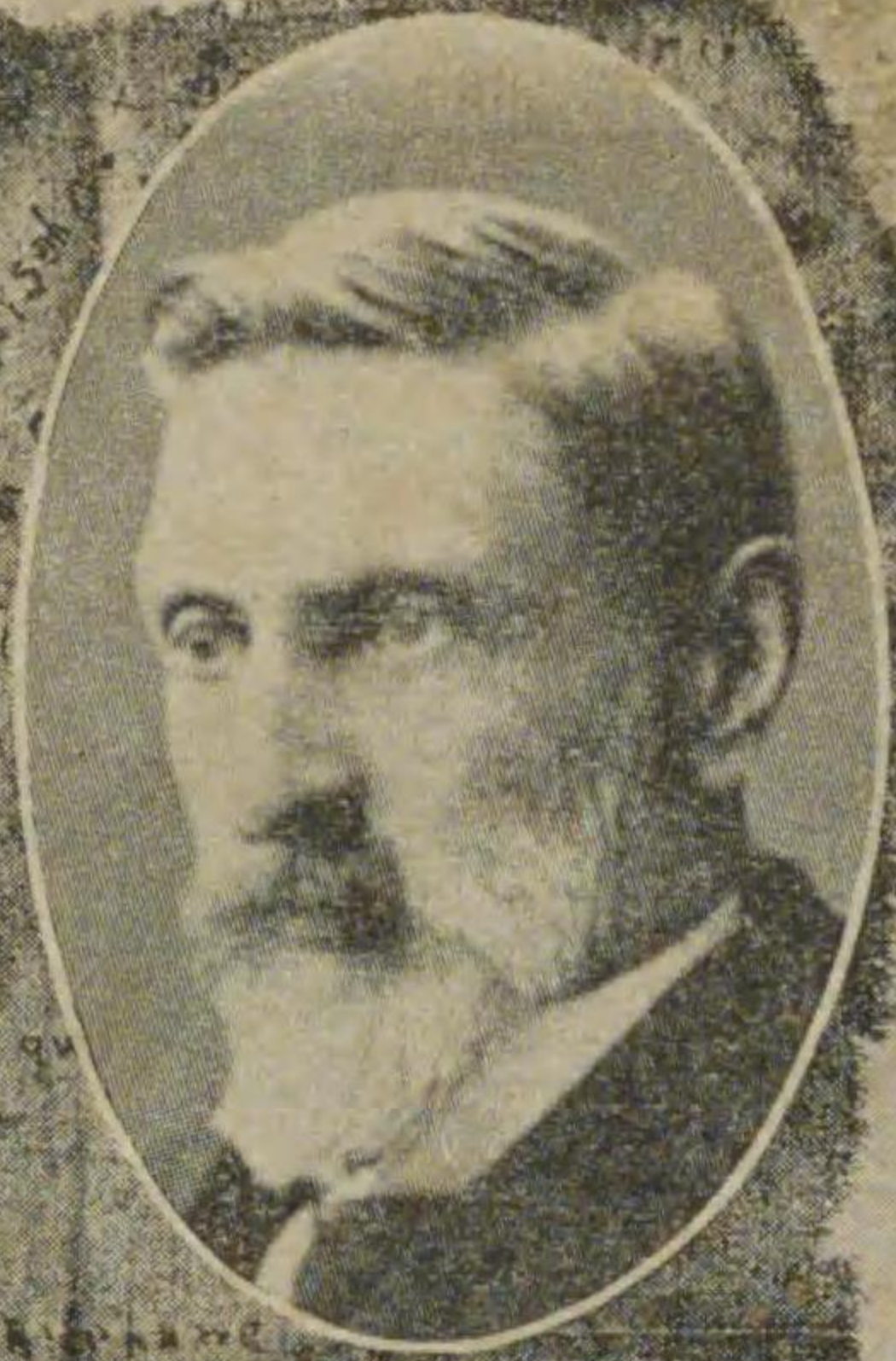
し……。すでのるすが氣なうや

譯者序

サー・ヘンリー・ライダー・ハガード Sir Henry Rider Haggard は一八五六年六月二十  
二日英國のオアフォークで生れて一九二五年に死んだ英國近代の最も輝ける大衆作家であ  
つた。

十九歳の時南アフリカのナタル總督の祕書として同地へ赴任し、その後トラスヴァール  
で裁判所長をしてゐたこともあるので、彼地の事情に深く通じてゐたため、彼の小説の材  
料は普通の小説家の追隨を許さない獨特のものがある。わけでもアフリカの蠻地に取材し  
た小説が最も多く、本書に収録した二篇はいづれもその代表的なものである。

彼は一八八四年處女作「曙」 Dawn を發表して以來、相當な長篇を四五十篇も發表し  
てゐる。多産な作家と言はねばならぬ。本書に收めた、洞窟の女王(原名 Queen of the Cave)は一八八八  
年の作で、この著者の最大の傑作の一つとされてゐる。それは實にこの上ない怪奇な戀と  
嫉妬と復讐と冒険との物語でありながら全篇を貫く現實味は讀者を最後の頁までひきづつ  
てゆくに十分である。最近日本に來朝したフランスの作家フランソワ・ブノワの有名な小  
説ラトランチイドはこの「洞窟の女王」に筋がよく似てゐるので、これを剽窃したのでは  
ないかといふので一時文壇に騒がれたことがあつた(但し事實さうではないことがわかつ



圖地たい描で血のラトランチイド及者譯(下) トーカハ・ダイブ(上)  
(照參頁五七三)

だがハガードは、本書の後日物語を「アッシャ」として一九〇五年に發表してゐる。「ソロモン王の寶窟」(原名 King Solomon's Mines)は一八八六年の作で第三番目に發表された作である。これは模範的な冒險小説で、「洞窟の女王」と共に今なほ英米の讀書界で食ひ讀まれてゐる。これはアラン・コオターメンといふアフリカの狩獵家の手記といふ形式になつてゐるが、その翌々年著者は同じ人を主人公として「アラン・コオターメン」といふ別の小説を書いてゐる。たゞの空想で描いたものではなくて、著者のアフリカ内地の實地の探險の經驗と知識とが基礎になつてゐると英國人氣質に投じた愉快な冒險談であるところはこの書物がかくも長い生命を保つてゐる理由があるのである。

ハガードは千九百十二年ナイトに列せられてサーの稱號を受けた。元來彼は法律家で、社會問題の研究家で、特に農業問題、村落問題等について造詣深く「貧民と土地」「英國の村落」等の著書もある。園藝に於ても相當な權威でノオアフォークの自邸には農園を經營してをり「園藝家の一年」といつた風の著述もある。特異な作家の一人である。

昭和三年六月十五日

譯者

目次

洞窟の女王

はしがき……………八

第一章 深夜の訪問者……………一四

第二章 歲月は過ぎて……………二六

第三章 アメナルタスの壺片……………三三

第四章 強風……………三三

第五章 エチオピア人の頭……………六四

第六章 古代基督教の儀式……………七六

第七章 アステーン歌ふ……………九三

第八章 酒宴の後……………一〇七

第九章 小さい足……………一一九

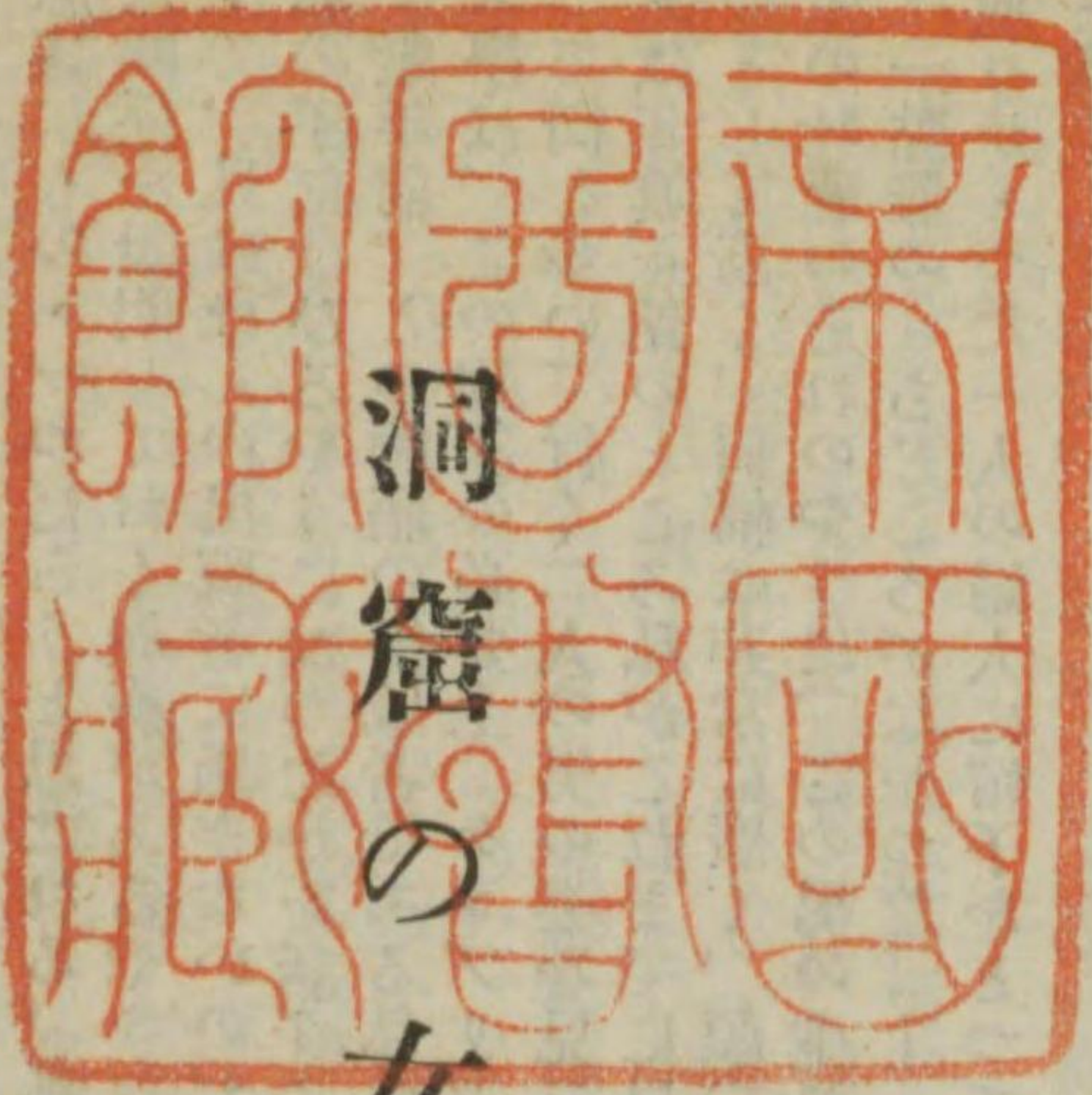
第十章 萬感交々……………一二九

第十一章	コオルの平原	一四一
第十二章	女王	一五一
第十三章	アツシヤ面被をとる	一六三
第十四章	地獄の精	一八二
第十五章	アツシヤの裁き	一九三
第十六章	コオルの墓所	二〇三
第十七章	ほつと一息	二二一
第十八章	行け！女！	二二六
第十九章	黒山羊をくれ！	二四二
第二十章	勝 利	二五二
第二十一章	死者と生者との邂逅	二六八
第二十二章	ジョップの豫感	二七六
第二十三章	真理の神殿	二八八
第二十四章	板橋を渡る	二九六
第二十五章	生命の精	三〇八

第二十六章	あゝ何たる光景ぞ	三二三
第二十七章	深淵を跳び越える	三三三
第二十八章	山を越えて	三四三

ソロモン王の寶窟

はしがき	三五四	
第一章	サー・ヘンリー・カーチスに會ふ	三五六
第二章	ソロモン王の寶窟の傳説	三六八
第三章	ウムボバを雇ふ	三八一
第四章	象 狩	三九三
第五章	沙漠に向ふ	四〇五
第六章	水だ！ 水だ！	四二〇
第七章	ソロモン街道	四三三
第八章	ククアナ國に入る	四五三
第九章	ツワラ王	四六四



洞窟の女王

カ  
ー  
コ  
ン  
リ  
ー

第十章	魔法狩り	四八〇
第十一章	天の助けの月蝕	四九八
第十二章	戦闘の前	五一四
第十三章	攻撃	五三三
第十四章	白髪聯隊の最後の奮戦	五三三
第十五章	グッドの病氣	五四九
第十六章	國王の墓場	五六二
第十七章	ソロモン王の寶窟	五七三
第十八章	絶望	五八八
第十九章	イグノシの別辭	六〇一
第二十章	邂逅	六一〇



# 洞窟の女王

はしがき

この物語はたゞの冒険談として見ても、これまで人間の企てた冒険の中で、最も驚くべき、最も不思議なもの、一つだらうと思はれる。私はこれを公表するにあたり、この物語の記録と私との正確な關係を説明しておく義務があるやうな気がする。先づ第一に、この異常な物語は私が話すのではなくて、私はほんの出版者に過ぎないのだといふことを断つておく。それから、どうしてこの記録が私の手にはひるやうになつたかを話すことにしよう。

數年前、この物語の出版者である私は、一人の友人と或る大學に足をとめてゐたことがある。この大學は、この物語の必要上、ケンブリッジ大學と言つておかう。或る日のこと、私は互に腕をくみあつて街を歩いて行く二人の男の姿を見て、この二人の男の容貌にひどく心を動かしたことがある。一人は正真正銘のところ私がこれまでに見た男の中で、これ位な美男子はなからうと思つた。脊はすらすらとして高く、肩幅は非常に廣く、顔つきは何とも言へず男らしく、舉動はやさしかつた。それは野生の牡鹿のそのやうに、この男の生れながらの資質であるやうに思はれた。おまけにこの男の顔には一點難のうちどころがなかつた。——いかにも上品な顔で、それでゐて美しく、ちやうどその時に通りかゝつた一人の婦人に帽子をとつて挨拶した時に見ると、彼の頭には小さな黄金色の卷毛が房々と密生してゐた。

「君、あの男を見たかい？」と私は一緒に歩いてゐた友人に言つた。「まるでアポロの像が生きて来たやうだね。すばらしい男ぶりぢやないか！」

「さうだよ」と彼は答へた。「あれはこの大學で一番好男子で、おまけに指折りの優さ男なんだ。みんな

なあいつのことを「希臘の神」と言つてゐる。本名はヴァインシイといふんだがね。だがもう一人の男を見たまへ。あれはヴァインシイの後見人で、實に頭のいゝ奴だ。みんなあいつのことをチャロンと言つてるが、それは、あいつの顔つきがおつかないからなのか、それともあいつが自分の後見してゐる子供の手をとつて、試験といふ深い海を渡してやつたからなのか——そのところはいづれともわからんがね。」

ちつと見てゐると、この年長の男の方も、人類の一方のすばらしい見本として、全く獨特の面白味をもつてゐることを私は發見した。彼はかれこれ四十くらゐの年輩のやうに見えた。そしてこの男は彼の同伴者が美男子であるのと好一對の醜男であると思つた。先づ第一にこの男は脊が低くて、脚は曲つてをり、胸はひどく凹んでゐて、それに兩の腕が人一倍長かつた。毛髪は黒くて低く額に生へ下つてをり、眼は小さく、頬髯は頭髪とつづく所まで生へ上つてゐたので、顔の見える部分と言つたら全くちよつびりしかなかつた。どうしても私はゴリラを思ひ出さずにはをられなかつた。しかもそれでゐて、この男の眼には、何かしら、ひどく氣易い、人なつつかいものがあつた。私はこの男と知り會ひになりたいと言つたのをおぼえてゐる。

すると私の友人は答へた。「いゝとも、何よりおやすい御用だ。僕はヴァインシイを知つてゐるから紹介しよう」かう言つて彼は私を紹介してくれた。そして吾々はしばらくの間立話をした。——たしかズル民族のことをしやべつてゐたやうに思ふ。といふのは私はその頃ちやうど喜望岬から歸つて来たばかりだつたから。ところがその時私は名前は忘れてしまつたが、一人の肥つた婦人が、綺麗な毛髪をした一人の娘をつれて歩道のあるいて来た。するとヴァインシイ君は、よくこの人達を知つてゐたと見えて、すぐにこの二人の仲間にはひつて、一緒につれだつて行つてしまつた。ヴァインシイ君のつれの年長の男の名前はホリイといふことを私はその時に發見したが、二人の女が進んで来た時に、ホリイの表情ががらりと變つたのを私は面白いと思つたことをおぼえてゐる。急に彼は話をやめて、とがめるやうな眼つきでヴァインシイを見て、私にはお叩頭もそこそこにして、くると背中をむけて、ひと

りて街を横ぎつて行つてしまつた。後からきいたことだが、彼は、世間の多くの人が狂犬を恐れるやうに女を恐れてゐたのだといふ専らの評判だつたさうである。それで、彼が急いで逃げて行つたわけもわかつた。だが、ヴィンシイ青年は、女とつきあふのをひどく嫌つてゐる様子もなかつた。實際私はその時、笑ひながら、そばの友人に向つて、あんな男には自分がこれから結婚しようと思つてゐる女などはうっかり紹介できないね、うっかりあんな男と知りあひにさせると、しまひには女の方が愛情を先方へもつていつてしまふからねと言つたのをおぼえてゐる。彼は全く美男子すぎるくらゐだつた。そして、おまけに、自分ではそれに気がついてゐないで、美男子にあり勝ちな自惚を薬にしたくももつてゐなかつた。世間の多くの美男子は、自分の男振りのよいことを鼻にかけて仲間いきらばれがちのものだが、彼には微塵もさういふところがなかつた。

その晩で私のケンブリッヂ滞在はおはつたので、私が「チャロン」と「希臘の神」とを見たのも、その噂をきいたのも、それからすつと長い間これが最後だつたのである。實際のところ、私はあの時から今までこの二人に會つたこともないし、これから先だつて會へさうにも思はれぬ。ところが、一月前に、私は一通の手紙と二つの小包と一綴の原稿とを受けとつた。そして手紙を開封して見ると中には「ホレス・ホリイ」と署名がしてあつた。その時にはホリイといふ名前は何としても私には思ひ出せなかつた。手紙には次のやうに認めてあつた。

一八——年五月一日、ケンブリッヂ大學——科にて

親愛なる足下——あなたは私から手紙を受け取つて吃驚なさるでせう。吾々はほんのちよつと知つてゐただけですから。實を言へば、私は、今から數年前、私と私の後見してゐるレオ・ヴィンシイとがケンブリッヂの通りで紹介されて一度お目にかゝつたことがあるといふ御記憶をよび起してから用向を申しあげるのがよいと考へるのでありますが、簡單にするために早速用件にとりかゝります。私は近頃あなたが中央アフリカの冒険についてお書きになつた書物を非常な興味をもつて拜見しました。この書物は半分は眞實で、半分は想像でお書きになつたもの

と私は考へます。それはいづれにしても、この書物は私に或ことを思ひつかせたのであります。私の被後見人といふよりもむしろ私の養子である、レオ・ヴィンシイと私とは最近ほんたうにアフリカ探險をして參りました。その探險たるやあなたがお書きになつたものよりもすつと素晴らしいものでありまして、實を言へば私はこれをあなたに見ていたゞいてもあなたが私の話を信じて下さらないかと思つて恥かしい位なのです。それはこの手紙と一緒にお届けした原稿を御覽になればわかります。(この原稿と一緒に「日の御子」といふ甲蟲形の寶石と、壺の破片とを御手渡しいたします。この原稿には、私、といふよりも吾々二人は、一緒に暮してゐる間はこの物語を公表しまいと決心した旨が記されてあります。ですから、吾々は最近に或る事情さへ起らなかつたなら、決心を變へはしなかつたでせう。吾々はもう一度アフリカへ行かうとしてゐるので、そのわけは、この原稿を讀んで下さればあなたにも推量できると思ひますが、こん度の行先は中央アフリカです。しかしこん度の滞在は長くなる豫定で、多分もう歸つて來ないことになるでせう。こんな風に事情が變つて來たので、吾々に一つの問題が起つて來ました。それは、吾々が世の中に二つとないといふ問題です。といふのは、この中には吾々の私生活に過ぎぬものが織り込まれてゐるからと、も一つは、吾々の物語が一笑に附せられたり、その眞偽を疑はれたりする惧れがあるからなのです。この點について私とレオとは見解がちがつてゐたので、いろいろ議論を戦はした末、結局、吾々は妥協したので、即ち、この物語をあなたにお送りして、あなたが發表した方がよいとお考へになつたら自由にこれを發表していただくといふ風に一切あなたにお任せすることにきめたのであります。たゞ、吾々の本名を明かさぬこと、吾々の素性についてもなるべく、明らかに書かないで下さることだけを守つていたゞきたいのであります。

さて此の上私は何を申し上げたらよいでせう？ 別封の原稿に何もかも細大洩らさず書いて

あるといふことを繰り返すより外、私は何も知らないのであります。篇中の不思議な女王について私には何一つ附け加へて申し上げることはありません。日がたつにつれて吾々はあの世にも不思議な女から、もつと色々なこと聞いておかなかつたことが益々をしまれてならぬのです。あの女は一體何者であるか？ どうしてはじめてコオルの洞窟へ来たのか？ あの女の信じてゐたほんたうの宗教は何であつたか？ 吾々はさういふ事柄を一向たしかめてゐないので、そして、今となつては、少なくとも今のところでは、それをたしかめるよしもないのです。以上申し上げたやうな疑問、それから、その他にも澤山の疑問が私の心中に起りますが、今そんなことを訊ねて見たつて詮すべもないことです。

あなたは、この仕事を引き受けて下さるでせうか？ 吾々はすつかりあなたにお任せいたします。その報償としては、あなたには、世にも不思議な物語を世間に發表するといふ名譽をになはれることを私たちは信じます。この物語が尋常一様のローマンスと選を異にしてゐることは、この記録が證明し得ると思ひます。どうぞ、この原稿を讀んで御意見をおきかせ下さい。(原稿はあなたの便宜をはかつて私が淨書いたしました。) 草々。

エル・ホレース・ホリイ

追伸——勿論、若しあなたがこれを發表して下さつた場合に、書物の賣り上げからいくらかでも利益が生じました節は、御随意に處分して下さい。萬一損失を蒙られた場合には、私の顧問辯護士ジョフリイ、ジョーダン兩君に宜しく取計らふやう指圖をしておきます。壺の破片と甲蟲形寶石と、洋皮紙の書類とは、私たちから御返却をお願いするまで、あなたが保管して置いて下さるやう御依頼いたします。——ホリイ生。

この手紙は讀者の想像のとほり、ひどく私を驚かした。私は他のさし迫つた用事のために、半月ば

かり件の原稿を見ずにあたが、この原稿に眼を通した時、私の驚きは一層ひどかつた。讀者もこれを讀んだらきつと驚くだらうと私は思ふ。それで私は急いでこれを出版することに決心して、その旨をホリイ君に書き送つた。ところが一週間たつてから、私は同君の顧問辯護士たちから、私の出した手紙に添へて一通の手紙を受けとつた。それには、ホレース君とレオ・ヴィンシイ君とは、もう既にこの國を立つて西藏へ行つてしまひ、今のところ宛先はわからないと書いてあつた。

さてこれで私の言ふべきことはすんだ。物語そのものに就ては讀者の方で判斷しなければならぬ。私は篇中の人物の素性を一般の世間からかくすために極く少しばかり變更した以外には、正確に原文のままに發表する。私一個の註解はつけないことに決めた。はじめ、私は、殆んどはてしなき歲月の尊嚴を身に纏ひ、夜の翼の如き久遠の影を身に宿してゐるこの一人の女人の物語は、私には意味を捕捉することのできない或る素晴らしい比喩ではなからうかと信じたくなつた。その次には、私はこの物語は大地から力を吸ひとり、周囲の不死の世界に、たえず風や潮がさしひきするやうに、胸の中で情熱が満ちひきしてゐる一人の人間の實質を傳へることによつて、ほんたうに人間が不死であつたらかうもあらうかと思はれる結果を寫し出さうとした大膽な試みかも知れぬと考へた。しかし讀みつけてゆく中に、私はさうした考へも捨て、しまつた。私にはこの物語には眞實の刻印が捺してあるやうに思はれる。だがその説明は私にはできないから、他の人に譲らねばならぬ。已むを得ぬ事情のため、このさ、やかな序文をつけて、これから私は讀者をアツシヤとコオルの洞窟とへ案内する。

出版者記。

## 第一章 深夜の訪問者

世の中には、何から何まで、周囲の細々しい事柄までが、記憶にはつきり刻みつけられてゐて、忘れようと思つて忘れられないやうな事件があるものだ。私がこれから描かうとする出来事もまさにそれだ。私の心には現在でも、まるで昨日の出来事のやうに、それがまざまざと浮んで来る。

かれこれ二十年前のちやうど今日のことであつた。ルドウィツヒ・ホレース・ホリイ、即ちかくいふ私は、或る晩、ケンブリッジ大學の私の自修室で、一生懸命に何でも數學の勉強をしてゐた。私は一週間のうちに、特待校友の試験を受けることになつてゐたのだ。そして先生も學校のみんなのものも、私がきつと素晴らしい成績で合格するだらうと期待してゐたのである。しまひに私は疲れて來たので、書物を投げ出して、暖爐の方へ歩いてゆき、パイプを取つてそれに煙草をつめた。

暖爐の上には一本の蠟燭が燃えてゐて、そのうしろに細長い鏡がかけてあつた。私は煙草に火をつけようとしてふと鏡にうつた自分の顔を見て、ちつと考へこんでしまつた。マッチはもとまで燃えてしまつて、私は指を焦したので、それを下へ落した。それでも私はちつと立つて鏡にうつた自分の顔を見つめながら考へこんでゐた。

「さうだ」とたうとう私は聲を出して獨語を言つた。「俺はこの頭の中で何かやらなきやならん、俺の頭の外側はこの様子ぢや何をする足しにもならんにきまつてるわい。」

といふ意味は、きつと讀者には少々曖昧に聞えるに相違ないが、實は私は自分の肉體の醜いことを言つてゐたわけなのである。二十二位の年齢では大抵の男が、少くも、若いために小綺麗などころを少しはもつてゐるものである。ところが、私にはそれすらもないのであつた。脊が低く、づんぐりとしてゐて、胸は殆んど不具者のやうに凹み、腕は長くて筋ばつてごつく／＼してをり、顔の雜作は重苦しく、眼は灰色で落ちこんでをり、額には厚ぼつたいがさ／＼した黒い毛髪が、まるで伐採した空地へ周囲から林の木が生えてきたやうな工合に、生え下つてゐるのだ。かれこれ二十五年前の私の容貌はこんな風だつた。そして幾らか變つたところもあるが、いまでもざつとそんなものである。カインのやうに、私は烙印をおされてゐた。自然からひどく醜いといふ烙印をおされてゐた。そのかはり、私は、鐵のやうな異常な體力と、相當な知力とを自然から恵まれてゐたのである。まつたくもつて私の醜さは尋常一様の醜さではなかつたので、學校の若いおしやれな仲間、私の體力はほめそやしてゐたくせに私と一緒に歩いてゐるのを人に見られるのを閉口してゐた。だから、私が人間さうひになり、偏屈者になつたのも不思議ではない。私がひとり考へたり、仕事をしたりして、友達といふものをもたなかつたこと、少くも一人しかもたなかつたことは不思議ではない。私は生れながらひとり生きて自然の懷からのみ楽しみをひきだすやうに、世間の人たちからひき離されてゐたのである。女どもは私を見るのも嫌つた。一週間はかり前にも、或る女が、私のきいてゐることを知らな

いで、私のことをお怪けだと言ひ、私を見てから、人間の先祖は猿から出たといふ説に宗旨變へを

したと言つてゐた。尤も一度だけ、或る女が私に氣のあるやうな様子を見せたことがある。私は、この女に、これまで閉ぢこめられてゐた愛情のありたけをそゝぎかけたものである。ところが、私の手へはひる善の金が他人の手へはひるやうになつたが最後、その女は私をすて、しまつた。私は一生懸命にその女を口説いた。あとにも先にも私が生きた人間を口説いたのはその時きりである。何しろ私は、その女の美しい顔にすつかりまいつて首つたけ惚れてゐたのだ。ところが最後にその女は返事をする代りに私を鏡の前へつれて行つて、私と二人並んで鏡へ向つて立つたのであつた。

「妾がヴィーナスだつたら貴方は何でせうかね？」と彼女は言つた。

しかもそれは私がまだ二十歳のときだつたのである。

閑話休題私が鏡にうつつた自分の姿にちつと見入つてゐると、誰か入口の扉を叩くものがあつた。私は扉を開けてゆく前に、耳をすました。といふのはもう十二時近くであつたので、知らぬ人には會ひたくなかつたからである。しかし、私には學校に、といふよりもむしろこの世の中に友達といつては一人しかなかつたが、ことによるとその一人の友達が來たのかも知れぬと私は思つたのである。ちやうどその時に扉の外に立つてゐた人が咳をした。その咳は聞きおぼえのある咳だつたので、私は急いで扉を開けた。

年齢のころは三十位の、今では見る影もなく瘠せてゐるが、もとは不思議な美男子だつたと思はれる、丈のすらつとした男が、右の手に大きな鐵の箱を下げて、その重みによるくしながら急いでひつて來た。彼は卓子の上へその箱をおいたと思ふと、ひどく咳きこんだ。咳いて咳いて顔が紫色になる迄咳きぬいてから、彼はぐつたり椅子に沈みこんで口から血を吐きはじめた。私はコップに少しばかりウイスキーをついでそれを彼に與へた。彼はそれを飲むといくらか元氣を恢復したやうであつた。勿論元氣を恢復したといつても、まだまだひどい容體であつたことは言ふまでもないが。

「どうして寒い外に僕をたゝしておいたんだい？」と彼はすねるやうな口調でたづねた。

「風にあたるのは僕の身體には大禁物だつてことを知つてゐるくせに。」

「誰だかわからなかつたんだよ、君の來るのがあまりおそいもんだから」と私は答へた。

「さう、まつたく晩かつたね、それに僕はこれが君のどこへ來る最後だつてことを信じてゐる。ホリエ君、僕はもう駄目だよ。もう駄目だよ。明日まで僕の命がもつとは信じられない」と彼は強ひて笑はうとしながら答へた。

「馬鹿なことを言ふな」と私は言つた。「これから僕が醫者をよんできてやらう。」

彼は手を振つて叱るやうに私を呼びとめた。「君がさう言ふのは尤もだが、僕は醫者は要らん。僕は醫者のことは研究してすつかり心得てゐる。どんな醫者にだつて僕の命は助からんだ。僕の最期が來たんだ。この一年間僕が生きてゐたのが奇蹟なんだよ。ところでまあ僕の言ふことをよく聽いてくれ給へ。僕に言葉を繰り返させる機會は今後あるまいと思ふから、よく注意してきいて貰ひたい。僕たちは二年も友達としてつきあつて來たが、君は一たい僕のことをどれだけ知つてゐるかい？」

「君は金持ちで、大抵の人が學校を卒業する年輩になつてからこの學校へはひつて來たつてことを僕は知つてゐる。それから君は前に結婚をして、君の細君は亡くなつたてことも知つてゐる。それから君は僕の一番親しい、殆んどたつた一人の友人だつたてことも知つてゐる。」

「僕に息子があることを知つてたかい？」

「それは知らなかつた。」

「實はあるんだよ。今年五つになる。その子供のお蔭で、子供の母親は亡くなつたんだ。だから僕はその子供の顔をどうしても見るに忍びなかつたんだ。ホリイ君、君に僕の息子のたゞ一人の後見人になつて貰ひたいのだ。」

私はもう少しで椅子から飛び上るところだつた。「僕に！」と私は言った。

「さうだ君にさ。僕が二年間君と交際つて君を研究したのは目的なしにやつたことではないのだよ。僕は五分前からもう僕の命は駄目だつてことを知つて、子供とこの品とを託することのできる人を探してゐたんだ。」かう言つて彼は件の鐵の箱を叩いた。「そしてやつと見つかつたのが君だよ、ホリイ君、君はこぶこぶのある樹と同じで心が堅くてしつかりしてゐる。」

「まあきいてくれ。この子供は此の世の中で一番古い家柄の代表者になるのだ。こんなことを言ふと君は笑ふかも知れんが、いつかは君にも成る程と合點がゆくこと、思ふ。僕の六十五代目或は六十六代目の直系の先祖はイシスの埃及僧だつたんだ。尤もこの人はカリクラテスといつて希臘の血統をひ

いた人だがね。このカリクラテスの父親は第二十九王朝のハク・ホオルといふメンデシアの王に仕へた希臘の傭兵で、その祖父が曾祖父にあたるのが、ヘロドタスの言つてゐるカリクラテスだと僕は信じてゐる。紀元前三百三十九年か或はその頃ちやうど王の最後の没落の時に、このカリクラテスは、妻帯をしないといふ誓を破つて、彼に戀をしたやんごとなき王女と手をとつて埃及から脱走したのだ。そして彼の船はどこかアフリカの海岸に難破して打ち上げられたのだ。それは今のデラゴア灣の附近か、それよりも少し北の方だと僕は思ふ。で彼等夫婦の命は助かつたのだが、ついて來た家來の者どもはみんななぶり殺しにされてしまつたのだよ。二人はそこでひどく艱難を嘗めたが、たうとう、豪勢な蠻人の女王に歡待されるやうになつたのだ。それは一種異様な魅力をもつた白人の女でこの女が或る事情のために僕の先祖のカリクラテスを殺したんだ。その事情は今僕には言へないが、君はそれまで生きてさへあれば、いつかこの箱の中へはひつてゐる書類ですつかり知る事ができる。しかし、彼の妻は、どうして逃げたのかわからぬが、子供をつれてアテンへ逃げたんだ。その子供の名前はチシステネスといふのだ。これは大復讐者といふ意味なのだよ。

「それから五百年か或はそれ以上もたつてから、この一家は羅馬へ移つて行つたのだ。どうして羅馬へ行つたのか、まるで痕跡が遺つておらぬのでわからんが、多分チシステネスといふ名前のもつてゐる復讐といふ意味を保存するためにヴィンデックスといふ姓を名乗つたらしい。その後この一家は五百年かそこら羅馬にゐたのだが、紀元七百七十年にシャルマン大帝がその頃この一族の住んでゐた

ロンバルヂイへ侵入して来たのだ。ヴィンデックス家の家長は、何でもこの大帝に歸屬して、大帝がアルプス山をこえて歸國するときに、その一行に加はつて、たうとうブリタニイに落ちついたらしい。それから八代たつて、この一家の嫡孫はエドワード懺悔王の治世に英國へ渡り、ウイリヤム王の治世には非常に高い身分に進んだのだ。それから今までは、僕はずつと切れ目なしに先祖の系圖を辿つてゆくことができる。といつてもヴィンシイ家——これはヴィンデックスといふ名前が英國に住むやうになつてから色々に轉訛して最後にかうなつてしまつたのだ——は特別に有名な家柄であつたわけでもなく、大して世間へ名前が出てゐたわけでもないのだ。時には軍人になつたこともあり、時には商人になつたこともあるが、チャールズ二世時代から今世紀のはじめまではみんな商人だつた。千七百九十年頃に僕の祖父が酒屋をはじめてかなりな財産をこさへて隠居したのだが、千八百二十一年に祖父が死ぬと父が相續してその財産は大抵つかつてしまつたのだ。それから十年たつて父も死んだが、父があとにのこしてくれた財産は、正味年收二千磅位なものだつた。そこで僕があれのことで探検を企てたんだ」と言ひながら彼は鐵の箱を指した。「ところがそれは見事に失敗してしまつた。歸りがけに僕は南歐地方を旅行して最後にアテンへ着き、そこで僕は愛妻に邂逅したのだ。この女は僕の古い先祖と同じやうに『美人』と言つてもはづかしくない女だつた。僕がこの女と結婚してから一年たつと子供が生れたがそれと同時に妻は死んでしまつたのだ。」

彼はしばらく言葉をとめて、手で顔をおほうてゐたが、やがて又言葉をつづけた。

「僕は結婚のために計畫を中止して一時道草を食つてゐたのだ。そして今ではもうその計畫を遂行することができなくなつてしまつたのだ。僕には暇がないのだよ、ホリイ君、僕にはその暇がないのだ！ 君が承知してくれさへすれば、いつか君にはすつかりわかるだらう。妻が亡くなつてから、僕はまた氣を變へて、最初の計畫にかへつたのだが、それには第一に東國の言葉、特にアラビヤ語を完全に知つておく必要があつたのだ。少くも僕はさう考へたんだ。で、その勉強のために僕はこゝへ来たわけなんだよ。だが、すぐに僕の病氣はわるくなつて、今ではもう僕の最期が来たのだ」かう言ひながら、彼はまるで自分の言葉の意味を強めるものゝやうに又してもおそろしく咳き入つた。

私はもう一度ウイスキーをついでやつた。すると彼はしばらくやすんでから語りつづけた。

「僕はまだ息子のレオを赤ん坊の時分から見たことがない。見るに堪へなかつたのだ。けれども噂によるとあの子は伶俐な美しい子供になつてゐるといふことだ。この封筒の中に」と言ひながら彼は私の宛名を記した一通の手紙をポケットから取り出して「あの子供の教育方針についての僕の意向が認めてある。それは少し特別な方法だから、赤の他人にたのむわけにはゆかない。もう一度お願ひするが、どうだ、ひき受けてくれないか？」

「何を引き受けるのだから、はじめにそれをきいておかなくちや」と私は答へた。

「僕の息子のレオが二十五歳になるまで君のそばにおいて面倒を見て貰へばよいのだよ。學校へやつてはいけないんだぜ、いゝか。あの子が二十五の誕生日で君の後見の役目はすむんだ。さうしたら、

僕が今君に渡す鍵で（彼は卓子の上に鍵を置いた）此の鐵の箱を開け、中にあるものをレオに見せ、書類を讀ませて、そこに書いてあることをやつて見るかどうかきいて見ればよいのだ。あの子にはそれをやらなければならぬ義務は少しもないのだよ。條件としては、僕の現在の年收が二千二百磅ある。その半分は、遺言で終身君の收入として遣しておく、千磅は後見の謝禮として君の所得にし、百磅は子供の養育費としてね。残りの半分は、レオが二十五になるまで積んでおいて、あの子が今僕と言つた探検をやらうと思へばその費用にあて、おくんだ。」

「若し僕が死んだらどうするかね？」と私は訊ねた。

「その時には裁判所に後見人になつて貰はなくちやならん。だが、この鐵の箱はレオの手に渡るやうに君から遺言しておいて貰はないと困る。ねえホリイ君、どうぞ承諾してくれたまへ、きつと君のためにもなると僕は思ふ。君は俗世間の仕事には適しない男だ。もう二三週間もすれば君は大學の待校友にもなれる身だ。さうすれば、その方からの收入と、僕が君に遣しておく收入とで裕福な學究生活を送れるよ。そして君の大好きなスポーツもやれる。かういふ生活がちやうど君には適してゐるぢやないか。」

彼は言葉をついて、心配さうに私を見た。けれど、私はまだ躊躇してゐた。あまり妙な頼みだつたものだから。

「ホリイ君、たのむよ、僕たちは親しい友人だつた。それに今となつては、僕は別の方面へ頼んでみる時間の餘裕がないのだ。」

「よろしい。ではやつて見よう」と私は言つた。「但し此の手紙に僕の氣を變へさせるやうなことが書いてあれば別だがね」かう言ひながら私は卓子の上の鍵のそばに彼がおいた封筒に手を觸れた。

「有り難う、ホリイ君有り難う。何も難しいことはないのだ。君がこの子供の父親になることを神に誓つてくれ。そして、僕の指圖に文字通りしたがつてくれ。」

「よし誓はう」と私は嚴肅に言つた。

「よろしい。だがおぼえておてくれ給へ、ことによると僕はいつか君の誓ひのあかしを求めらるかも知れんから。僕は死んで人に忘られても、矢つ張り生きてるんだよ。死んでいふものはない。死はただ一つの變化なんだ。しかも、いつか君にもわかる時が来るだらうが、この變化ですらも、場合によつては無期限に延期することができるんだ」と言ひながら彼はまた恐しい咳の發作にとらはれた。

「では僕はもう行かなくちやならん」と彼は言つた。「そこに箱がある。それからその書類の中には僕の遺言がある。その遺言によつて僕は子供を君にあげける。君には十分の謝禮をする。僕は君の正直なことは知つてゐる。だが萬一、君が僕の信頼に裏切るやうなことがあつたら、僕はきつと君に崇るよ。」

私はだまつてゐた。實を言へば面喰つてしまつて言葉が口へ出なかつたのである。

彼は蠟燭をかゝげて鏡に映つてゐる自分の顔を眺めた。それは以前は美しい顔であつたが、病ひの



ために見るかげもなくなつてゐた。「蟲の餌食だ」と彼は言つた。「もう二三時間で僕の身體が剛く冷たくなるんだと考へると妙な氣がするね。ねえホリイ君、人の一生はよくしなから生きてゐる價値のないものだね、戀してゐる時のほかは。少なくとも僕の一生はさうだつた。だがレオの一生は、若しあの子が勇氣と信仰とさへもつてゐればさうでないかも知れん。では左様なら！」かう言つたかと思ふと彼は急に懐かしさに堪へぬものゝやうに、兩腕で私を抱いて、私の顔に接吻して、それからるりと後を向いて出て行かうとした。

「まあ待ちたまへヴィンシイ君」と私は言つた。「ほんとに君が考へてゐる程身體がわるいなら僕が醫者をよんでくるよ。」

「いけない、いけない。」と彼は熱心に言つた。「誓つてそんな事はしてくれない。僕は今死ぬんだ。しかも毒をのんだ鼠みたいに獨りで死にたいのだ。」

「君が死にかゝつてるなんて僕にはどうしても信じられぬえ」と私は答へた。彼は微笑を浮べて、「忘れてくれるな」と言ひながら出て行つた。私は、椅子に腰を下して、眠つてゐたのぢやないかとあやしみながら眼をこすつた。だがどうしても眠つてゐたとは思はれぬので、こんどはヴィンシイが酔つてゐたに違ひないと考へはじめた。なる程私は彼がひどい重病であることは知つてゐるが、明日まで生命がもたぬことをはつきり知ることのできる筈はない。もしそれ程危篤に迫つてゐるのなら、あんな重い鐵の箱などをもつて歩けるわけがない。それによく考へて見ると、彼の話した物語も到底信じられないやうに私には思はれた。今でこそわかつたが、その頃はまだ私も若かつたので、世間一般の人たちの常識でとてもありさうにないと思はれるやうなことが、この世におこり得るなんてことは、私は氣もつかなくかつたのである。五つにもなる子供を赤ん坊の時から見ない人間が一體あるだらうか？ どうもありさうにない。自分の死期を正確に豫言し得る人があるだらうか？ これもありさうにない。自分の先祖を紀元前二世紀までもおぼえてゐて、急に自分の子供の後見を一から十まで學校友達にまかせて、その友達に財産を半分わけてやるなんて人があるだらうか？ 到底ありさうにない。ヴィンシイはきつと酔つてゐたか氣が狂つてゐたかにきまつてゐる。さうだとするとこれは一體どういふわけだらう？ 封をした鐵の箱には一體何がいられてゐるのだらう？

私は何もかもわからなくなつてしまつたので、そのまゝに眠ることにきめ、ヴィンシイが私にのこしていつた鍵と手紙とを手文庫の中へ藏ひ、鐵箱を大きな旅行靴の中へかくしてベットへ行き、すぐにぐつすり眠つてしまつた。

ほんの五六分とろつとしたと思ふと私は誰かによび起された。私はベットのの上に坐りなほつて眼をこすつた。もうまつ晝間の八時だつた。

「どうかしたのかい、ジョン？」と私は、ヴィンシイと私との受持ちの小使のジョンにたづねた。「まるで幽霊でも見たやうな顔をしてるぢやないか！」  
「そ、そのとほりですよ」と彼は答へた。

「幽霊よりもつといやな死骸を見たのです。いつものやうにヴァインシイ様を起しにまゐりましたところが、ヴァインシイ様は、部屋の中に、かたくしやちこ張つて死んでをられるのです。」

## 第二章 歲月は過ぎて

ヴァインシイの頓死は、もちろん學校内に大騒ぎを起したが、彼の重病はみんなに知れてゐたことでもあり、醫者の死診斷書も満足なものであつたので、別に取調べは行はれなかつた。當時はそのやうな取調べは今日程嚴重に行はれなかつたのである。私も別に訊問を受けたのではないから、ヴァインシイが死んだ晩の二人の會見の模様を進んでこちらから上申するにも及ぶまいと考へたので、たゞ、ヴァインシイがいつものやうに私の部屋へ遊びに來たといふことだけを知らせるにとゞめた。葬式の日、倫敦から一人の辯護士がやつてきて、かはいさうなヴァインシイの遺骸を墓場まで送つてゆき、それから書類と財産目録とをもつて歸つて行つた。勿論、私が保管を頼まれた鐵の箱は私の手許にのこつてゐたのである。それから一週間このことについては何事も私の耳にははひらなかつた。實を言へば、私の注意は、特待校友の試験の方へすつかり奪はれてゐたので、葬式にも參列することができず、その辯護士にも會へなかつたやうな始末であつた。だがそのうちに試験もすんだので、私は自分の部屋へ歸り、試験がうまくいつたので、いゝ氣持になつて安樂椅子にしづんでゐた。

ところが、數日間試験のことばかりに奪はれてゐた私の考へは、試験がすんでほつとしたと思ふまゝに、忽ち、あはれなヴァインシイの死んだ晩の事件に返つて來た。そして私は又もや、一體あれはどういふわけであるか、あの妙な鐵の箱はどう處分したらよいかと思ひわづらつた。私は考へれば考へる程わからなくなつた。深夜の不思議な訪問、あんなに間近に迫つてゐる死の豫言、私が彼に向つて誓つた嚴肅な誓ひ、彼がその誓ひの實行をあの世から監視してゐると言つた言葉、凡てが何のことやら私にはわからなかつた。あの男は自殺したのぢやなからうか？ どうもさうらしい。あの男の言つた探検といふのは一體何のことだらう？ 私は迷信をかつぐやうな人間ではないのであるが、あまりに不思議な事情なので薄氣味が悪くなつた。

私が考へこんでゐるところへ、扉を叩く音がして、青い封筒にはひつた一通の手紙が私の許へ運ばれた。私はすぐにそれは辯護士から來たのであることを知つた。そして、直覺的に、ヴァインシイが私へ依頼したことに關するものであることを豫感した。私は今でもその手紙をもつてゐるが、それには次のやうに書いてあつた。

拜啓、本月九日ケンブリッジ大學にて死亡された小生等の依頼人故ヴァインシイ氏の遺言の復寫を同封御送附申上げ候。小生等はこの遺言執行人にこれあり候。この遺言により、貴下は、當年五歳になる故人の息レオ・ヴァインシイの後見人たることを承諾する、條件にて、故人の遺産の約半額に對する利子を終身受けらるゝことに相成り居り候。故人の遺産はコンソールズ銀行に預金いたしあり候。子息の引渡し方並びに貴下の受けとらるべき利息の支拂ひ方

について何分の御指圖にあづかり度く此段貴意を得度く候。草々。

ジョップフリー  
ジョーダン

ホレース・ホリイ様

私は手紙を下に置いて遺言に眼を通した。この手紙で見ると、ヴィンシイが死んだ晩に私に話したことは事實であることがわかった。兎に角、あの話はほんたうなのだ。私は子供を引きとらねばならぬ。私は急にヴィンシイが箱と一しよに私にのこして行つた手紙のことを思ひ出したので、それを取り出して開封して見た。その中には、彼が既に私に口で言つたこと、即ち、レオの二十五歳の誕生日に箱を開くことについての指圖と、子供の教育方針とが認めてあつた。その教育方針中には、希臘語、高等數學、アラビア語等が含まれてゐた。最後に追伸として、めつたにそんなことはあるまいと思ふが萬一レオが二十五歳になる前に死んだ時には、私が箱を開けて、若し私が適當と思つたら、箱の中に書いてある指圖通りに行動し、若し私が適當であると思はなかつたら中味はすつかり破棄して、どんなことがあつても、他人にそれを手渡してはならぬと書いてあつた。

この手紙には、私の今までに知つてゐたこと以上のことは何も書いてなく、従つて、私が亡友に約束した仕事をはたすのを拒む理由は何もなかつたので、私の進むべき道はたゞ一つしかなかつた。即ち、ジョップフリーとジョーダンとに宛て、委細承知の返事を認め、十日たつたら、早速レオを引き取つて喜んで後見にとりかゝる旨を言ひ送ることであつた。それがすむと、私は學校の當局に面會して、必要と思ふ話の要點を手短かに話し、若し特待校友の試験に合格したら、子供と一緒に住むことを許されたいと交渉して、やつと當局の許可を得た。無論私は内心で試験に合格することは殆んどきまつてゐると信じてゐた。併し學校側では、私が校舎を出て下宿をするといふ條件で、私の願ひを許可したのであつた。私は、學校の正門のすぐ近くにやつと恰好な貸間を見つけた。その次には附添ひを見つけないければならぬ。子供はもう大丈夫手なしに育つてゆく年齢になつてゐたので、私は女ではなく、適當な男の附添ひを探すことにきめた。幸にして、ジョップといふ丸顔の上品な青年が見つかつた。この若者は鶏小舎の手傳をしてゐたのであるが十七人も家族のある家に育つたので、子供のくせはよくのみこんであるから、レオの世話は喜んで引き受けると思つた。それから私は件の鐵の箱を叩へ持つていつて、自分の手で銀行へ保管をたのみ、子供の衛生や育兒に關する書物を買つて来て、先づ自分で讀み、ジョップにも讀んで聞かせて、子供の到着を待つてゐた。

たうとう、子供は一人の年配の女につれられて來た。この女は子供と別れるときにひどく泣いて別れををしんだ。子供は非常に美しい子供だつた。實際私は此のやうな申し分のない子供はあとにもさきにも見たことがない。眼は灰色で、額は廣く、顔は、こんな年頃で、すでに浮彫をした玉のやうで、たるんだり瘦せたりしてゐるところは少しもなかつた。だが、何よりも人を惹きつけたのは髪であつた。それは純粹な黄金色で、くつきりした顔の上で、ちんまりと縮れてゐた。彼は自分をつれて

来た乳母とわかれるときに少し泣いた。この場の光景を私は一生忘れることができぬであらう。彼は窓からさしこむ日光に黄金色の捲毛をなぶらせながら一方の眼を拳でおさへ、一方の眼で私たちを見ながら立つてゐた。私は椅子に腰をかけて、手をのばして、子供に私の方へ来るやうに合圖をし、ジョップは隅つこの方で、クツクツ咽喉を鳴らしてゐた。彼は以前鶏を馴らしたときの経験で、さうすれば子供がなついて来ると考へたのである。それから又彼は、妙な恰好をした木馬を、おどけた調子で、前へ後へ走らせて見せた。數分間こんなことをしてゐるうちに、だしぬけに子供は兩腕をのばして私のそばへ走つて来た。

「僕おちさんが好きだよ、おちさんはおつかない顔をしてるけれど、い、人だもの」と彼は言つた。十分間もたつと、彼は、大きなバタ麵麩の片をいかにもうまさうに食べてゐた。ジョップはそれにジャムをつけてやらうとしたが、私は衛生の書物に子供にジャムを食べさせてはいけなさと書いてあつたからと注意してそれをやめさせた。

それからしばらくたつと私は豫期のとほり特待校友の試験に合格したので、レオは全校の人氣者になつてちやほやされるやうになつた。けれども、私はその頃の楽しい思ひ出をこゝで書いてゐるひまがない。かすくの思ひ出は次から次へと過ぎ去つて、私たち二人は益々親しみを増していつた。世の中の子供の中で私がレオを可愛がつた程可愛がられた子供はあまりなく、世の中の父親の中で私がレオになづかれた程なづかれた父親もたんとはないであらう。

悔みなき歲月は流れ流れて、子供は少年になり、少年は青年になつた。彼の身體が成長するにつれて、彼の容貌の美しさも増していつた。彼が十五かそこらになつた時、學校界隈のみんなの者は彼を美少年と名づけ私にけだものといふ仇名をつけた。この名前は、私たちが、街を歩いてゐるときにつけられた名前である。私たちは二人で街を歩くのが習慣だつたのである。ある時、彼の二倍もある肉屋の大漢が、うしろから私たちの仇名を鼻歌で唄つて歩いたのがもとで、レオはこの大漢に食つてかかつて、物の見事に打ちのめした。私は見ないふりをして歩いてゐたが、喧嘩があまりはげしくなつたので、後をふり向いてレオに聲援してやつた。學校では寄るとさはると私たちをこの仇名でからかつたが、私にはどうすることもできなかつた。そのうちにレオが少し大きくなると、學生等は今度は別の仇名をつけた。私のことをチャロンと言ひ、レオのことを希臘の神と呼んだ。私の仇名はまあ我慢する。私はこれまでだつて男ぶりのよかつたことはないし、これから年をとれば猶更らさうなのだから。ところがレオの仇名ときたら實に穿ち得て妙なるものであつた。二十一歳のときのレオは若いアポロの像のかほりをつとめたつてはづかしくない程だつた。私は彼ほど美男子で、しかも自分ではまるでそのことに氣のついてゐない男を見たことがない。彼の精神はといへばきびくしてゐて、潑刺たる理知のひらめきをもつてゐたが、決して學者ではなかつた。學者のやうなぐづくしたところが彼には寸分もなかつた。私たちは彼の教育に關する父ヴィンシイの指圖を嚴格に守つた。そして大體に於ては、特に希臘語とアラビア語については、結果は満足なものであつた。私も彼の勉強の助

けになるやうにアラビア語を勉強したが、五年の後には、彼は私にまけぬ位——いや殆んど私たちにアラビア語を教へてくれた先生にもまけぬ位この言葉が上達した。私は狩獵家としては他人にひけをとらない方だったので、いつでも秋になると狩獵や魚釣りに出かけた。時にはスコットランドへ行ったり、ノルウェーへ行ったり、一度は露西亞まで行つたこともあつた。私は射撃は上手であつたが、こんなことにかけてすら、レオは私以上の腕前をもつやうになつた。

レオが十八歳になつた時、私は學校内の自分の部屋へ歸り、レオを私の學校へ入れた。そして二十一のとき彼は、別段高い學位ではないが、立派な學位を得た。その時に、私ははじめて彼の身の上や、不思議な因縁をそれとなく話してきかせた。いふまでもなく彼はその詳しいことをきかたがたが、私は、いまはまだ話すわけにゆかないことを説明してやつた。その後、ひまをつぶすために、私は彼に法律の勉強をしたらどうかとすゝめたので彼は私の勸告にしたがひ、ケンブリッジで勉強し、倫敦へ夕食を食べに行くといふ風にして日を送つてゐた。

レオについてたゞ一つ氣にかゝることは、彼にあつた若い女が、皆が皆ではないまでも、少くも大部分彼に戀をするやうになつたことであつた。そのために色々な面倒が起つて、その當時はひどく困つたが、今はそんなことを述べる必要はない。大體に於て彼の態度はよかつたと言ふだけにとゞめておかう。

かくて歲月は過ぎ去つて、たうとうレオの二十五歳の誕生日が來た。この不思議な、或る意味ではおそろしい物語は、この時からほんたうにはじまるのである。

### 第三章 アメナルタスの壺片

レオの二十五歳の誕生日の前日、私たちは二人で倫敦へ行き、二十年前に私が保管をたのんでおいた不思議な箱を引き出した。私はおぼえてゐるがそれを出してくれたのは、前にそれを保管してくれたのと同じ事務員であつた。この男は自分が箱をしまつたときのことをよくおぼえてゐた。さうでなければ捜し出すのに非常に骨が折れたであらうと彼は言つた。それほどにもその箱は蜘蛛の巣におほはれてゐたのである。

その晩私たちは貴重な荷物をもつてケンブリッジへ歸つて來た。その晩は昂奮して私たちはおちおち眠られなかつた。夜が明けるとレオは部屋着のまま、私の部屋へやつて來て、すぐに仕事に取りかゝらうと言つた。私はそれを制して、この箱は二十年も待つてゐたんだから、ついでに朝食がすむまでまたしといた方がよからうと言つた。で私たちは常になく九時かつきりに朝食の卓についた。私は自分の考へにあまり夢中になつてゐたので、恥かしい話だが、レオの茶の中へ砂糖と間違へてベエコンの片を入れた程だつた。ジョップにも昂奮が感染してゐたと見えて、私のセエヅル燒の茶碗の柄を壊してしまつた。この茶碗は、マラーが風呂場で刺し殺されるすぐ前につかつたのと同じものだと私は信じてゐる。だが、たうとう朝食も片附いたので、私はジョップに命じて箱をもつて來させた。彼

はそれに疑念を挟むもの、やうに、こはく、それを卓の上において部屋を出てゆかうとした。

「ちよつと待つてくれ」と私は言った。「レオに異議がなければ、うかうか他言するやうな心配のない第三者に證人として立ち會つて貰ひたいんだがね。」

「それがい、ですね、叔父さん」とレオは答へた。私は彼に自分のことを叔父さんと言はせてゐたのである。

「ジョツブ、扉をしめてくれんか、そして僕の手文庫をもつてきてくれ」と私は言った。

彼はその通りにした。私はレオの父親の可哀さうなサインシイが臨終の晩に私にくれた鍵を手文庫の中から取り出した。鍵は三つあつた。一番大きいのは比較的近代の鍵で、二番目のはひどく古めかしいものであつた。三番目のと來たら、これまでに一度も見たことのない鍵で、何でも純銀でこしらへたものらしく、把手の代りに棒がついてゐて、棒の端には幾つかの溝が彫りぬいてあつた。どう見ても不細工な鐵道の鍵としか思へなかつた。

「さあ二人ともい、かね？」と私はダイナマイトの雷管に火をつけるときに人が言ふやうに言った。二人とも返事はしなかつた。私は大きい鍵をとつて、鍵穴へ少しばかりサラダ油をさして、手が慄へるので二三度しくじつた後やつとのことで鍵をさしこんだ。レオは前屈みになつて兩手で蓋をもち、蝶番が錆びついてゐたので、うんと力をこめてやつと蓋を開けた。中には埃だらけな箱がはひつてゐた。この箱は難なく取り出すことができた。私たちは幾星霜の間に積つた箱の上の塵を拂つた。

それは黒檀か、或はそれに似た木目の細かい黒い木でつくつたものらしく、平たい鐵の帯でぐるぐる縛つてあつた。随分古いものと見えて、流石の堅い木もところどころ朽ちこぼれてゐた。

「さあこん度はこれだ」と言ひながら私は二番目の鍵をさし込んだ。

ジョツブとレオとは息もつかずに固唾をのんで前へ屈んでゐた。鍵はぐるりとまはつた。蓋をあけると私は思はずあつと叫んだ。それもその筈だ。中には約十二吋四角の高さ八吋ばかりの見事な銀の小函がはひつてゐたのだもの。それはまぎれもなく埃及の職人がつくつたものと見えて、四本の脚はスフィンクスの形にこさへてあり、圓屋根型の蓋の上にも一つのスフィンクスがついてゐた。勿論この小函は長の歲月のために色はくすんで、凸凹ができてゐたが、その他の點ではまだがつちりしてゐた。

私はこの小函を取り出して、卓の上に置いた。それから、殆んど完全な沈黙のうちに、妙な恰好をした銀の鍵をさしこんで蓋を開けた。中には縁端のところまで、異様な褐色の細片がぎつしりつまつてゐた。それは紙といふよりも植物の纖維のやうなものであつたが、それが何であるかは私にはわからなかつた。それを注意深くとりのぞくと、底から三吋ばかりのところ、普通に近代的な封筒に入れた一通の手紙が出て來た。それには、亡友サインシイの筆蹟で次のやうに認めてあつた。

「我が子レオへ、若し彼がこの小函を開く時まで生き長らへてゐたならば。」

私はこの手紙をレオに渡した。レオは上書きをちよつと見てから、それを卓の上に置き、つゝい

て函の中を調べて見るやうに私に合圖した。その次に私が見出したものは、丁寧に巻いた羊皮紙の巻物であつた。それをひろげて見ると、やはりヴィンシイの筆蹟で「壺片に記されたる階書體希臘文字の翻譯」と記されてあつた。私はそれを手紙のそばに置いた。その次に私がとり出したのはいま一つは古ぼけた羊皮紙の巻物で、それは長い年月のために黄色に變色して皺だらけになつてゐた。それをひろげて見ると、矢張り同じ希臘の原文をブラック文字の羅典語に翻譯したものであつた。それは書體や文體から推して、一見十六世紀のはじめ頃のものと、やうに思はれた。

この巻物のすぐ下に何か堅い重いものが黄色い麻布につゝんで、纖維質のもの、上にのせてあつた。私たちは、ゆつくりと、注意深く、麻布をほどいて見ると、くすんだ黄色の古ぼけた大きな壺の破片が中から出て來た。この壺片は、私の推定によると、普通の中型の古代希臘酒器の一部であるやうに思はれた。それは長さ十吋半、幅七吋で、厚さは四分の一吋位で函の底の方に向いてゐた凸出した面の方には後期の階書體希臘文字がぎつしり一面に書いてあつた。文字は處々色が褪せてゐたけれども大部分は完全に読みわけることができた。文字は、古代人のよく使つた蘆筆で、非常に念入りに書いたものであることがありありとわかつた。忘れぬうちに言つておかねばならぬが、この不思議な破片は、よほどの昔に二つに壊れたのを、セメントと八つの長い鋌とでつなぎあはせたものであつた。破片には内側にも澤山文字が書いてあつたが、それはかなり読みにくい文字で書いてあり、筆者もまちまちで、書いた年代もまちまちであつた。

「もう何もありませんか？」とレオが昂奮して囁いた。

私は手さぐりをして、小さい麻布の袋に入れた固いものを取り出した。袋の中から出て來たのは象牙に描いた美しい小さな肖像畫と小さなチヨコレート色をした甲蟲形のものであつた。それには次のやうなものが彫つてあつた。



この記號は、その後私たちが確めた所によると「日輪の御子」といふ意味であつた。そして肖像畫はレオの母親——美しい、黒服の女の畫像であつた。この畫の裏には、あはれなヴィンシイの筆蹟で、「我がいとしき妻」と書いてあつた。

「これでみんなだ」と私は言つた。

「ふむ」と答へて、レオは、なつかしさうに肖像畫に見入りながらそれを下に置いた。

「ぢやこれから手紙を讀んで見よう」と言ひながら、彼は片時も猶豫なく、封を切つて、聲をあげて

読み出した。

「我が子レオよ——お前が生きてゐて此の手紙を読む時は、お前はもう一人前の大人になり、自分はすつと前に死んでしまつて、殆んど凡ての人に、すつかり忘れられてゐることであらうと思ふ。だがこれを読むときは、よくおぼえてゐるが、自分はかつて生きてゐたのであり、現在でも生きてゐるかも知れないのだ。そして、筆と紙とを通じて、死の深淵をよこぎつて、お前に手を差しのべてゐるのだ。自分の聲が、墓場の沈黙の中からお前に話しかけてゐるのだ。自分はとつと死んでしまつてお前の心の中には自分の記憶は少しものこつてはをらぬのだが、それでも猶ほ、お前がこれを読む時には、自分はお前のそばについてゐるのだ。お前がこの世に生きてから、自分はお前の顔は殆んど見なかつた。このことは許してくれい。お前の命は、自分が此の上なく愛してゐた女の命の代りなのだ。そのつらさが自分には今だに轟々と身に沁みて感じられる。自分が長く生きてゐたら、そのうちにはこんな馬鹿げた感情に打ち克つ事ができるだらうが、自分の定命はもう旦夕に迫つてゐるのだ。自分は、自分の肉體的、精神的の悩みにもう堪へられん。だから、お前の將來の幸福のために、これから少しばかり後始末をしておいて、それがすんだら、この悩みの結末をつけるつもりだ。自分がまぢがつてゐたら、神よ許したまへ。いづれにしても自分の壽命はせいふくと一年しかなかつたのだから。」

「やつぱりあの時自殺したんだな、さうだと思つた」と私は叫んだ。レオはそれには答へないで読みつづけた。

「ところで、自分のことはもうこれだけで澤山だ。これから言はねばならぬことは、とつと死んで、すつかり忘れられてしまつた自分のことではなくて、生きてゐるお前のことだ。自分の友人ホリエイこの男が承知してさへくれ、自分はこの男にお前の後見をたのむつもりだから、お前は、お前のひどく古い血統のことについて何事かを聞いたことであらう。この小函の中には、それを證明するに十分な材料が入れてある。お前の遠い先祖が、壱片に書き記しておいた不思議な傳説をお前は見ただらうが、それは自分の父親が臨終の床で自分に渡してくれたもので、自分はあれを見て逞ましい想像にかられたものだ。自分はまだ十九の年に、真相をしらべに行かうと決心した。自分どもの先祖の一人がエリザベス朝時代に矢張りそれを企てたが可哀さうに失敗してしまつたのだ。その時自分が遭遇した事柄を一々述べてゐるわけにはゆかないが、次のことは、自分は、自分の眼ではつきりと見たのだ。ザンベジ河が海に注ぐところから少し北にあたるまで誰も行つたことのないアフリカの海岸に、一つの岬があつて、その先端に、この書類に書いてあるのと同じ、黒人の頭のやうな形をした塔がそびえてゐる。自分はそこへ上陸して罪を犯したために仲間からすてられてゐるついでに一人の土人から、遙か奥地の方に、盃形の大きな山と、澤山の沼に圍まれた洞窟とがあるといふことをきいた。それから又その地方の住民はアラビアの土語を話し、其首長は美しい白人の女だといふことも聞いた。この女を見たものは滅多にないが、この女は生きて者に對しても死んだ者に對して



も、凡ての者に對して權力をもつてゐるといふことである、自分がこのことをたしかめてから二日目に、その男は沼地を渡るときに熱病にとりつかれて死んでしまひ、自分は食料品の缺乏と後に自分を斃した病氣の兆候が見えた、めで、餘儀なく歸國の途につかねばならなくなつたのである。

その後自分が遭遇した冒険については今語る必要はない。自分はマダガスカルの海岸で難船して、數ヶ月の後に英國の船に助けられて、アデンへ護送され、十分な用意ができ次第探検を實行するつもりで、英國へむけ出發したが、歸途希臘へたち寄つて、そこで、戀は凡てのものに勝つといふ諺のとほり、お前の親愛なる母親にあつて結婚し、お前が生れて、お前の母は死んだのだ。それから自分は最期の死病にとりつかれて、死ぬためにこゝへ歸つて來たのだ。けれども自分はまだ心細い希望をすてないで、若し病氣がなほつたら、もう一度アフリカの海岸へ行つて、自分達の家門に幾世紀もの間傳はつてきた傳説の神祕を解きたいと思つて、アラビア語の勉強をはじめたのだ。しかし自分の身體はよくはならなかつた。これで自分の關する限りではこの物語はおしまひである。

「だが我が子よ、お前の話はこれでおしまひではないのだよ。で自分は自分の勞作の結果と、代々傳つて來た原物の證據品とお前に渡すことにする。たゞ自分はお前が、この書類に書いてある此の世に於ける最大の祕密をしらべて見ようと思ふか、それともそんなことは狂女の頭の中に空想されたつまらぬつくり話としてうつちやつてしまふかを自分で判斷することのできる年齢まで、わざとお前の手にこれを渡さないやうな手筈にしておいたのである。

「自分はこれはつくり話ではないと思ふ。生命といふものが存在する以上、それを永久に保存する手段が存在しないわけはないではないか。だが自分はこのことについてお前の頭に偏見を植ゑつけたくない。お前が讀んで自分で判斷するがよい。若しお前が探検をやつて見ようといふ氣になつたら、費用にこまるやうなことはないやうにしてある。それとも、この傳説を荒唐無稽なものとして満足するなら、壺片も書類も破毀して棄て、しまつて貰ひたい。そして自分たちの一族から惱みの種を取りのぞいてほしい。おそらくそれが最も賢明なやりかただらう。未知のものは一般に怖れられるものだ。それは諺にあるやうに、人間の内心に巢喰ふ迷信のためではなくて、未知のものは實際に怖るべきものであることが屢々あるからだ。世界を動かしてゐる廣大神祕な力に要らざる手だしをするものは犠牲となつてたふれることがありがちだ。しかも萬一目的を達したとしても、遂にお前が試練に打ち克つて永劫の美しさと若さとを保つことができるやうになり、神身の腐朽に超絶する力を得ることができるやうになつたとしても、そのためにお前が幸福になれると誰が言はう？ お前の欲するまゝにするがよい。萬物を司る神の力が、お前とお前が成功の曉にはその主となる世界との幸福になるやうに選擇を誤らしめざらんことを祈る。さらば！」

これで、署名も日附もない手紙はあわたしくもおしまひになつてゐた。「それをどうしますかね、おちさん」とレオは手紙を卓子の上に置きながら言つた。「吾々神祕をさがしてゐましたが、どうやら一つ見つかつたやうですね。」

「どうするかつて？ かいさうに、お前のお父さんは氣が狂つてゐたに決つてゐるぢやないか」と私は答へた。「二十年前に、あの男が私の部屋にはひつて來た晩から私はさうぢやないかと思つてゐた。かはいさうに、あの男が自分の死期をはやめたんだつてことはお前にもわかつたね。こりやもう全くの噓語だよ。」

「そのとほりでございますとも！」とジョツプは鹿爪らしく言つた。ジョツプは實際家の中でも模範的な實際家であつた。

「では兎も角壺の破片に何が書いてあるか見よう」と言ひながら、レオは父親の自筆の翻譯をとり上げて讀みはじめた。

「吾は埃及王家の出にて、神々にいつくしまれ、惡魔を従ふる、イシスの僧カリクラテスの妻アメナルタスなり、死するに臨みて吾が幼な兒チシステネスに書きのこす。吾は、戀のために誓を破りたるおん身の父とネクタネス王の治下に埃及を逃れ、海を渡りて南の方に赴き朝日に面せるリビアの海岸を二年の間放浪せり。そこにはとある河の邊に、エチオピア土人の顔に似たる巨巖あり。大河の河口より水上に流轉すること四日にして、或る者は水に溺れ、或る者は病の爲めに死したり。されど吾等二人は、蠻人につれられ、海鳥空をおほうて飛ぶ荒野又は沼地を過ぎて、十日の後、とある空洞の山に着きぬ。この山は古昔大都市のありしあとにて世の人のいまだ終端を見しことなき洞窟あり。蠻人等は吾等を彼等の女王の前につれゆきたり。彼等はその時異國人の頭に壺をのせりたり。女王は全

知全能の魔法使ひにて、永劫不死の生命と美しさとをもち、女王はおん身の父カリクラテスに戀慕の眼差を送り、吾を殺して彼を夫となさんとしたれど、おん身の父は吾を愛して女王を恐れて、命に従はざりき。ついで女王は、氣味惡き魔術を用ゐて、吾等を恐ろしき道をとほりて巨大なる堅穴のそばへつれゆきたり。その入口には年老いたる仙人死して横はりあり。女王は吾等にうづまき燃ゆる不死の命の柱を指し示せり。そのうづまき響は萬雷の如く耳を聳せんばかりなりき。女王が焰の中に立ちて、出で來たる姿を見れば身に寸分の傷もなく却つて美しさを増せるかと思はれたり。女王は、おん身の父もし吾を殺して女王になびけば、おん身の父をも女王と同じく不死の身となさんと誓へり。そは吾が吾が國の魔法を知りて女王の魔法に逆らひたる故に女王は自ら吾を殺す能はざりし故なり。おん身の父は手をのばしておのが眼をおほひ、女王の美しさを見えざるやうにし、なほも命に従はざりき。女王は怒りて魔法をもつておん身の父を殺したれど、いとしさに堪へかねて泣きふし、今は悲しみに沈みをれり。女王は吾をおそれて大河の入口に吾を送れり。そこは船着場なりしかば、やがて吾は船に乗せられ、船中にておん身を産み、諸方を漂流せるのち、アテンに來れるなり。吾が兒チシステネスよ、いま吾おん身に言はん。この女を探し出して生命の秘法を學び、能ふべくんば、おん身の父のためにこの女を殺すべし。おん身若しこれをおそれ、或は失敗するときは、吾はこのことをおん身の後に來る子々孫々に言ひのこすものなり、やがてその中より勇敢なる人出で、火に浴し、國王の位置に坐するまで。吾が言ふこと、信じ難く思はるれど、吾はそれを知れり、吾は謠りを言はず。」

「勿體ない、神様どうぞこの女の方を許して下さるやうに」と、口をあけてこの驚歎すべき文章をきいてゐたジョツプは呻いた。

私は何も言はなかつた。はじめには、私はこれは、あのかはいさうなヴィンシイが、気が變になつたときにすつかりこんな話をつくりあげたのだらうと思つたが、それにしても、こんな話は誰にだつてつくれさうにないやうに思はれた。あまりにそれは奇抜だつた。私は自分の疑をとくために、壺片をとり上げて、その上にぎつしり書いてある楷書體の希臘文字を読みはじめた。それは埃及生れの人筆になつた文章としてはその當時甚だ立派な希臘文であつた。それから、なほもよくしらべて見ると、英文の翻譯は、正確な名文であることがわかつた。

壺片の凸面には楷書體希臘文字のほかに、もと酒壺の口であつた一番上のところに、くすんだ赤色で、吾々が小函の中で見出した甲蟲形寶石にあつたのと同じ玉璽が記してあつた。但しそれは、蠟の上へおしつけたやうに、中の象形文字或は符號が逆になつてゐた。これがほんもの、カリクラテスの玉璽であるのか、それとも彼の妻アメンタルタスの先祖の王族の誰かのものであるのか、私にはわからなかつたのみならず、それが楷書體希臘文字を書きつけたときに描かれたものか、後に、一門の誰かが甲蟲形寶石から模寫したものかも知らなかつた。そればかりではなく、文章の書いてある下に、同じくくすんだ赤色で、二つの羽根をつけたスフィンクスの頭と肩との素描らしいもの、輪郭があらはれた。この羽根は王家のしるしであつて、神牛や神々の像にはよくつけてあるが、スフィンクスに

ついてゐたのは私はまだ見たことがない。

それから壺の表面の右端の希臘文字の書いてないところに、次のやうな不思議な文字が赤色でしるされて青い色で署名がしてあつた。

地に空に海に

不思議なるものぞあるなり。

ドロテア・ヴィンシイ記す。

何が何やらすつかりわけがわからなくなつて、私は壺片を裏返して見た。そこには、上から下まで、希臘語やラテン語や英語で簡単な文句と署名とが一面に記してあつた。最初のは楷書體希臘文字で、表面の手蹟の宛名人になつてゐる。チシステネスの書いたものであつた。その文句は「吾は行く能はざりき。チシステネスより、我が子カリクラテスへ」このカリクラテス（きつと希臘流に祖父の名を襲名したのであらう）は、何でも、探検に出かけようとしたらしく、かすかな、殆んど読みわけることのできないやうな楷書體希臘文字で「吾は行くことを止めたり。神々は吾を守り給はざりき。カリクラテスより吾が子へ」と書いてあつた。

この二つの古代文字の手記のうちで第二のものは逆しまに記してあつて、しかも、ちやうどそれの

書いてあるところは長い年月の間に一番多く手でもたれたところなので、ヴィンシイが清書しておいてくれなかつたら私には読みわけができたであらう。此の二つの手蹟の間に、ライオネル・ヴィンシイの署名がしてあつた。それはレオの祖父の手蹟であらうと私は思ふ。その右に J.B.V. といふ略名が記してあり、その下には、楷書體や草書體の様々な希臘文字の署名が記してあり、この破片は、忠實に子々孫々に傳へられたものと見えて「吾が子へ」といふ文句がどれにも繰り返して書き添へてあつた。

希臘文字の署名のつぎに、読みわけることのできた文字は、一家はいま羅馬へ移住したといふ意味の Romae, A.U.D. といふ文字であつた。だが不幸にして、移住の年代は、語尾の「……百六年」といふ文字がのこつてあるだけであとは永久にわからなくなつてしまつてゐた。それは、ちやうどその處で壺片がこはれてしまつてゐたからである。

その次に、ところ／＼の壺の空所に、十二人の拉典文字の署名があつた。それは三つの例外をのぞくと、みな、復讐といふことを意味するヴィンデックスといふ名前で終つてゐた。それは、矢張り復讐といふ意味の希臘語「チシステネス」に相當する文字として、羅馬移住後、この一家の家名としたもの、やうに思はれる。そのうちに、この拉典語のヴィンデックスといふ姓は、豫期通り先づデ・ヴィンシイとかはり、ついで近代風に、たゞのヴィンシイとなつてしまつてゐた。基督紀元前に生きてゐた埃及人から傳へられた、家門相傳の復讐の義務がこんな風に英語の姓にされてしまつたことは面白いことである。

この壺片に記された羅馬人の名前のうちの二三のものは、歴史やその他の記録にのこつてゐる名前であることをその後になつて私は發見した。

この一聯の羅馬人の名前の次には數世紀の年代が飛んでゐる。今日となつては、誰にも、この遺物が、この暗黒時代の間どうなつてゐたか、どうして、この一家にそれが保存されて来たかは永久にわからぬであらう。だが記憶すべきことは、あのかはいさうなヴィンシイが、羅馬人の先祖は、たうとうロンバルダイに移住し、シャルマンの侵入のときに、この大帝について、アルプス山を越えてブリタニイに行き、それからエドワード懺悔王の時に海を渡つて英國へ来たのだと語つたことである。彼がどうしてそのことを知つてゐたのか私にはわからない。この土器にはロンバルダイのこともシャルマン大帝のことも少しも記してないからである。但しいまにわかることであるが、ブリタニイのこととはちよつと書いてある。それはさておき、その次ぎには、血か又はそれに類する赤いもの、長いとばしるのついであるのを除くと、赤い繪具で二つの十字架がかいてあつた。恐らくそれは十字軍士の劍のつもりなのであらう。それから、紅と青とで D.V. といふ巧みな組み合せ文字が記されてゐた。それは、前に記したあの拙い對句を書いたドロテア・ヴィンシイの筆蹟であらう。その左の方に、うすい青色で D.V. といふ略名が記してあり、そのあとに一八〇〇年といふ日附がついてゐた。その次ぎに、この大昔しの不思議な遺物に記してあるもの、中の何れにも劣らぬ奇怪な文字が記さ

れてゐた。それは、二つの十字架又は十字軍士の剣の上に書いたもので年代は千四百四十五年になつてゐた。そしてなほ一層奇怪なことには、二番目の羊皮紙の巻物にその英譯がついてゐた。その文意は次のとおりであつた。

「この遺物は、遠き昔我が先祖がブリタニーよりもち來りしものなるが、そは悪魔が魔法をもつてつくりたるものなれば破毀すべしとの聖僧の言に従ひ吾が父が二つに毀したるものなり。されど吾れジョン・デ・ヴィンシイは、紀元千四百四十五年聖母マリイの祭日の次の月曜日に、これを再びつきあはしたるものなり」

その次の、最後から二番目の手記はエリザベス朝のもので一五六四年の日附になつてゐた。それには次のやうに書いてあつた。「こは最も不思議にして、且つ我が父の生命を失はしめたる物語なり。我が父はアフリカ東海岸に件の場所を探検せんとしたるが、彼の快走船は、ロレンソ・マルケス沖にて、ポルトガルの大帆船のために沈められ、彼自らも亦死せり。——ジョン・ヴィンシイ。」

その次の、即ち最後の手記はその書體からかながへて見ると、十八世紀の中葉に、ヴィンシイ家の代表者によつて書かれたものである。それは、「ハムレット」の中の有名な文句の少々間違ひのある引用で「天地には、君の哲學の夢想たも及ばざる多くのことがあるぞよ、ホレーヌ君」といふのであつた。

いま一つの書類は、壺片の希臘文字を中世の拉典文に翻譯したものであつた。それは英國ではじめて希臘語を教へたエドマンド・ブラットといふ學者が一四九五年に翻譯したものである。きつと、その當時の何とかヴィンシイが、ことによると、壺片をつぎあはして一四四五年に前に記した文句を書いて、そしてジョン・デ・ヴィンシイがブラットの高名をきいて、彼が當時希臘語を教授してゐたオックスフォードへ驅けつけ、不思議な壺片の文字の意味を解かうと思つたのであらう。

これ等の書類、少くもその中の判讀できるものをすつかり讀み了り驗べ了つてから私は言つた。「さあこれですつかり様子はわかつた。これでもうお前も、考へをきめることができるわけだ。わしの考へはもうきまつたがね。」

「では叔父さんはどう考へますか？」と彼ははや口でたづねた。

「かうだ。この壺片は真正銘のものだとわしは信ずる。そして不思議なやうだが、これは紀元前四世紀の頃から君の家に傳はつて來たものであることも信ずる。手記が何よりの證據だ。だから、どんなにありさうもないことでも、事實は認めなくてはならん。だがちよつと待つて貰ひたい。お前の遠い先祖の埃及の王女或はその女の指圖を受けた或る書記が、この壺片に記してある文章を書いたのだといふことは、わしは少しも疑はんが、それと同時に、この女はいろいろな苦しみや夫を失つた悲しみのために正氣を失つてゐて、これを書いたときは健全な精神状態ではなかつたといふことも、わしは少しも疑はんのだ。」

「僕の親父が、あちらで見たり聞いたりしたことはどう説明するんですか？」とレオはたづねた。

「暗合さ。アフリカの海岸には、そりや勿論いくらか人間の頭に似た断崖もあらうし、アラビヤ語に似た土語を話す人間も澤山あるだらう。それに沼地だつていくらもあるに相違ない。それから、こんなことを言つちや氣の毒だが、君の親父はこの手紙を書いたときに、全く正氣だつたとは僕は思はんよ。あの男は随分苦しみにあつて來たので、この物語もたうとう空想の餌食にしてしまつたのだ。元來が餘程の空想家だつたからねえ。いづれにしても、いま吾々の手に傳はつて來たこの傳説は取るに足らんものだよ。自然界には吾々が滅多に遭遇しない、そして遭遇しても吾々にはわからない不思議な力がいろいろあることはわしも知つてゐる。だがわしは自分の眼でそれを見るまでは、そしてこの眼で見るとは到底ありさうにないことだが、たとひ束の間でも死を避ける術があるなんてことは斷じて信じない。又、アフリカの中心に白人の魔女が住んでゐるとか住んでゐたとかいふことも信じない。そりや、噺言だよ、レオ君、噺言だよ！——ジョップ、お前はどう思ふかね？」

「そりやもう眞赤な嘘でございますとも、それにもしほんたうだとしても、レオ様はそんなことに手出しをなさらないやうにしていたゞきたいですね。何もいゝことはありつこはありませんから。」

「多分あなたの方のお考へが正しいでせう」とレオは非常に物しづかに言つた。「僕は意見は何も申しませんが、これだけのことは言つておきます。僕はこの問題をすつかり解決してしまふつもりです。で若し貴方がたが一緒に來られないなら、僕は一人で行く決心です。」

私はこの青年の顔を見て、彼が眞面目に言つてゐることを知つた。レオが眞面目に物を言ふときには、口のあたりに妙な表情が浮ぶので誰にでもわかつた。それは子供の時分からの彼の癖であつた。ところで私は、勿論彼を一人でどこへもやる氣はなかつた。それは彼のためといふより寧ろ私のためだつたのである。私は彼にひどく愛着を感じてゐたのでとてもそんなことはできなかつたのである。私にはあまり係累もなければ、愛情をわかつ相手も多くはない。此の點では私は逆境にたつてゐた。世間の人は男も女も私を避けてゐた。少なくとも私にはそのやうに思はれた。で私は世の中から隠退して、世間の人と親しい交りを結ぶ機會を自から斷ちきつてゐたのである。だから、レオは私にとつては全世界であつた。弟でもあり、子供でもあり、友達でもあつた。それでレオの方で私に飽きて來るまでは、レオの行くところへはどこへでも私は行かねばならなかつたのである。だが勿論、彼が私にとつてそれ程重きをなしてゐることをさとられては工合が悪いので、私は何かうまい口實を設けて彼に従ふ手段はないものかと考へてゐた。

「さうです、私は行きますよ、叔父さん。」と彼は繰り返した。「もし『うづまく生命の柱』とやらが発見できなくなつて、すばらしい獵ができることは講合ですからね。」

私は、この絶好の機會を捉へた。

「獵だつて」と私は言つた。「さうさう！ それにはちつとも氣が附かなんだ。あちらにはきつと廣い人跡未踏の山野があることだらう。そして獲物が澤山あるにきまつてゐる。わしは生きてゐるうちに一度水牛を殺して見たいと思つてゐたんだ。いゝかいレオ、わしは探検のことなどは信じてをらん

が、獵のことになると思つた。眼がないんだよ。で、すっかり考へた上で、ほんたうにお前が出かけるつもりなら、わしも氣晴らしに、お伴をするよ。」

「さうでせう」とレオは言つた。「僕は叔父さんがこんな又とない機會を逃しはなさるまいと思つてゐましたよ。だがお金はどうしませう。随分費用がかゝるでせうからね。」

「その點についてちや心配は要らん。」と私は答へた。「お前の収入の何年分もすっかり積んであるからね。それに、お前の親父がわしにのこしてくれた金も三分の二は貯蓄してある。これもつまりはお前のためにのこしておいてくれたんだ。お金は正金でうんとあるよ。」

「そりや素敵だ。では、こんなものはもうしまつて、早速町へ鐵砲を見に出かけませう。ところでジョップ、お前も一緒に行かないかい？　もうお前もぼつ／＼世間を知つてよい時分だぜ。」

「よろしうございます。」とジョップは氣のりのしない聲で答へた。「わつしは見知らぬ異國へなどあまり行つて見たいと思ひませんが、あなた様方が二人ともお出かけになれば、誰かお世話をする人もお入り用でございませうし、それにわつしは、二十年もの間使つていたゞいて、今更らひとりであとに残つてゐるやうな人間ではございせんから。」

「その通りだよ、ジョップ」と私は言つた。「別に何も驚くやうなことは見つかりもすまいが、すばらしい獵ができるぜ。それに二人ともこれを見たまへ。わしは、こんな馬鹿げたものについては一言も世間の人に聞かしたくないね」と言ひながら私は件の壱片を指さした。「もしこんなことが知れて、わしの身にまさかのことがあつた時には、わしが正氣だつたかどうかつて問題で近親の者の間に、わしの遺言について争ひが起るだらうし、わしはケンブリッヂの物笑ひになるにきまつてゐるからな。」

それから三箇月たつて、吾々はザンヂバル行きの船に乗つて大洋を航海してゐた。

#### 第四章 狂風

これから私が話さうとする場面と、これまで私の話して來た場面とは何といふ相違であらう！　靜かな大學の自修室も、風に搖れてゐる英國の櫛も、白嘴鴉の啼き聲も、書棚に見られた書籍類もみんな過去のものだ。そしてその代りに、アフリカの満月の光の下に、くつきりとした陰影にくまどられて銀色に光つてゐる靜かな大海の光景が現はれてゐるのだ。吾々の乗つてゐる船は靜かな風を孕み、美妙な音をたて、舷側に打ち寄せる波をわけて走つてゆく。もう眞夜中近いので、大抵の人は眠つてゐる。だが、色の淺黒い、頑丈造りのマホメッドといふアラビア人が舵臺に立つて、星をたよりに、ものうげに舵をとつてゐる。右舷から三哩あまりのところ、低い、ぼんやりした線が見える。それが中央アフリカの東海岸だ。時は正に北東の季節風の起る前、處は、アフリカ大陸と、此の危険な海岸を數百哩の間縁どつてゐる暗礁との間を、吾々は南の方へ向つて走つてゐるのだ。夜は靜かだ。船首から船尾へ低聲で囁いても話がきゝとれるくらゐ靜かだ。遠くの陸地から、微かなうなり聲が海面をこえて聞えるくらゐ靜かだ。

舵臺のアラビア人が手を伸して一語言つた。「獅子だ！」

一同はみんな坐りなほつて耳を傾けた。また聞える。ゆつたりとした、莊重な、骨の髄まで泌みわたるやうな聲が。

「船長の計算が間違つてゐなければ、明日の朝の十時までには、あの人間の頭の形をした奇妙な巖に着くわけだね、そして獵がやれるわけだ」と私は言つた。

「それから廢都の跡と生命の火との探検がはじまるわけですね。」とレオはバイブを口からはなして少し笑ひながら訂正した。

「莫迦な」と私は答へた。「お前は今日の午後舵臺であの男にアラビア語で得意さうに話をしてゐたが、あの男は何と言つたね？ あいつはこの地方をあちこち廻つて、やくざな半生を商賣をしてくらしてゐたさうだが（多分奴隸の取引をやつてゐたのだらう）そして一度あの『人間』岩へ上陸したことがあつたさうだが、廢都のことや洞窟のことを何か聞き知つてゐたかね？」

「い、や」とレオは答へた。「あの男は、この地方は奥の方は沼だらけで、蛇や獸が澤山すんでゐるが、人間は一人も住んでゐないとやつてましたよ。何しろ、アフリカの東海岸はずつと沼の帯で圍まれてゐるので、手がつけられんといふことですよ。」

「さうとも」と私は答へた。「マラリアにはもつてこいの處だ。あの連中が、この地方についてどんな意見をもつてゐるか、それでわかつたわけだね。誰だつて吾々の相手になんかなりやしないさ。奴等は吾々を氣狂だと思つてゐるんだ。それにわしは誓つて言ふが、奴等の考へが正しいのだよ。」

「い、ですとも、ホレース叔父さん。僕はこの機會を逃しやしませんよ。おや！ あの雲は何でせう？」かう言ひながら彼に船尾から數哩はなれたところの星の空に浮んでゐる黒い斑點を指さした。

「行つて舵手に聞いて御覽」と私は言つた。

彼は起ち上つて兩腕を伸して行つたが、すぐに歸つて來た。

「あれは狂風ださうですよ。けれどもずつと向うの方を通るつていふことです。」

ちやうどその時ジョップがやつて來た。

彼は大層元氣さうに見えた。褐色のフランネルの獵服姿はちやきくの英國つ兒であつた。だが、彼の人の善い丸顔には困つたやうな様子が見えた。それは彼がこの見知らぬ海へ乗りこんで來てからしじゆうのことだつた。

「ねえ旦那様」と阿彌陀にかぶつた日よけ帽子に一寸手をやりながら彼は言つた。「船尾のボートには、鐵砲や何かみんな藏つてあるでせう。錠前附きの戸棚に入れてある食料品の方はい、としましてもですね。私はそつとあそこへ行つて、あのボートの中に眠つた方がよいやうに思ふのです。どうも私には（こゝで彼は聲をおとしてひそく話で囁いた）あの黒ん奴の奴等の眼つきが氣に入らんでしてね。奴等はどうも迂散くさい様子をしてゐますよ。若し奴等が夜中にボートの中へしのびこんで、綱をきつてあの船にのつて逃げていつてしまつた日には、困つたことになりませう。」



このボートといふのは、吾々が萬一の場合の用心に、スコットランドのダンディで、特別に註文して造らせてもつて来た長さ三十呎の美しいボートで、熱さを防ぐために坊は銅でこしらへ、防水設備を施した室なども設けてあつたのである。

「さうだねえ、ジョツプ」と私は言つた。「さうした方がいゝかも知れんねえ。あそこには澤山毛布があるから、たゞ月の光にあたらぬやうに用心した方がいゝよ。さうしないと氣が變になつたり、盲人になつたりするからねえ。」

「かまふもんですか！ あゝの黒奴の野郎の、薄汚い、泥坊じみた様子を見たんでもういゝ、加減頭が變になつてゐるんですもの。奴等は肥掻きでもするより他に仕方のない連中ですよ。それにもう今から惡臭紛々たるもんでございますよ。」

ジョツプはこれでもわかるやうに、皮膚の黒い吾々の同胞の習慣や動作の讚美者ではけつしてなかつた。

そこで、吾々は曳綱でボートを引つ張つて、船尾の眞つ下まで引き寄せた。ジョツプはまるで馬鈴薯の袋でもころがすやうにその中へころがりこんだ。吾々はまたひきかへして、甲板に腰をかけて、煙草をふかしたり、しづかに話したりした。その夜は何とも言へぬ美しい夜であつた。吾々の頭の中は、抑へつけてゐた色々な昂奮で一ぱいだつたので、眠くないやうな氣がした。かれこれ一時間もこんな風に坐つてゐるうちに、どうやら、二人ともうとうとうとまどろんだらしい。少くも、私は、

レオが水牛の頭は的ひどころとして悪くない、ちようど角と角との眞ん中へ一發喰はしたり、咽喉つ首へ彈丸を射ちこんだりするのには素敵だとか、或はそれに類した他愛もないことを眠さうに説明してゐたのをかすかにおぼえてゐた。

それから先のことは何もおぼえてゐなかつた。すると突然、恐ろしい風の唸り聲と眼をさました乗組員のけたましい恐怖の叫び聲とがきこえ、水の泡沫が鞭のやうに顔を刺すのを感じた。二三の人はかけつて帆索をゆるめて帆を下さうとしたが、索が堅く喰ひ込んでゐて帆桁は容易に下りて來なかつた。私は跳び上つて一本の綱にぶら下つた。船尾の方の室は瀝青のやうに眞黒であつたが、船首の方にはまだ月が皎々として漆黒の闇をてらしてゐた。月光の下には二十呎以上もある大波が白い波頭を見せて吾々の方へ突進して來た。大波は將に碎けやうとしてゐた。月はその峰を照らし、その泡沫に光を注ぎかけてゐた。後から恐るべき狂風にかりたてられて、眞黒な空の下を、大波は突き進んで來た。突然、瞬く間に、黒いボートの形が、空中高く、碎けつゝある波頭の上に押し上げられたのを私は見た。ついで水がどつと打つつかつて、泡が沸き返りながら押し寄せて來た。私は一生懸命に櫓索にしがみついて、強風にあつた旗のやうに眞直ぐに引き伸ばされた。

船は船尾に波をかぶつたのである。波は通り過ぎた。私は數分間も水の下にゐたやうに思つたが、その實それは數秒間であつた。前方を見ると、大きな帆は、疾風のために引きちぎられて、手傷を負うた巨鳥のやうに、風下の方へはた

はたとなびいてゐた。やがて比較的静かな瞬間が来た。その時に、私は「ボートはこちらですよ」と大聲でわめいてゐるジョップの聲を聞いた。

私は氣が顛倒して半ば土左衛門になつてゐたのだが、それでも船尾の方へ突き進んでゆくだけの正氣はもつてゐた。私は歩いて行く足の下で船が沈んでゆくやうな氣がした。船はもう水で一ぱいになつてゐたのである。船尾の突出部のすぐ下で、ボートは狂氣のやうに揺れてゐた。と、今しがたまで親船の舵をとつてゐたアラビア人のマホメッドがそのボートの中へ跳びこんで行くのが見えた。私は眞直にびんと張つた綱を金剛力を出して引き寄せ、同じくあとからボートへ跳び降りた。ジョップが片腕をつかまへてくれた。そして私は船底へころがり込んだ。親船の船體はずぶくんと沈んでいつた。その時、マホメッドは曲つたナイフを抜いて、親船とボートとを繋いでゐた緒綱を切つた。すると忽ち吾々は嵐にかりたてられて、親船の沈んだ上を吹き流されて行つた。

「大變だ！」と私は叫んだ。「レオはどこにゐる？ レオ！ レオ！」

「レオ様はゐなくなりました」とジョップが私の耳のそばまで口をもつて来てわめいた。それでも荒れ狂ふ暴風のために彼の聲はまるで私語のやうにきこえた。

私は両手をあはせて、ねぢまげながら懊惱した。レオは溺死したのだ。そして私があとへ生き残つて彼の死を悲しまねばならぬのだ。

「そら、又浪が來ましたよー」ジョップが大聲でわめいた。

私は振り返つて見た。第二の巨浪が吾々に襲ひかゝらうとしてゐた。私はいつそのことその浪に呑まれてしまひたいやうな氣になつて、妙に、釣り込まれるやうな氣持ちで、恐ろしい浪の押し寄せて來るのをちつと見まもつてゐた。月は、すさまじい嵐に吹きまくられて殆んど姿を隠してゐたが、それでもなほ少しばかりの光が、貪婪な巨浪の波頭をきら／＼照してゐた。波頭の上に何か黒いものが漂うてゐる。それは難破船の破片だ。たうとう波は吾々のボートへ押し寄せて來た。ボートは水で殆んど一ぱいになつた。だがこのボートには有り難いことには誰か發明したのか空氣も通はぬ密閉した小室が澤山設けてあるので、波の間からひよいひよいと水鳥のやうに浮び上つた。渦巻く泡の中に、私は黒いものが波の上を眞直に私の方へ急いで來るのを見た。私はそれをおし除けようと思つて右手をのばした。すると私の手先に何者かの腕がつかまつた。私の指はその手首を萬力のやうにがきつとつかんだ。私は随分力は強い方だが、それでも、この漂流者の身體の重味とひつばる力とのために、肩が千切れさうになつた。もう二秒間も浪がついてゐたら私はきつと手をはなしたか、或は自分も一緒につれてゆかれたかしたにちがひない。けれどもボートの中に膝まで水をのこして、浪は通り過ぎてしまつた。

「さあ汲み出すんだ、水を汲み出すんだ」と叫びながらジョップはせつせと水汲みにかゝつた。けれども私はその時は水を汲むどころの騒ぎではなかつた。何故なら、月はもう雲間に没してあたりは眞の闇であつたけれども、一條のかすかな迷つた光りは、私のつかみあげた男の顔を照らしてゐ

たからだ。その男は船底に半ば横はり、半ば浮んでゐた。

それはレオであつたのだ。レオが波に押し返されて來たのだ。死んでゐるか生きてゐるかはわからぬが、正に死の顎から押し返されて來たのだ。

「さあ水を汲み出さなくちや沈んでしまふ」とジョツプは聲を張りあげた。

私は腰掛の下に結びつけてあつた柄のついた大きな錫の椀をとつて、三人で一生懸命に水を汲み出した。嵐は吾々の上に、まはりに荒れ狂ひ、ボートは前後左右に翻弄された。嵐はうづを巻いて、水は棘のやうに身を刺し、眼をおほふ中を物ともせず、吾々は死物狂ひの歡喜にあれ狂ふ惡魔のやうにたち働いた。死物狂ひにも一種の歡喜があるものだ。一分！ 三分！ 六分！ ボートはだんだん輕くなつてゆき、新しい波はもう押し寄せて來ない。それからまた五分もたつとボートの中の水は大抵汲み出されてしまつた。その時突如として、恐ろしい嵐のたけり狂ふかなたに、鈍い、深い轟きがきこえて來た。南無三！ それは激浪の音であつたのだ。

ちやうどその時、月はまた輝きはじめた。こん度は狂風の通つて來る後の方からである。少しく間隔をおいて二條の白い線が、遙か彼方から押し寄せて來る。それは浪なのだ。ボートが燕のやうに水を切つて進むにつれて、浪の音はだん／＼はつきりして來る。

「さあ舵をとるんだぞ、マホメッド」と私はアラビア語で言つた。「もう一度あの浪を乗り切らなくちやならん。」それと同時に私は舵を握り、ジョツプにも舵をとらせた。一瞬にして、吾々のボートは、泡立つ激浪の中へ、慕らに、競馬馬のやうな迅さで突進していつた。

船は浪にぶつつかつた。筆紙につくしがたい、心臓の破れるやうな昂奮の一二分がついた。私のおぼえてゐるのは、たけり狂ふ泡の海と、こゝに、かしこに、至るところに、大洋の墓場から抜け出して來た怨靈のやうに頭を擡げて來る波濤だけである。一度吾々は渦のなかにまきこまれたが、運がよかつたのかマホメッドの舵の操りかたがうまかつたのか、ボートの舳は眞直ぐにゆつと浮き上つた。又しても怪物のやうな浪がやつて來た。吾々はそれを乗り越えた、といふよりも濤り抜けた。息詰まるやうな昂奮がちよつとしづまつて、アラビア人が歡喜の胴羅盤をあげた。ボートは激浪を乗りこえて、やゝ靜かな海へ出たのである。

けれども、船はほとんど水で一ぱいになつてゐたし、半哩ほど先には次の浪が押しよせて來てゐた。吾々は又もや狂氣のやうに水を汲み出した。幸にも嵐はすつかり鎮まつて、月は皎々として輝き、半哩以上も海上に突出してゐる岩だらけの岬がくつきりと見えた。浪はその岬までつゞいてゐるものと見えて、岬の麓で浪が碎けて白い飛沫をたててゐた。多分岬はそれからはなほすつとつゞいて海面の下に没して暗礁になつてゐるのであらう。ちやうど吾々が二度目にボートから水をすつかり汲み出した時に、有り難いことにはレオは眼をひらいた。私は彼にそつと眼を閉ぢてゐるやうに言つた。彼は今の境遇を少しも知らずに、多分もう起きて教會へ行く時刻だとも考へてゐたのであらう、だまつて又眼を閉ぢた。教會と言へば、ケンブリッジ大學のあの居心地のいゝ自修室が何とも言へずな

つかしい。何故私はあの部屋をはなれてこんなところへ来るやうな馬鹿だったのだらう？

だが、吾々はまた浪のはうへ押し流されてゐた。しかし、風がしづまつてゐたので、前のやうに急にはなく、たゞ潮流のまにまに押し流されてゐたに過ぎない。マホメッドはアラートの名を呼び、私は神を念じ、ジョツプもなにかさげびながら吾々は浪にぶつつかつた。かうした危険は幾度も繰りかへされた。たゞ以前ほど激しくはなかつただけのことである。マホメッドのたくみな舵の操縦と、密閉室とおかげで、吾々の命はたすかつたのである。五分もたつと吾々は波を乗り切つて、櫂をとる力もなくなつてしまつたので、潮に流されて、驚くべき速さで前に言つた岬のまはりを押し流されてゐた。

そのうちに船脚はだん／＼のろくなつて、船はもう進まなくなつた。嵐は静まり、空は拭つたやうに晴れ渡つた。吾々は或る河口へついてゐた。潮の流れもおさまつて、船はしづかに海上に泛んでゐた。月が沈むまでに船内の水の汲み出しもすつかり終つて、やつと船らしい形になつた。レオはぐつすり眠つてゐたが私は起きぬ方がよいだらうと思つた。彼は濡れた着物のまゝで寝てゐたのであるが、暖い夜なので、彼のやうな人並以上に丈夫な人間には左程害はなからうと私も考へたし、ジョツプの考へもさうだつた。それに第一手許に乾いた着替へはなかつたのだ。

まもなく月は沈んだ。そして吾々は、惱める女の胸のやうにひく／＼と動いてゐる海上に漂うてゐた。やつとのことで、今までのことを思ひかへす餘裕もできなかった。ジョツプは船に、マホメッドは舵のところ、そして私は船の中央のレオの寝てゐるすぐそばに腰をおろした。

月はしづ／＼と美しく沈んでいつて、水平線下に没し去り、長い被布のやうな影は空にひろがつて、それをとほして星影が見えてゐた。しかしそれも間もなく東が白むにつれて消えてゆき、夜は明けはなれて、空は紺青の色にかはつた。海は益々静かになつて、海面にたちこめてゐる柔い靄のやうにおだやかになつた。曙の天使は東から西へ、海から海へ、峰から峰へと、その胸と翼とから光をまき散らして行つた。光は闇を追ひ拂つて静かな海上に、低い海岸線に、海岸線の彼方の沼の上に、その上に聳ゆる山の上に、平和に眠れるもの、上に、悲しみに眼ざめてゐるもの、上に、悪の上に、善の上に、生けるもの、上に、死せるもの、上に、廣大なる世界の上に、世界の上に呼吸してゐる、またかつて呼吸してゐた萬物の上にあまねく降り瀧いでいつた。

それは美しい眺めであつたが、しかもなほ悲しい眺めでもあつた。恐らくそれはあまりに美しかつたためであらう。昇る日と沈む日！ それは正に人類と人類にかゝはりをもつ凡ての物との象徴であり姿態である。その朝はこのことが妙に泌々と私の胸にこたへた。今日吾々のために昇る日は、昨夜十八人の吾々の同乗者のために沈んだ日ではないか！ 吾々の知つてゐた十八人のために永久に沈んだ日ではないか！

アラビア船は彼等と共に沈んでいつたのだ。沈んでいつた人々は、岩や海藻の中を、死の大海の中の人間の流れのやうに流れてゐるのだ！ そして吾々四人は助かつたのだ！

第五章 エチオピア人の頭

たうとう日輪の先驅はその仕事を了へて、影は限なく掃き清められ、大日輪は大海原のベッドから雄姿をあらはして熱と光とを下界に漲らした。私は船の中にすわつて、おだやかに鯨に奇せて来る水の音を聞きながら、朝日の昇るのを見まもつてゐた。そのうちにボートは少しづつ、押し流されて吾が今しがたひどい危険を冒して来た岬のとつばなにある、奇妙な形をした巖のそばへ来た。それは巖といふよりもむしろ峰といった方がよいかも知れぬ。その巖は、私と太陽との間にすつくと聳えてゐて、私の眼から太陽を遮ぎつてゐた。それでも私はぼんやり巖を凝視してゐた。すると間もなく、背後の太陽の光りで、巖の輪郭がくつきりと照し出された。私は仰天した。それも無理ではない。高さ約八十呎、麓の厚さが百五十呎もある巖の頂が、黒人の頭のやうな形をしてゐて、此の上なく氣味の悪い、恐ろしい形相が刻みつけられてゐるではないか。それはもう疑ふべくもなかつた。私のすぐ前に、厚い二つの脣と、肥つた頬と、背後の日光で、驚くほどくつきりと照し出されてゐるづんぐりとつたつた鼻とが見えるのだ。恐らく幾千年間風雨にけづられてあんな形になつたであらう圓い頭蓋、かて、加へてその上には海草や苔がもじやもじやと生えてゐて、それが日光を浴びてゐるところは、巨大な黒人の頭のちぢれ毛にそっくりなのである。たしかにそれは非常に妙であつた。あまり妙なので、今では、私はこれはたゞの造化の戯れではなくて、有名な埃及のスフィンクス

のやうに、遠い、誰の記憶にもこのつてゐない太古の人々によりてつくられた巨大な記念碑だらうと思つてゐる。恐らくそれは、この港に近づいて来る敵に對する警告と反抗との表象としてこしらへたものであらう。不幸にして吾々はその後果してさうであるか否かをたしかめることはできなかつた。それは海からも陸からもその巖へ近づくことはできなかつたのと、外にいろ／＼しなければならぬ仕事があつたのとのためである。今、その後に吾々が見た事柄によりて察すると、たしかにそれは人間の手によりてつくられたものである。いづれにしても、それは二千餘年前、レオの遠い先祖のカリクテスの妻であり埃及の王女であつたアメナルタスの頃にも立つてゐたのであり、今後もいつまでも立つてゐるに相違ないのだ。

「お前はあれをどう思ふかい、ジョツプ？」とボートの端に腰を下して、ひどく悲觀した顔つきをしながら、出来るだけ多く日光を吸ひとらうとしてゐた吾々の従者に向つて私は訊ねた。そして私は悪魔の頭のやうな巖を指した。

「ひええ！」とはじめて巖を見たジョツプは答へた。「まるで旦那様があの巖の上へ坐つて肖像をとらせなかつたやうですな。」

私は笑つた。その笑ひ聲でレオが眼をさました。

「おや！」と彼は言つた。「僕はどうしたんだらう？ すつかり身體が硬ばつちやつた。アラビア船はどうしたんです？ すこしプランデーを下さい。」

「お前は、もつと硬くならなかつたのを有難いと思はにやならんよ」と私は答へた。「あの船は沈没して乗組員は、吾々四人のほかはみんな溺れ死んだんだよ。お前の命が助かつたのなんぞも全くの奇蹟だ。」それから、もう明るくなつてゐたので、ジョップがレオに頼まれたブランデーを戸棚の中でさがしてゐる間に、私は彼に昨夜の冒険を話してきかせた。

「そりや大變でしたな」と彼はかすかに言つた。「それにつけても、吾々はよく／＼生きるやうに選ばれてゐたんですな。」

そのうちにブランデーが來たので、吾々はみんなで大いに飲んだ。日光はだん／＼強くなつて來たので、五時間以上もすぶ濡れになつて骨まで冷えてゐたのが温まつて來た。

「おや」とレオはブランデーの瓶を下において喘ぎながら言つた。「あれは例の書類に『エチオピア人の頭の如く刻まれたる巖』と書いてあつた頭ですね。」

「さうだ、あれがさうだよ」と私は言つた。

「して見るとみんな眞實なんだなあ。」と彼は答へた。

「先きのことはわからんさ」と私は答へた。「そりやこの巖が前からこゝにあつたといふことはわかつたさ。そして君の親父がこれを見つてこともわかつたよ。だが、どうもこの巖があつた書類に書いてあつた巖とは思はれんね。それに、若しさうだとしても、そりや何の證據にもならんよ。」

レオは私を見て得意さうに笑ひながら「あなたは疑ぐり深い猶太人ですね、ホレーヌ叔父さん」と

言つた。「この生きた眼で今にわかりますよ。」

「正にそのとほりだ」と私は答へた。「ところで、今吾々は洲を越えて河口へ漂流してゐるのだけ。さあジョップ、權をもて、これから漕いでいつて上陸する場所があるかどうか見るんだ。」

吾々のはひつていつた河は、まだ海岸に立ちこめてゐる霧がすつかり霽れきらないので、確にはわからなかつたが、あまり廣くはなさうであつた。アフリカの海岸は大抵どこでもさうであるが、ここにも河口に相當大きな砂洲があつたので、風が陸の方から吹いて來たり、潮がひいたりしてゐる時なら、吃水數時のボートでも絶対にそれを越えることはできなかつたのであるが、その時は大變工合がよかつた。それにボートの中には、もはやコップに一杯の水もなかつたのである。二十分のうちに、吾々はほとんど骨を折らずに、強い、しかし多少むらのある風に運ばれて、眞つ直に港内にはひつた。霧はもう霽れて、日は氣味のわるい程暑くなつて來た。このあたりの河幅は約半哩位で、兩岸には沼地が多く、澤山の鰐が、丸太を並べたやうに群がつてゐるのが見えた。だが、一哩ばかり河上に、固い陸地らしいものが見えたので、吾々はそれを目掛けて漕いで行つた。それから十五分もたつと、船はそこに着いた。吾々は、一本の美しい樹にボートをつないで上陸した。その樹は、葉は廣くて光つてをり、白ではなく薔薇色の木蓮屬の花が咲いて、それが水際におほひかゝつてゐた。それから吾々は着物を脱いで身體を洗ひ、着物や船の中のものゝをひろげて天日に乾かした。みんなすぐに乾いた。それがすむと、吾々は樹蔭で暑さをさけながら、ゆつくりと、すてきな、タン・シチウの朝食

をすませた。吾々はそれを船の中に澤山積んで来たのである。食事をしながらも吾々は前日暴風でラビア船が沈む前に、食料品をボートへ積みこんでおいた幸運を祝ひあつた。食事がおはつた時には着物はすつかり乾いてゐたので、吾々は急いでそれを身につけて、少なからずすがくしい氣持になつた。疲れたのと少しばかり擦り傷を負うた他には、吾々は他の乗組員たちの命を奪つた昨夜の恐ろしい冒険から別に被害を受けなかつた。レオはもう少しで溺死するところだつたが、二十五歳の元氣ざかりの彼にとつては、それ位のことは何でもなかつたのである。

朝食がすむと吾々はあたりをしらべはじめた。吾々のゐたところは、幅二百碼、長さ五百碼程の長方形な乾いた土地で、一方は河に面し、他の三方は見渡すかぎりの荒涼たる沼地であつた。この乾地は周囲の沼地や河の水面から約二十五呎ばかり高まつてゐたので、どう見ても人間の手をつくつたものらしかつた。

「此處は波止場だつたのですね」とレオは斷定的に言つた。

「莫迦な」と私は答へた。「こんな恐ろしい沼地の真ん中に波止場をこしらへるやうな馬鹿があるもんか、こんな蠻人の住んでゐる國に、それに蠻人だつて住んでゐるかどうかわかりやしない。」

「前から沼地ぢやなかつたのでせう、それに、この住民も前から蠻人ぢやなかつたかも知れませぬ」と彼は嶮しい岸を見下しながら、そつ氣なく言つた。吾々は河の岸に立つてゐたのである。「あそこを御覽なさい、あれは石造工事ぢやありませんか、どうもさうらしいですよ。」かう言ひながら彼は、昨夜の暴風で一本の木蓮が根こぎにされて土塊を擡げてゐるところを指さした。そこはすぐ河つべりで、岸が急勾配で水面に下つてゐるところであつた。

「莫迦な」とまた私は言つたものゝ、二人はそこへ下りていつて、上向きになつた木蓮の根と岸との間に立つた。

「どうです？」と彼は言つた。

けれども今度は私は返事をしないで嘯いてゐた。といふわけは、土が掘り返されたところから、まぎれもない固い石の表が顔を出してゐたからだ。それは大きな區劃に切つて敷きつめ、褐色のセメントでかたくつきあはせてあつたので、小刀の蓋金でこすつて見てもあともつかなかつた。そればかりではない。その石壁の底に土を擡げて何か突出してゐるものがあつたので、兩手で柔い土を取り除けて見ると、それは直徑が一呎以上もある、厚さ三吋ばかりの大きな石の環であつた。この發見は完全に私を沈黙さしてしまつた。

「相當大きい船が繫がれてゐた波止場らしいですね、どうです、ホレース叔父さん？」とレオは昂奮して齒を出して笑ひながら言つた。

私はもう一度「莫迦な」と言はうとしたが、言葉が咽喉につかへて出なかつた。この石の環が自分で語つてゐたのだ。昔、こゝに船が碇泊したことがあるのだ。そしてこの石壁は丈夫につくられた波止場の遺物にちがひないのである。多分この波止場のあつた都市はそのうしろにある沼地の下へ埋没

してしまつたのであらう。

「どうやらあの物語はまんざら嘘でもなさうに見えて來ましたね、ホレース叔父さん」とレオは雀躍りして言つた。あの不思議な黒人の頭や、それにも劣らず合點のゆかぬこの石造工事のことを考へて見ると、私にはそれに對して眞つ直ぐな返事は出來なかつた。

「アフリカのやうな國には」と私は言つた。「ずつと前に亡びて忘れられてしまつた文明の遺物はそこらぢゆうにあるにきまつてるさ。埃及の文明がいつからいつまでつゞいてゐたかを知つてる人は一人もないし、この文明にはきつと分派もあつたに相違ない。それからバビロン人や、フェニキヤ人や波斯人やその他の國民もみんな多かれ少なかれ文明をもつてゐたんだ。近頃ぢや大流行の猶太の文明は勿論のことだしね。これ等の民族、或はそのうちのどれかこの附近に植民地をもつてゐたか、或は貿易の根據地をもつてゐたかのも知れん。キルワで領事が吾々に見せてくれた埋没した波斯都市のことを記憶してゐるだらう。」

「全くそのとおりです」とレオは言つた。「大分叔父さんの説は前とはかはつて來ましたね。」

「とここでこれからどうするかね？」と私は話頭を轉じて訊ねた。

誰も返事をしなかつたので、吾々は沼の縁まで歩いて行つて、沼地を見渡した。見たところ、それは無限につゞいてゐた。そしていろ／＼な水鳥の群が隠れながら翔び出して來て、時々空も見えない程になつた。日は高く昇つてゐたので、沼の表や、泡だつた溜り水の池から嫌な恰好をした毒瓦斯の

雲が立ちのぼつてゐた。

「二つのことは明白だ」と私は當惑してこの光景を見つめてゐた三人の仲間に向つて言つた。「第一にこれを渡することはできん」といひながら私は沼を指した。「それから第二に、こゝに止つてをれば、きつと熱病にかゝつて死んでしまふ。」

「そのことはわかりきつたことでございますね」とジョツプは言つた。

「さうすると吾々のすべきことは二つかない。ボートにのつて、どこかの港をさがして見るか、これもなか／＼危い藝當だが、それとも、帆か櫂で河上へ溯つて行つて何處へ着くか運だめしをして見るかだ。」

「みんなはどうするつもりか知らんが、僕は河上へ溯りますよ」とレオはきつと口を締めて言つた。

ジョツプは白眼をむいて呻いた。アラビア人もアラーの名を唱へながら呻いた。私は、どうせ、吾は悪魔と深海との間にはさまれてゐるらしいから、どつちへ行つたつて大してかはりはないのだとおとなしく言つて聞かせた。けれども私は實を言へばレオの言ふ方へ行きたかつたのである。あの大きな黒人の頭と石の波止場とが私の好奇心をひどく刺戟して、私は内心恥かしい位だつた。どうしてもこの好奇心を満足させようと私は腹できめてゐたのである。そこで吾々は注意深く櫂をあはせ、荷物を積み直し、小銃を取り出して船に乗り込んだ。幸にも風は海の方から吹き上げて來たので、帆を上げることができた。後になつて發見したのだが、一般に日中數時間は風は海の方から吹いて來



て、日没には又陸の方から吹いて来るのがこの地方の通則であつた。

吾々は順風に帆をあげて三四時間河を溯航した。一度河馬の群が、吾々の船から十尋から十二尋位のところへ現はれて恐ろしい聲を出して咆えたのでジョップはひどく驚いた。私も白状すれば、少なからず吃驚した。吾々はこの時はじめて河馬といふものを見たのである。それに河馬の方でも竝々ならぬ好奇心をあらはしてゐたところを見ると、白人といふものを見たのは吾々がはじめてだつたのであらう。嘘ぢやない、二度はその好奇心を満たすために彼等は船の中へはひつて来ようとした。レオは彼等に發砲しようとしたが、私は結果を恐れて止めさせた。又吾々は兩岸の泥の上に、何百となく日向ぼつこをしてゐる鰐や、何千となく群がり飛んでゐる水鳥の群を見た。

正午頃になると太陽の熱度は益々加はつて、沼地から發散する悪臭はとてもたまらなかつたので、吾々は始終用心のためにキニーネを服んだ。流れに逆らつて、この炎天に重いボートを漕いでゆくなんてことはとても覺束なくなつた。そこで、吾々は、河縁に叢り生えてゐる柳科に屬する樹の蔭へ攀ぢのぼつて、日没が近づいてほつと息をつけるまで横になつて休息してゐた。そのうちに前方に廣い水面があるらしいのが見えたので、晩の仕事をきめるまでに、そこまで漕いでゆくことにきめて、ちやうど船の纜をゆるめようとしてゐたときに、前の方から、角の曲つた、尻に白い縞のある、一匹の美しい羚羊が五十碼ほど離れた柳の樹蔭に吾々が隠れてゐるのに氣がつかずに河へ水を飲みに下りて來た。レオが一番はじめてそれを見つけた。彼は熱心な狩獵家で、大きな獲物の血に飢ゑて、何

ヶ月もその夢を見てゐた位だから、すぐにきつとなつてセッター種の犬のやうに、ねらひをつけた。それを知らず、私は彼のエックスプレス銃を渡して、私も自分の銃を手にとつた。

「おい」と私は言つた。「射ち損はないやうに注意するがいよ。」

「射ち損ふ！」と彼は輕蔑してつぶやいた。「射ち損はうとしたつて射ち損へやしませんよ。」

彼は銃をとり上げた。茸毛色の羚羊は、腹一杯水を飲むと頭を上げてきよとく向う河岸を見まはした。彼はかうした獸の好んで通る路らしい、沼地の中の少し小高くなつたところに、夕焼の空を背景にして立つてゐたのである。私は百まで生きてもこの時の光景を忘れることができぬであらう。實に物淋しい光景ではあるが、それでゐて狩獵家の心をわく／＼させる光景だつた。

ズドン！ 羚羊は大きく跳んで逃げ出した。レオは射ち損じたのだ。ズドン！ 彈丸はまた獲物の眞つ下へ外れた。さあもう一發、私も一發射たざるべからずだ。相手は矢のやうに飛んで行つて、もう百碼以上もはなれてゐる。一發、二發、私はつゞけさまに射つた。「どうやらお前の獲物をうちとめたやうだぞ、レオ」と、こんなときにはどんなに謙遜な狩獵家の胸にでもこみあげて來る喜びを抑へながら私は言つた。

「降参しましたよ、叔父さん。お目出たう。あなたのねらひは素晴らしいものだつた。僕のはひどかつたですよ。」

吾々は船から飛び降りて、羚羊のそばへ駆けつけた。羚羊は背骨を射ち抜かれて即死してゐた。そ

の皮をむいて、持ち去れるだけの肉を切りとるのに十五分かそこらかゝつた。そのために、暗くなるまでに、やつと河が廣がつて、沼の凹地にできてゐる潟まで漕いでゆける位であつた。ちやうど暗くなつた時に、吾々はこの湖の縁から三十尋ばかりのところの投錨した。吾々は上陸するわけには行かなかつた。といふのは、上陸して見たところで、夜營のできるやうな乾いた地面があるかどうかもわからんし、それに沼から立ちのぼる毒瓦斯が非常に恐ろしかつたのである。まだ水の上にあた方が毒瓦斯の危険が少ないと思つたのである。そこで、灯をともし、またタン・シチウの夕食をすまし、それから眠らうとした。ところが、眠るところの騒ぎでない事がすぐにわかつた。何故かといふと、灯の光りにさそはれたのか、それとも三千年來飢えてゐた、珍らしい白人の臭ひにさそはれたのか知らぬが、何萬と數知れぬ蚊が吾々を襲つて來たのである。それは私がかつて書物で讀んだり、實際に見たりした蚊の中で、最も血に飢ゑた、最もしつこい、最も大きな蚊であつた。彼等は雲のやうになつて押し寄せて來た。そしてぶん／＼唸つて刺すので吾々は氣が狂ひさうになつて來た。煙草の煙なんぞは、却て益々彼等を元氣づけて、活潑にとびまはらせるだけであつた。たうとう吾々は、頭からすつぽり毛布をかぶつて、その下で、身體中をがりがり／＼掻きむしりながら、しよつちうぶつ／＼呪ひ聲を上げて、徐々に蒸鍋の中で蒸されるやうな思ひをして坐つてゐた。その時、突然沈黙を破つて、深い、ライオンの咆聲がきこえた。つゞいて、吾々から六十碼足らずの蘆の中で動いてゐる第二のライオンの咆聲が聞えた。

「ねえ小父貴」とレオが毛布の下から顔をつき出して言つた。レオは時々私をかういふ不届きな方をするのであつた。「上陸しなくて幸運だつたですな。畜生、蚊の野郎鼻を刺しやがつた」と言ひながら彼はまた顔をひっこめた。

まもなく月が昇つた。岸の上から水の面をこえて、ライオンは様々な聲をあげて咆吼してゐたけれども、吾々は大丈夫危険はないと考へてゐたものだからうと／＼眠りかけた。

どういふわけか知らぬが、ことによると、毛布の上から蚊がさした／＼めであらう、私がふと毛布の下から顔を出すと、ジョツプの低い慄へ聲が聞えた。

「あれ、あそこを御覽なさい！」

吾々はみんな岸の方を見た。するとどうだらう。汀の近くの水面に二つの大きな輪ができて、それがだん／＼大きくなつてゐる。そしてその輪の中央に二つの黒いものが動いてゐるのである。

「あれは何だ？」と私はたづねた。

「ライオンの畜生どもですよ」とジョツプは答へた。その聲の調子には、個人的な呪ひと、習慣的な尊敬と、争はれぬ恐怖との念が交々まじつてゐた。「奴等は私どもを食ひ殺さうと思つてこつちへ泳いで來るのです。」

私はもう一度そちらを見た。ジョツプの言葉にまちがひはなかつた。私は彼等の兇猛な眼の爛々たる光りを見ることのできた。たつた今殺された羚羊の肉の匂ひに誘はれたのか、それとも吾々自身の

匂ひに誘はれたのか、飢ゑた猛獣は吾々を目懸けて跳びかゝらうとしてゐたのである。

レオはもう既に銃を手にしてゐた。私は、もつと近くへ来るまで待てといつて制めて、その間に私の銃をさがした。吾々から十五呎ばかりのところは浅瀬になつてゐて水の深さは十五呎ほどであつた。第一のライオン——それは牝であつた——はすぐにそこまで渡つて来て、ぶる／＼と身體を振つて、咆吼した。ちやうどその時にレオが發砲した。彈丸は開いた口から頭の背後へ貫通して、ライオンはその場にたふれて、水煙をたてて死んでしまつた。もう一つのライオン——成長しきつた牝——がそれから二歩ばかり後にゐた。彼が前肢を浅瀬にかけた時に何事か起つた。ちやうど英國の池で、かますが小魚を捕へる時のやうに、水の面がぱた／＼騒がしくなつた。勿論その騒ぎは數千倍もひどかつたのであるが。すると突然ライオンが恐ろしい咆吼を上げて、何か黒いものを曳きすりながら浅瀬へ飛び上つた。

「大變だ」とマホメッドは叫んだ。「鰐が獅子の脚に食ひついた。」正にその通りであつた。長い口とぎら／＼した齒と鱗のついた胴體とを吾々は見るこゝろができた。

それから最もおどろくべき光景がひきつゞいておこつて來た。ライオンはどうかかうか浅瀬へはひあがつたが、鰐はなかば立ち、なかば泳ぎながらまだライオンの後肢に噛みついてゐた。ライオンは四邊の空氣が震動するやうな聲で咆えた。それから、兇猛な叫び聲をあげながら、くるりと身を翻して鰐の頭に爪をたてた。鰐はあとからわかつたことであるが、片眼を敵にくりぬかせて、その

拂ひのけながら少し前へすゝんだ。そこで今度はライオンは鰐の咽喉にとびついてしつかりと爪をたてた。かくして二つの怪物は上になり下になつて浅瀬のうへをころげまはつて獐猛に闘つた。彼等の動作を一々見とゞけることは不可能だつたが、そのつきにはつきり見えるやうになつた時には畫面は一變してゐた。鰐は血の塊のやうな眞紅な頭をして、その鐵のやうな顎で、ライオンの臀のすこし上のところを咬へて、締めつけたり、前後に振りまはしたりしてゐた。ライオンはといふと、ひどくいじめつけられて、苦しうな唸り聲をあげながら、敵の鱗のある頭に爪をたて、噛みつき、大きな後肢の爪を鰐の比較的柔い咽喉部の皮膚にたてて、まるで手袋でも引き裂くやうに、引き裂いてゐた。

やがて、急に戦は終りをつげた。ライオンの頭は、がくりと前に垂れて、鰐の背中にかぶさり、恐ろしい呻り聲を上げて死んでしまつた。鰐は暫らくの間身動きもせず立ち上つてゐたが、やがてライオンの死體を口にくはへたまゝ、徐ろに横ざまに倒れた。ライオンの胴體は殆んど二つに噛み切られてゐたのであつた。

この命がけの決闘は世にも驚くべき、戦慄すべきものであつた。こんな場面を見た人はあまり多くはなからうと私は思ふ。そして、その結末はこんな風だつたのである。

それがすつかりすむと、吾々はマホメッドを見張りにのこしておいて、その夜の残りの部分を、蚊には刺されながらも、比較的平和に過したのであつた。

## 第六章 古代基督教の儀式

次の朝東が白むと同時に吾々は起き上つて、かうした場合にできる程度の簡単な沐浴をすまして、出發の準備をした。お互の顔が見える程明るくなつた時、私は思はず失笑してしまつた。といふのは、ジョツプの肥つた、氣持のよい顔は、蚊に刺されたために殆んど實物の二倍にも膨れてゐたからである。レオとてもそれと大して變りはなかつた。三人の中では私が一番無難だつた。それは私の浅黒い皮膚が丈夫なせみにもよるだらうし、顔の大部分に鬚が一ぱい生えてゐたせみにもよるだらう。私は英國を出帆してから、ずるぶ濃い私の鬚をのび放題にさせておいたのである。ところが、外の二人は比較的綺麗に剃つてゐたので、蚊軍にとつては征服すべき平地の面積が私よりもずつと廣かつたわけである。たゞマホメッドと來ては蚊のほうでほんたうのアラー信者の味を見つけたと見えて、觸つて見ようともしなかつた。それから數日間、吾々はどんなにアラビア人の體臭を羨望したか知れない。

膨れぼつたい唇で笑へるだけ笑つてゐる間に、夜はすつかり明けはなれて、海の方から吹いて來る朝風が、沼から立ちのぼつて行手をふさいでゐる濃霧を吹き拂つてしまつたので、吾々は帆を仕立て、死んだ二頭のライオンと鰐とを注意ぶかくしらべてから、瀉を出て再び河筋をのぼつて行つた。正午になつて、風が凧いだ時、吾々は幸運にも乾いた土地へ着いたので、そこへ上陸して火を焚き、二匹の鴨と、羚羊の肉を少しばかりとを料理して食べ、翌日の夜明けまでそこに過した。勿論前夜と同じやうに蚊軍に惱まされたが、それ以外には別に災難もなかつた。それから一、二日は同じやうにして過ぎた。別段これといふ冒険もなく、たゞ綺麗な、角のない特種の羚羊を一つ射とめたこと、様々な睡蓮が咲き亂れてゐるのを見ただけであつた。

吾々が旅をしてから五日目、吾々の計算によるとアフリカの東海岸から西の方へ、百三十五哩から百四十哩行つたときに、はじめて、ほんたうに重大な事件が起つて來た。その朝は、十一時頃になるといつもの風が歇んでしまつたので、吾々は少し進んだばかりで多少疲れても來たので船を停めねばならなかつた。船の停まつたところは、吾々の漕いでゆく河と、幅五十呎ばかりのも一つの河とが合流してゐる所らしかつた。すぐそばに幾らかの樹が生えてゐた——この地方では樹といふものはただ河縁にのみ生えてゐるのである——そこで吾々は樹蔭へ行つて息んだ。地面は相當に乾いてゐたので、吾々は河縁に沿うて少しばかり歩いて四邊の様子をしらべたり、食用のために水鳥を射つたりした。五十碼も行かぬうちに吾々は、この上ボートで河上へ漕いでゆくことは絶対に不可能であることを見きばめた、といふのは吾々が上陸した地點から二百碼ほど上流には淺瀬と泥洲とがつゞいてゐて、水深は六時位しかなかつたからである、全くもつて、それは水の袋小路であつた。

そこで吾々は引きかへして、今度は別の河を岸に沿うて河上へ上つて見た。すぐに吾々は色々な徴候に照して、これは、ザンジバルの海岸のモンパサで見られるやうな古代の運河であるといふ結論に

達した。このモンバサの運河といふのは、タナ河とオジイとを聯結するもので、タナ河を降つて来た船舶は河口の危険な砂洲を避けるために、オジイへ行つてそれから海へ出るやうになつてゐるのである。吾々の前にある運河は世界史の或る遠い昔の時期に、人間の手で鑿掘されたものに相違なく、その痕跡は、昔曳船につかつたものらしい高い提防の形にのこつてゐた。ところへく水のために凹みができたり、陥没したりしてゐるのを除けば、粘土でかためた固い兩岩の提防の間の距離はずつと同じで、流れも深さも同じであるらしかつた。水流は極く少なく、或は皆無なので、運河の表面は草で塞がれ、その間をきれいな水の小流が縫うてゐた。それは、水鳥や蜥蜴やその他の毒蟲が絶えず通るためにできたのであらう。そこで、河を溯航することができないことが明白になつたので、運河を上つて見るか、それとも海へ引きかへすかより外には道のないことも明白になつた。兎も角吾々は、現在のところにとゞまつてゐるわけにはゆかなかつた。そこに止まつてゐれば、太陽に照りつけられ、蚊に食はれて、恐ろしい沼で熱病にかゝつて死ぬまで、ある。

「どうせ運河を上つて見なくちやならんだらうな」と私は言つた。三人はとり／＼に賛成した。レオはまるで此の上ない冗戯のやうな調子で、ジョツプは、いや／＼ではあるが生命もだしがたしといつた調子で、マホメッドはアラーの名を唱へて不信者の考へかたや旅のしかたを呪ひながら。

そこで、吾々は、もう順風を期待することもできなかつたので、日が低くなるのを待つて出發した。はじめ一時間程は、どうかかうか船を漕いでゆくことができたが、それから先は雜草があまりに

はびこつてゐるために漕ぐことができないので、原始的な、最も骨の折れる手段をとつて、船を曳いてゆかねばならなかつた。マホメッドとジョツプと私との三人は二時間も船を曳いた。私は優に他の二人力はあると思はれてゐたのである。レオは船首に腰をかけて、マホメッドの劍で、流れのまはりにはびこつてゐる雜草を切り拂つてゐた。暗くなると吾々は暫らく息んで、蚊の御見舞を受けてゐたが、眞夜中になると、幾らか涼しくなつたので、また歩き出した。それから明け方に三時間程やすんで、また出發し、十時頃まで歩きつゞけたが、その時、雷鳴が猛雨を伴つてやつてきたので、それから六時間といふものは、吾々はまるで水を浴びてゐるやうな始末だつた。

それからあと四日間の旅の様子は、こゝで詳しく述べる必要があるかどうか私にはわからない。たゞ私がこれまでに送つた月日の中で最も、みじめな月日で、明けても暮れても、ひどい勞働と、暑さと、蚊とに苦しめられてゐただけ言つておけばよいであらう。どこまで行つても果しのない氣味の悪い沼地なので、吾々が熱病にかゝらずにすんだのは、始終キニーネや下劑を服用してゐたのと、しよちゆう是が非でも働かねばならなかつたためとだらうと思ふ。運河にはひつてからの旅の三日目に、沼から立ちのぼる靄をとほして、ぼおつと霞んでゐる丸い丘が見えた。それから、四日目の晩に吾々が夜營してゐると、この丘は吾々から二十五哩か三十哩位のところにあることがわかつた。

それまでに、吾々はすつかり疲れはて、しまつて、手にはまめができて、もはや一碼も船を曳いてゆくことはできなくなつたやうな氣がした。いつそのことこの恐ろしい沼の中に横はつて死んでしま

つた方がましだと思つた。それは實にひどい場所であつた。こんなところへ来る白人はこれから先だつて滅多になからうと思つた。疲れきつたので、船の中で眠らうと思つて横になると、結局はこんないやな沼地の中で死んでしまふにきまつてゐる狂ひじみた旅の一行に加はつたのがいましくなつて来た。うとくとまどろむと、これから二三ヶ月もたつたら、この船や、不幸な船の乗組員はどんな姿になるだらうと思つた。船はこはれて、中には臭い水がたまつてゐることであらう。そしてその水は霧を含んだ濕つぽい風に揺り動かされて、朽ちはてた吾々の骨を洗つてゐることであらう。この船と、この船に乗つて馬鹿げた傳説を信じて自然の祕密をさぐりに来た一行の運命はさうなるに相違ないと私は思つた。

もう既にから／＼になつた私の骨に水が漣をたて、寄せて来て、それをがら／＼なぶつてゐる音が聞えるやうな気がした。私の頭蓋骨がマホメッドの頭蓋骨の方へころげてゆき、マホメッドの私の方へころげて来て、遂にはマホメッドの頭蓋骨が脊椎の上に立つて、空つぽの眼窩で私をにらみつけ、私のやうな基督教徒の犬が、ほんたうの信者の最期の眼りを妨げたと言つて私を罵つてゐるのが聞えるやうな気がした。この恐ろしい夢に身慄ひして私は眼を開いた。すると今度は夢でない或る物を見て身慄ひした。といふのは霧のこめた暗がりの中に、二つの大きな眼が、私をじろ／＼凝視めてゐたからである。私は立ち上つて、つゞけさまに恐怖と狼狽との叫び聲をあげた。すると他の者も、眼と恐ろしさで、よろ／＼しながら酔つたやうに跳び起きた。その時突然、冷たい鋼鐵が眼の前

に閃いて、刃の廣い槍が私の咽喉に擬せられた。そしてその背後には別の槍がきら／＼と慘忍な光を放つてゐた。

「靜かにしろ」と一つの聲がアラビア語で、いやアラビア語といふよりも、アラビア語の澤山まじつた土語で言つた。「河を泳いでこゝへ来たのは何者だ？ 言えい、言はなければ殺してしまふ。」そして鋼鐵はするどく私の咽喉におしつけられた。私は全身がひやりと冷たくなるのをおぼえた。

「吾々は旅の者で、偶然にこゝに來たのです」と私はできるだけ上手なアラビア語で答へた。それが相手に通じたと見えて、その男は後をふり返つて、うしろの方に見えた脊の高い人間に向つて話しかけた。「長老さま、殺しませうか？」

「その連中の皮膚はどんな色だ？」とどつしりした聲が答へた。

「白でござります。」

「殺してはならぬ」と彼は答へた。「四日前に、全能の女王から、『いまに白人が来る、白人が來たら殺してはならぬ』といふお達しがあつた。あの人々を持ち物と一緒に、全能の女王のお邸へつれてゆけい。」

「こつちへ來い！」と男は船から私を半ば案内をし、半ば曳きすり出しながら言つた。見ると他の連中も矢張り他の男につれ出されてゐた。堤防の上にはかれこれ五十人ばかりの仲間の者が集つてゐた。薄明りですかして見ると、彼等は皆

大きな槍をもつてゐて、非常に丈が高く、頑丈な體格をしてゐた。皮膚の色はあまり黒くなく、腰のあたりに豹の皮をまきつけてゐるほかは裸體のまゝだつた。

レオとジョツプとはすぐに前へ突き出されて私のそばに坐らされた。

「一體どうしたんだ？」とレオは眼をこすりながらたづねた。

「妙なことになつて來ましたな」とジョツプは叫んだ。ちやうどその時に騒ぎが起つて、マホメツドが吾々の間へひよろくと轉げ込んで來た。そして、そのあとから、影のやうな姿が槍をふりかざしながらついて來た。

「アラ―！ アラ―！」とマホメツドは悲鳴を上げた。「助けたまへ、守りたまへ」彼はもう到底助からぬと思つてゐたのである。

「長老様、これは黒人でございます、全能の女王は黒人のことはどう仰言いました？」と一つの聲が言つた。

「女王は黒人については何とも仰言らなうだが、殺してはいけない。お前はこちらへ來い。」

男は前へ進んだ。すると丈の高い影のやうな姿が前へ屈んで何事かを囁いた。

「ははつー」と相手の男は答へて、何となく血を凝らせるやうな不氣味な薄笑ひを洩らした。

「白人は三人ともそこにあるか？」と影のやうな姿がたづねた。

「はい、そこにをります。」

「では用意のものをもつて來て、河に浮いてゐるもの、中でもてるだけのものを残らずもつてゆけ。」

その言葉が終るか終らぬうちに、一同の者は蓋ひのついた駕籠をかついで來た。駕籠にはめいゝく

四人の駕籠かきと二人の槍持ちとがついてゐた。どうやら吾々はその中へ乗せられるらしかつた。

「しめた」とレオは言つた。「誰か吾々を運んで呉れる者があるとは有り難い、ずゐぶん一人でてくつて來たからなあ。」

レオはいつでも物事を陽氣に考へる方だつた。

ほかの者がみんな駕籠の中へはひるのを見てから、私も外に仕方もないので駕籠に乗つたが仲々乗り心地は良かった。それは草の繊維で織つたものらしく、身體の動くまゝにしなやかに伸びたり縮んだりした。そして上と下とが擔ぎ棒にくくりつけてあるので頭と首とをのせるにあつらへ向きに出來てゐた。

私が身を落ちつけると、すぐに駕籠かきどもは、單調な歌聲に足並を合はせて威勢のいゝ早足で出かけた。私は半時間ばかり、ちつと横になつていろゝなことを考へまはしてゐた。こんなことをケンプリツヂの學友どもに話したら信するだらうかとか、一體これから先どうなるであらうかとか思ひめぐらしてゐるうちに、いつしか眠つてしまつた。

かれこれ七八時間も眠つたに相違ないと思ふ。アラビア船が沈没する前の晩以來ほんたうに安眠したのはこの時がはじめてだつた。眼が覺めたときは、太陽はもう高く空に昇つてゐた。吾々はまだ、

一時間四哩位の足どり旅をしてゐた。駕籠のうすいカーテンの隙間から、のぞいて見ると、有り難いことには、もう果てしのない沼地を通り抜けて、ふやけた草原の中を、盃形の丘の方へ旅してゐるのであつた。この丘は吾々が運河から見た丘なのかどうかは私は知らない。その後今になるまでつひにわからずじまひだつた。といふのは後から知つたことであるが、この土人どもは、さうしたことに ついては、殆んど何も教へてくれないからである。その次に私は吾々を運んでゐる人々を見た。彼等は皆すばらしい體格で、六尺以下のものは殆んどなかつた。そして皮膚の色は黄味を帯びてゐた。概して彼等の外貌は東アフリカのソマリ族に似てゐたが、髪は縮れ毛でなくて、漆黒の捲毛になつて兩肩に垂れてゐた。顔は彎曲してゐて多くは大變容色がよかつた。特に齒竝は揃つてゐて美しかつた。だがそんなにも美しいにも拘らず、私は全體として、これ程兇惡な顔は見たことがないと思つた。何となく冷やかで、不愛想で、慘忍性を帯びてゐるので私はどうも蟲が好かなんだ。實際、その中の或る者の顔はあまり甚だしくて、薄氣味が悪い程であつた。

彼等について、もう一つ氣のついたことは、彼等が決して笑はぬらしいといふことであつた。時々彼等は、私が前に言つたやうに單調な歌を歌つたけれども、歌を歌はない時は殆んど完全に黙つてゐて、笑ひのために彼等の陰氣な邪惡な顔が晴れ晴れすることは決してなかつた。彼等は一體何人種なのだらう？ 彼等の話す言葉はアラビア語の系統であるが、彼等はアラビア人ではない。その點はたしかである。アラビア人にしては色が黒すぎる、黒いといふよりもむしろ黄色すぎる。何故かは知らぬが彼等の顔つきを見ると私はぞつとした。そしてそれが恥かしくなつた。私がなほも怪しんでゐるうちに、別の駕籠が私の駕籠と並んだ。その中には——カーテンがあけてあつたので——白つぽい上衣を着た一人の老人が坐つてゐた。その上衣は粗い麻布でつくつたものらしく、ゆつたりと身體のまはりに垂れてゐた。私はすぐにそれは、岸の上に立つて「長老様」とよびかけられてゐた影のやうな姿であると考へた。この老人の様子は實に驚くべきもので、雪のやうな長髯は駕籠の兩側に垂れてをり、鼻はかき鼻で、その上に、雙つの眼が、蛇の眼のやうに鋭く光つてゐた。そして顔全體には、賢こさうな人を愚弄するやうな、とても筆紙にあらはすことのできない様子が見えた。

「眼が覺めましたかな、他國の人？」と彼はどつしりした低い聲で言つた。

「はあ、覺めました、長老」と私は丁寧な答へた。この老人にとり入つておけばきつとよいことがあるだらうと思つたからである。

彼は美しい白髯をしごいて、かすかに笑つた。

「どこの國から迷つてお出でになつたか知らんが」と彼は言つた。「多分、この土地の言葉の知れてゐる、そして、子供に禮儀をしつける國からお出でなさつたのぢやらう。で一體この土地へ何のためにお出でなさつた、まだ人の知つてゐる限り、他國の人で、この國へ足を踏み込んだ者はないですぢや。あんたと連れの人とは、この世の中がいやにでもおなりなさつたか？」

「吾々は新しいものを見に来たんですよ」と私は大膽に答へた。「吾々は古いものがいやになつたん



で、まだ知らないものを知るために海から上つて来たんです。私の非常に尊敬する長老、吾々は勇敢な種族で死をも恐れぬのです——といふのは死ぬ前に少しでも新しい事を知つて死ねばですね。」  
「ふむ！」と老紳士は言つた。「それはほんたうかも知れん、あんたは誠を吐いてあると言ひたいが、あんたの言葉に逆らうのも輕はずみぢやらう。ところで、その望みなら、全能の女王がかなへて下さるぢやらうて。」

「全能の女王といふのはどんな人です？」と私は好奇心にかられてたづねた。

老人は駕籠かきどもをちらりと見て、私の心臓をいくらかひやりとさせるやうなかなかな微笑を浮かべながら答へた。

「そのことは、若し女王が、あんたを肉のついたまゝで御覽になる思召しなら、すぐにわかりますわい。」

「肉のついたまゝで？」と私は答へた。「それは一體どういふ意味ですか？」

老人は物凄く笑つた。けで返事はしなかつた。

「長老の國の人種は何といふのです？」と私は訊ねた。

「わしの國の住民はアマハツガー族といひますぢや、つまり岩の民といひますぢや。」

「甚だ失禮ですが、長老のお名前は？」

「わしの名はピラリぢや。」

「吾々はどこへ行くんです？」

「今にわかりますわい」かう言つたかと思ふと、老人は駕籠かきに合圖をして、先の駕籠のそばまで走らせた。その駕籠にはジヨツプが片脚をだらりと外へ投げだして寝てゐた。けれども老人はジヨツプからは大して要領を得なかつたと見えて、すぐにレオの駕籠の方へ駕籠かきを走らせてゐるのが見えた。

その後は何もかはつたことは起らなかつたので、私は、氣持よく駕籠に揺られながら、また眠つてしまつた。眼が覺めた時には、吾々は、熔岩でできた岩だらけの峽路を通つてゐた。兩側の峻しい崖には美しい樹や花の咲いた灌木などが澤山生えてゐた。

やがてこの峽路を廻ると、美しい光景が眼前に展開された。吾々の前には、廣さ四哩から六哩もある大きな盃形の地面があつて、ちやうど羅馬の圓形劇場の様な形になつてゐた。この大盃の周壁は岩だらけでできつしり草藪に被はれてゐたが、中央部は豊穰な牧場で、すばらしくよく茂つた獨立の立木がこゝかしこに點綴され、小河が縦横に貫流してゐた。このよく繁つた草原に、山羊や牛の群が草を食んでゐたが、羊は見えなかつた。はじめ私は、この不思議な場所は何であるか想像もつかなくなつたが、すぐに、それはずつと昔に活動を熄めた火山の噴火孔で、後にそれが湖になり、最後にどういふわけでか水が乾いたものであらうと考へつた。私はこゝで言つておいてもよいが、その後にもつと大きな、しかしその他の點ではこゝと同じ場所をいくつも見た經驗に照して、私の斷定は正し

いと信ずべき理由をもつてゐる。いづれそれ等の場所については後で語る機会があるだらうと思ふ。だが私に合點のゆかなかつたのは、山羊や牛を飼つてゐる人間の姿は見えるが、人間の住家らしいものは何處にも見當らなかつたことである。一體彼等はどこに住んでゐるのだらうと私はあやしんだ。しかし私の好奇心はすぐに充たされた。駕籠の行列は左へ曲つて、半哩か、それよりもいくらか短い距離を、噴火孔の崖のそばに沿うて行つた。長老のビラリが駕籠から出たのを見て、私もそれにならつた。レオもジョップもその通りにした。一番はじめに氣のついたことは、かはいさうなアラビア人のマホメッドが、へとくへに疲れて地べたに横はつてゐたことであつた。彼は駕籠に乗せられずに、こゝまでの道中をすつかり歩かされたものらしかつた。出發の時でさへひどく疲れてゐたのだから、今はもう、ぐたぐたになつて地べたにへたばつてゐた。

四圍を見まはすと、吾々がとまつたところは大きな洞窟の入口で、その前に一つの臺があり、その臺の上にはポルトの中にあつたものがすつかり、樞から帆に至るまで取り揃へておいてあつた。洞窟のまはりには吾々を護送して來た人々や、それによく似た人々が群がつて立つてゐた。皆、脊が高く、きれいであつた。但し、皮膚の黒さは様々で、或る者はマホメッドのやうに黒く、或る者は支那人のやうに黄色だつた。彼等は腰に豹の皮をまきつけてゐる外は、みんな裸體で、めい／＼大きな槍をもつてゐた。

中には女もまじつてゐた。女どもは、豹の皮のかはりに小さい赤い羚羊の鞆皮をまとうてゐた。女どもは一體にきれいで、眼は大きく、黒く、顔の輪郭はくつきりしてゐた。髪は黒人のやうに縮毛ではななくて、厚い捲毛で、黒から栗色までの中間の様々な色合ひであつた。少數ではあつたが或る女はビラリが着てゐたのと同じやうな黄色っぽい麻の上衣を着てゐた。あとから知つたことであるが、これは女どもの好みによるのではなくて、地位のしるしであつたのである。その他、女の様子は男のそれのやうに兇猛ではなく、それに、女たちは時々笑ひもした、尤もそれはごく稀れであつたけれど。吾々が駕籠から降りると、すぐに女どもは、吾々の周圍に集つて來て、物珍らしさうに、しかし大して騒がずに吾々をしらべまはした。けれどもレオのすつきりした狩獵家らしい體格と、くつきりした希臘式の顔とは、明らかに彼女等の注意を惹いたらしく、彼が帽子をとつて慇懃に一同に挨拶をして黄色い捲毛を見せると、ひそ／＼と感歎の嘯きが起つた。そればかりではなかつた。麻の上衣を着て黄色と栗色との合の子の色の髪をした一番容色のよい一人の若い女が、おもむろに彼の方へ進み出て、しづかに彼の頸へ腕をまきつけ、前屈みになつて、彼の唇に接吻した。その様子は、そのつもりでしただけではなくても、たしかに相手を誘惑するに十分だつたらうと思ふ。

私は今にもレオが槍で刺し殺されやしないかと思つて、思はず聲をあげて歎息した。ジョップは、「このお轉婆の奴、ふとい奴だ！」と怒鳴つた。當のレオは少し吃驚した様子だつたが、やがて、これはてつきり古代基督教徒の慣例の行はれてゐる土地へ來たのであるといふことに氣がついて、落ちつき拂つて接吻を返した。

私はまた何か起りはしないかと思つて歎息した。ところが意外にも、少数の若い女は少しいまく、しさうな様子を示したが、年老つた女や男どもは、ほんの少し笑つたゞけであつた。あとでこの不思議な民族の習慣がわかつて来たときに、この謎はすつかり解けた。アマハツガー族の女は、世界中の他の殆んどすべての蠻族の習慣とは反對に、男子と全く平等であつて、少しも男子に束縛されてゐないのであつた。血統は凡べて母系にしたがひ、吾々歐羅巴人が、父系の先祖のことを誇るやうに、彼等は、母系の先祖のえらいことや古いことを誇りとし、父親には一向注意を拂はず、明らかに父親の知れてゐる場合でも、それを父親とはみとめないものであつた。各部落はそれ／＼家族と呼ばれてゐたが、この家族にはそれ／＼名儀上の父が一人づゝあつて、それは、その部落の選舉された直接の支配者であつた。たとへば、このピラリも七千人ばかりの人員を有する部落の支配者であつた。で、ある女が自分の氣に入つた男があると、公衆の面前でその男のそばへ行つて彼を抱擁して、それで、自分がその男を選んだといふことを示すことになつてゐた。ちやうど、今、美しい、そして非常に機敏なアステーンといふ若い女がレオを抱擁したのはそれである。若し男の方で接吻を送り返すと、男が女の申込みを承諾したしるしになるのであつた。そして此のとり極めは二人のうちのどちらか飽きてしまふまでつゞくことになつてゐた。だが、こゝで附言しておかねばならぬことは、夫をかへることは、吾々が豫想するほど頻繁には行はれなかつたといふことである。又そのために争ひが起るといふやうなこともなかつた。争ひは起らなかつた。彼等は自分の妻が外の男に思ひを寄せ去つてしまつても、それは、個人々々にはつらくても社會全體のためになることで、且つ己むを得ないことであるとして、ちやうど吾々が所得税や婚姻法を承認するのと同じやうにそれを承認してゐるのであつた。

## 第七章 アステーン歌ふ

公開接吻の儀式がすむと——ついでに言つておくが、こんな風にして可愛がつてやらうと申込んだ女は私にはなかつたが、ジョツプには一人の女がつきまとうて、この謹嚴な男をおどろかせた——ピラリ老人が前へ進み出て、手を振つて洞窟の中へはひるやうに合圖をした。吾々がそちらへ行くと、私がレオと密談があるのだからといふことを仄めかしても、それをきかずに、アステーンがあとからついて来た。

五歩も行かないうちに私は、吾々のはひつて行つた洞窟は自然にできたものではなくて、人間の手でくり抜かれたものであることを知つた。吾々の判断したところでは、それは長さ百呎、幅五十呎位で、非常に天井は高く、何よりも寺院の歩廊に似てゐるやうに思はれた。この歩廊からは、十呎か十呎位の間隔をおいて通路が開けてゐた。それは小さい室へ通するものらしかつた。洞窟の入口から五十呎ばかりはひつて、ちやうど外の光りが暗くなつてきたところに火が燃えて、周囲の壁に大きな影を投げてゐた。ピラリはそこに立ちどまつて、吾々にも坐るやうにつげ、今に者ども

が食事を運んでくると言つた。そこで吾々は吾々のために敷かれた豹の皮の上に坐つて待つてゐた。やがて、若い娘たちが食事を運んで来た。それは山羊の肉の煮たのと、土製の壺に入れた新鮮な牛乳と、玉蜀黍の焼いたのとであつた。吾々は殆んど飢ゑてゐたので、生れてから今までに、こんな甘美しい食事をしたことはないやうに思つた。實際食事が終るまでに、吾々は、吾々の前に置かれたものを片つ端から残らず平げてしまつた。

吾々が食事をすました時に、今までだまりこくつてじろく、吾々を見てゐた、少々無愛想な吾々の主人のピラリは、起ち上つて吾々に話しかけた。彼はこん度のことは實際不思議だと言つた。この岩の民の國へ、他國の白人が来たのを見たり聞いたりした人は一人もなかつたのである。時々、いつでも極めて稀れではあつたが、黒人がやつて来て、黒人の口から、彼等よりも色の白い人間が船で航海してゐたといふ話は聞いてゐたが、その白人がやつて来たのは前代未聞であつたのだ。然るに、彼は、吾々が運河を船を曳いて来るのを見たのである。彼はあけすけに言つたが、その時、吾々を皆んな殺してしまふやうに命令を發したのださうである。といふのは他國人が此の國へはひつて来ることは不法だつたからである。ところが、ちやうどその時に、全能の女王から、吾々の命を助けよといふ達しがあつたので、それで吾々はこゝまでつれて來られたといふわけであつた。

「ちよつと長老」と私はそこで話の腰を折つた。「その全能の女王といふ方はまだずつと先に住んでをられるのに、どうして吾々の來たことがわかつたのです？」

ピラリは後ろを振り向いて、誰もゐないことを知つたので——アステーンは彼が話をはじめた時に退座してゐたのである——少しく不思議さうな笑ひを浮べて言つた。

「あんた方の國には眼がなくても見えたり、耳がなくても聞こえたりする人はゐませんか？ まあ、何も訊ねなざるな、あの方にはわかつてゐたんですわい。」

私はそれを聞いて肩をすくめた。彼は言葉をつゞけて、吾々の處置については何の達しもないから、これから全能の女王に謁見に行くのだと言つた。この全能の女王といふのはアマハツガー族の女王であることを吾々は彼から聞いて知つた。

私が彼にどの位留守にするのかと訊ねると彼は急いで行けば五日目には歸れるだらうが、何しろ女王のところまでゆくには何哩もある沼地を越さなくちやならんからと言つた。それについて、彼は、留守中は萬事手落ちのないやうにしておくし、彼は個人としては吾々が氣に入つたから、きつと女王様のお沙汰も命に別條はなからうと言つた。しかしそれと同時に、彼は、それも疑はしいと思つてゐることを隠さずに言つた。といふのは、彼の祖母の代にこの國へ來た他國人も、彼の母の代にこの國へ來た他國人も、彼自身の代になつてからこの國へ來た他國人も、みんな容赦なく殺されてゐるからといふのであつた。しかもその殺し方は吾々が恐ろしがるから言はずにおくと言つた。そしてこの死刑は女王自身の命令によつて行はれるのだといふことであつた。少くも彼はさう思ふと言つた。何れにしても女王はこれまでに、彼等の命を助けるために口出しされたことはないのであるといふのであ

つた。

「だつて可笑しいぢやありませんか？」と私は言った。「あなたは分御老體であらつしやる。それだのにあなたは三代も前のことを言はれたが、その時はまだ女王は生れてをる筈もないのにどうして女王があなたの祖母さんの若い時分などに人に死刑の命令を下すことができたんですか？」

ビラリはまた笑つた。それは此の老人に獨特の笑であつた。そして丁寧にお叩頭をして、何の返事もせずに彼はいつてしまつた。それから五日間吾々は彼を見なかつたのである。

彼が去つたあとで、吾々は、この恐ろしい現在の境遇について、色々話があつた。私は、かはいさうな他國人を無慈悲なやりかたで殺すやうに命令するらしいこの不思議な全能の女王の話はもう眞平だつた。レオもこれには氣を重くしてゐたが、この女王こそ、まぎれもなくあの壺の破片に書いてあつた記録や親父の手紙の中に記してあつた女に相違ないと勝ち誇つたやうに指摘して自分を慰めてゐた。その證據として彼はビラリがその女王の年齢や不思議な力について言つたことをあげた。私は次から次へと起つてくる事件のためにすっかり氣をのまれてゐたので、そんな馬鹿げた話の相手になる氣は毛頭なかつた。それで、外へ出て沐浴をしようではないかと提議した。吾々は皆沐浴がしたくてたまらなかつた矢先きなのである。

そこで、吾々の意志を、ひどく不愛想な顔つきをした中年の男に傳へた。この男は、老人の留守中その代理として吾々の世話をしてくれてゐる男らしかつた。吾々は一團になつて、煙管に火をつけながら出かけた。洞窟の外には、澤山の土人が吾々の出てくるのを見守つてゐたが、吾々が煙草の煙を吐きだすと、これは素敵な魔法使ひだと言ひながら、散り／＼に逃げ出してしまつた。實際、吾々について彼等が何よりも大騒ぎをしたのは煙草の煙だつた。吾々のもつて来た銃ですらこれ程彼等を驚かしはしなかつた。それから吾々は流れの岸について靜かに沐浴した。但し女どもの中には、どうしてもそんな處までも吾々について來ると言つてきかない者もあつた。アステーンもその仲間の一人であつた。

吾々が此の上なく氣持のいゝ沐浴を終へた時までには太陽は沈みかけてゐた。實際、吾々が大きな洞窟の中へ歸つて來たときには、もうすっかり太陽は沈んでゐた。洞窟の中には幾つかの焚火が燃えてゐて、その焚火のまはりには澤山の人が集つて、ちら／＼する焚火の明りと、壁のまはりや上に釣してある燈火の明りとで、夕食をしてゐた。

暫くの間吾々はすわつて、この兇猛な連中が、彼等と同様に不氣味な沈黙のうちに夕食をしてゐるのを見てゐたが、たうとう、彼等を見るのにも飽き、岩の壁にうつゝてゐる影の動くのを見るのにも飽きて來たので、私は、吾々の新しい接待係の男に、もう寝たくなつたと言つた。

一言も言はずに彼は起ち上つて鄭重に私の手を取りながら手燭をもつて、中央の洞窟から開いてゐる狭い通路の一つへ進んで行つた。そのあとからついてゆくと、突然通路は廣がつて、八呎平方ばかりの、天然の岩をきつてこしらへた小さな室になつてゐた。この室の一方には地面から三呎ばかり

り高くなつた石の板があつて、それはちやうど船室の中の寢棚のやうになつてゐた。私の案内者は、私にその上に寝るのだと告げた。室の中には窓もなく、風孔もなく、家具も全くなかつた。室内を仔細に點検して見た結果、私は、これは以前には生きた人間の寢所ではなくて、死人の墓場に使はれたもので石の板は屍體をのせるためにつくられたものであるといふ氣味の悪い結論に到達した。そしてあとになつてから、この推定は全く正しかつたことがわかつた。このことを考へると私はどうしても胸慄ひがとまらなかつた。けれども、どの道どこかで眠らなくてはならんといふことがわかつたので、私はできるだけ自分の感情を殺して、ほかのものと一緒の船から運ばれて來た毛布をとり洞窟へ引き返した。洞窟の中で私はジョツプに會つた。ジョツプも同じやうな室に入れられたのであるが、室の様子がとても恐ろしくてぞつとするので、そこにゐることができなかつたのだと言つた。そして、あんなところに居る位なら、一そのこと死んでしまつて、一思ひにお祖父さんの煉瓦の墓場へ埋められた方がましだと言つた。そこで、彼は、若し差支へなかつたら私と一緒に寝かして貰ひたいと頼んだので、私は無論二つ返事で承知した。

その夜は大體に於て氣持ちよく過ぎて行つた。何故大體に於てなんて言ふかといふと、私自身は生き埋めにされた夢を見てひどくうなされたからである。これはきつと周圍の墓場の光景が頭に沁みこんでゐたからであらう。明け方に吾々は若いアマハツガー人が吹きならす高い喇叭の音におどろかさ

これはてつきり起きるといふ合圖だらうと思つて、吾々は起き上つて、小河へ洗面に行つた。それがすむと朝食の準備ができてゐた。朝食の時、あまり若くない年増女が進み出て、皆んなの前でジョツプに接吻をした。不作法な點は別として、これは實に愉快な光景であつた。謹嚴なジョツプが怖ろしきといやらしさで弱つてゐた光景は終生忘れることができぬ。ジョツプは私と同様女嫌ひであつた。多分これは十七人も家族のある家に生れたせいでだらうと私は思ふ。そのジョツプが、自分の方は承知もしないのに公衆の面前で接吻をされたゞけならまだよいが、自分の二人の主人もそれを見てゐる前なのだから、その時の彼の表情はかはいさうな程混亂を極めたものであつた。彼はその場に立ち上つて、三十そこそこの年増女を邪険に押しつけた。

「とてもたまらん」と彼は溜息をした。すると女は、彼がはにかんでゐるのだと勘違ひして、また彼に接吻した。

「あつちへ行け、いつちまへ、このあばずれ女」と彼は、自分が食事をしてゐたスプーンを女の顔の前で上下に振りながら叫んだ。「皆さんどうぞ御勤辨を願ひます。私はこの女にそんな素振りを見せたのぢやないのにこの女はまたやつて來るんです。つかまへて、下さい。ホリイ様、私にはとても我慢ができません、とても。こんなことは前に一度だつてなかつたんです。これ位私の性分に合はんことはないんです。」こゝで彼は言葉を切つて、一生懸命に洞窟の方へ逃げ出した。その時私は初めてアマハツガー人が笑ふのを見た。だが當の女は笑はなかつた。笑ふどころか、彼女は、憤怒のあまり

髪の毛を逆立て、ゐた。それを外の女がひやかすので彼女の怒りは益々募る一方であつた。彼女はその場に棒打ちになつて、憤怒に身をふるはしてちつとにらみつけてゐた。私はその形相を見て、ジョップの謹厳が却つて災難にならねばよいがと思つてゐたが、案の定、あとになつて見ると私の推測は間違つてゐなかつた。

女が退つたのでジョップは、ひどく昂奮しながら引き返して来て、傍へ寄つて来る女たちを一々心配さうな眼つきで見まはした。私はその機会に家人たちに向つて、ジョップには妻があつたのだが、家庭に不幸があつた、めに、こゝへ来てゐるのだから、そのために女を見ると恐がるのだと説明した。だが一同の者は私の説明をきいてもだまつてゐた。彼等は、吾々の従者の行ひを、彼等家族全體に對する侮辱だと考へてゐることは明白だつた。

朝食がすむと吾々は散歩をして、アマハツガー族の家畜の群や耕地を檢分した。彼等は二種の牛を飼つてゐた。一つは大きい、骨ばつた角のない乳牛で、いま一つは、小柄で肥つた肉牛であつた。山羊は毛の長い種類で、肉をとるだけの目的で飼はれてゐた。少なくとも私は山羊の乳を搾つてゐるのを見たことはなかつた。アマハツガー族の耕作法は、非常に原始的なもので、農具といつては、たゞ鐵でこしらへた鋤があるばかりだつた。この民族は鐵を製鍊して、細工することを知つてゐたのである。この鋤は大きな槍の穂のやうな形をしてゐて、足をのせる肩がついてゐなかつた。そのために土を掘るのに大變な勞力がいつた。それでも彼等は男も女も耕作をしてゐた。多くの野蠻人の習慣のやうに、手先きの勞働を全くしなくてもよい者はなかつたのである。とは言へ前にも言つたやうに、權利は女の方にあつたのである。

はじめ、吾々は、この不思議な人種の起源や法律が皆目わからないので困つた。彼等はまた不思議にこの點について何も教へてくれなかつた。しかしながら、時がたつにつれて——といふのは、次の四日間は別に大した出來事もなかつたので——吾々はレオの女友達のアステーンから若干のことを聞き知つた。ついでに言つておくが、この女は、影のやうにレオのそばに附きまとうてゐたのである。起源については、少なくとも彼女の知つてゐる限りでは、起源といふやうなものはないといふことであつた。しかし、女王のすまひの近所には、石造の壁や柱などの澤山たつてゐるコオルといふ岡があることを彼女は知らせてくれた。物識りの言ふところによると、そこには太古に家があつて人がすんでゐたので、アマハツガー族はその人々の子孫ではないかといふことであつた。けれどもそこには幽霊が出るといふので、誰もこの廢墟のそばへ近寄らないで、たゞ遠くから眺めてゐるだけだとのことである。國內には、これに似た廢墟が方々にあつて、沼地の平面から高くなつてゐる山には皆それがあつた。彼女が聞き知つてゐた。彼等が住んでゐる洞窟も、多分これ等の都市をこしらへた人々の手によつてくり抜かれたものであらう。彼等は成文律をもつてゐず、たゞ習慣だけを守つてゐたのであるが、この習慣は法律と同様の拘束力をもつてゐた。もしこの習慣を破るものがあると、家族の長老の命令によりて、死刑に處せられたのである。私は死刑はどんな風にして行はれるのかと聞いたが、

彼女(かのぢよ)はたゞ笑(わら)つてゐるばかりで答(こた)へなかつた。そしていづれ近いうちに見(み)られるだらうと言(い)つた。

しかし彼等(かれら)には女王(ぢよわう)があつた。全能(ぜんのう)の女王(ぢよわう)といふのが彼等(かれら)の女王(ぢよわう)であつた。けれども女王(ぢよわう)が姿(すがた)を現(あら)はすことは極(ごく)く稀(まれ)れで、二三年(にさんねん)に一度(いちど)、罪人(ざいじん)に死刑(せいけい)を宣告(せんこく)する時に姿(すがた)を見(み)せるだけであつた。しかもその時(とき)には女王(ぢよわう)は大きな被布(ゴエール)を頭(かぶ)からかぶつてゐるので、誰(たれ)にも顔(かほ)は見(み)えないとのことであつた。女王(ぢよわう)の近侍(きんせい)の者(もの)は皆(みな)鬻(う)でその上(うへ)に唾(つば)だつたので、少しも話(わら)を聞(き)くことはできなかつたが、女王(ぢよわう)はこの世(よ)の中に古往(こわう)今來(こんらい)住(す)んでゐたどの女(ぢよ)よりも美(うつく)しい女(ぢよ)だといふ評判(ひやうばん)であつた。又(また)彼女(かのぢよ)は不死(ふし)で萬物(ばんぶつ)を支配(しはい)する力(ちから)をもつてゐるといふ噂(うわさ)であつたが、アステーンはそのことについては何も知(し)つてゐなかつた。女王(ぢよわう)は時々(ときどき)夫(うそ)を遣(や)んで女子(ぢよし)が生(う)まれるとその夫(うそ)を殺(ころ)し、女(ぢよ)の子(こ)が大き(おほ)くなつて女王(ぢよわう)が死(し)ぬと、この女(ぢよ)の子(こ)が女王(ぢよわう)の位(ゐ)をついで母(はは)の屍體(しかばね)は大きな洞窟(どうくつ)の中(なか)へ埋(う)めるのであらうと彼女(かのぢよ)は信(しん)じてゐたが、これ等(これら)のことについては何(なに)一つたしかなことを知(し)つてはゐなかつた。たゞ國內(こくない)到(いた)るところで女王(ぢよわう)の命(いのち)をそむくものはなく、若(も)し命令(めいれい)をとやかくいふやうなことがあつたら直(た)ちに死刑(せいけい)に處(しよ)せられるとのことであつた。彼女(かのぢよ)には護衛兵(ごゑいへい)があつたが正規軍(せいぎぐん)といふものはないといふことであつた。

私はこの國(くに)の面積(めんせき)や人口(じんこう)はどれ程(ほど)あるかと訊(たづ)ねて見た(み)た。彼女は、この家族(かぞ)のやうな家族(かぞ)が都合(がふご)十(じゆ)あつて、その中(なか)には女王(ぢよわう)の家族(かぞ)のやうに大きな家族(かぞ)もあると答(こた)へた。そして、これ等(これら)の家族(かぞ)はすべてこの丘(かみ)のやうな丘(かみ)にある洞窟(どうくつ)の中(なか)に住(す)んでゐるのであり、かうした丘(かみ)は沼地(ぬまち)の中(なか)に散在(さんざい)してゐて、秘密(ひみつ)の通路(つうろ)で住(す)き來(き)ることができただけであるとのことであつた。この家族(かぞ)の間(ま)には時々(ときどき)戰爭(せんそう)が行(な)はれ

たこともあつたが、女王(ぢよわう)が中止(ちゅうし)を命(めい)ずると雙方(たうほう)ともばつたり止(と)めてしまつたといふことである。この戰爭(せんそう)と、沼地(ぬまち)を渡(わた)るときにとりつかれる熱病(ねつびょう)とのために人口(じんこう)はあまり増(か)えないのだといふことであつた。彼等(かれら)と他の人種(じんしゆ)との間(ま)には何(なん)の聯絡(れんらく)もなく、附近(ふきん)には他の人種(じんしゆ)は住(す)んでゐなかつた。それに敵(てき)は沼地(ぬまち)を越(こ)えて來(き)ることはできなかつたのである。かつて軍勢(ぐんせい)が大河(たがほ) (多分(たぶん)それはザンベシ河(がほ)のことであらう)の方(ほう)から彼等(かれら)を攻(せ)めようとしたことがあつたが、沼地(ぬまち)の中(なか)で道(みち)に迷(まよ)つてしまひ、夜(よ)になつて、沼地(ぬまち)の附近(ふきん)に浮動(うきどう)する大きな火(ひ)の玉(たま)を敵(てき)の陣地(ぢんぢ)と間違(まちが)へてそれを攻(せ)めようとして、半分(はんぶん)は沼(ぬ)に溺(おぼ)れてしまひ、殘餘(ざんご)の軍勢(ぐんせい)は、すぐ(すぐ)に熱病(ねつびょう)と飢餓(きが)とのために死(し)んでしまつて、彼等(かれら)に一擊(いっげき)をも加(く)へることができなかつたといふことである。彼女(かのぢよ)は、沼地(ぬまち)は道(みち)を知(し)つてゐるものでなければ絶對(ぜつたい)に越(こ)えることはできないといふことを繰(くり)返(かへ)して話(わら)し、吾々(われ々)も、駕籠(かご)でつれて來(き)られなければ決(けつ)してこゝまでは來(き)られなかつたのだと附(つ)け足(た)したが、私(わたし)もなる程(ほど)それ(それ)にちがひないと思(おも)つた。

吾々(われ々)が四日(よっか)間(かん)に聞(き)いたこれ等(これら)の事柄(ことば)は皆(みな)信(しん)ぜられない程(ほど)驚(おどろ)くべき話(わら)ばかりで、しかもその中(なか)で最も奇怪(きがい)な部分(ぶぶん)は、例(れい)の壺(つば)の破片(はへん)に記(し)してあつた文句(もんく)に多少(たせう)とも符合(ふがふ)してゐた。どうも、驚(おどろ)くべき、又(また)恐(おそ)ろしい神通力(じんつうりき)をもつてゐるといふ噂(うわさ)のある不思議(ふしぎ)な女王(ぢよわう)が住(す)んでゐるらしい様子(ようす)であつた。私(わたし)にもレオにも一向(いかう)そのわけはわからなかつたが、レオは勿論(もちろん)、私(わたし)が前(まへ)に何遍(なんべん)も傳説(でんせつ)のことをひやかしたので、私(わたし)に對(たい)しては、殊(こと)の外(ほか)得意(たいてい)であつた。ジョップと來(き)てはもうすつと前(まへ)から考(かう)へることは一切(いっさい)やめて凡(すべ)てをなりゆきにまかせてゐた。アラビア人(あらびあじん)のマホメッドはアマハツガー人(あまはつがーじん)に鄭重(ていじゆう)な待遇(たいぐ)は受(う)けて



あだが、それと同時に冷たい侮蔑をも受けてゐた。彼は何に脅えてゐたのか知らぬが、非常にびくびく脅えてゐた。彼は一日中洞窟の隅に蹲くまつて、アラアの神や豫言者マホメッドの名を唱へてひたすら加護を祈つてゐた。どうしたのかと私がしつこく聞いて見ると、彼は、この國の人間は男も女も人間ではなくて悪魔であり、この國は妖魔の國だから恐ろしいのだと答へた。實を言へば、私も二度彼の意見に賛成したくなつたことがあつた。かやうにして、ビラリが發つてから四日目の晩までは過ぎ去つたが、この晩に或る出来事が起つた。

吾々三人とアステーンとが、寢る前に、洞窟の中で焚火をかこんで座つてゐると、これまで黙つてゐたアステーンが、突然起ち上つてレオの金髪の上に手をおいて彼に話しかけた。

今でも私は眼を閉ぢると、この世の中の最も奇怪な光景の最も奇怪な中心のやうに、彼の女の誇らしい、恰好のよい姿が、濃い影と、赤い焚火の光とに代るべく包まれて起ち上つたところがまざく見えるやうな氣がする。彼女は起ち上つたと思ふと、かすくの胸の思ひと豫兆とをほゞ次のやうに節をつけて語り出した。

君は吾が選びし人——吾は初めより君を待ちぬ！

君はいとも美し。君の髪、君の白き皮膚は世に比ひなし。

君にまさりて力ある男々しき人はなし。

君が眼は空にして、眼の光は空の嵐。

缺くる所なき幸ある君が顔ばせに、吾が心おのづと君に向ひぬ。

吾君を見しときより、吾君にこがれぬ——

されば吾君をとりぬ——お、いとしき君よ。

災の來らざるやうしかと君をとらへ、

日のさゝぬやう、吾が髪もて君が髪をおほひぬ。

君は皆吾がものなりき吾は皆汝がものなりき。

さるうちに日は過ぎて兎つ日は遂に來りぬ。

あゝその日何事の起りしぞ。戀人よ、吾は知らず。

さはれ君は見えずなり、吾は闇に迷ひぬ。

アステーンよりも強く、美しき人君をつれゆきぬ。

されど君は振り向きて吾が名を呼び、君が眼は闇を探しぬ。

しかも彼の女の美しさは、君をひきて恐ろしき所につれゆきぬ。

あゝかくて、あゝかくて、吾が戀人よ——

こゝで此の不思議な女は、この話とも歌ともつかぬものをやめて、彼女の前に映つてゐる深い影に輝く眼をちつと据ゑたやうに思はれた。言葉の意味のわからぬ吾々には、それは無茶苦茶な歌のやうに聞きた。次の瞬間に、彼女の兩眼は、何かはつきり見えない恐怖をうつし出さうともがくもの、や

うに、空虚な、物凄い凝視にかはつた。彼女はレオの頭においてゐた手を宙にあげて、闇の中を指さした。吾々はみんなその方を見たが、何も見えなかつた。けれども彼女は何かを見たのである。或は見えたやうに思つたのである。しかもそれは、彼女の鐵のやうな神経をも激動させるものだつたと見えて、彼女は、それから一言も言はずに、ばつたりと吾々の間に倒れて人事不省に陥つてしまつた。この不思議な少女に近頃だんくほんたうの愛着を感じはじめたレオはひどく吃驚して、困りはて、しまつた。それから何もかも公平に言つてしまへば、私の心理状態は、迷信的恐怖の状態から大して離れてはゐなかつた。場所といひその場の事情といひ、全くもつて不氣味極まるものだつた。しかし、まもなく彼女は正氣に返つて、痙攣的に身慄ひした。

「今のは一體どういふ意味なんだ。ねえアステーン？」とレオは訊ねた。彼は多年の勉強のお蔭で、アラビア語が非常にうまく話せたのである。

「何でもないのでよ」と彼女は強ひて微笑しながら答へた。「妾の國の風習に従つて貴方に歌つてあげただけだわ。まだ起りもしないことがどうして妾にわかるもんですか？」

「では何を見たんだね、アステーン？」と私はきつと彼女の顔を見ながら訊ねた。

「何でもないので」と又彼女は答へた。「何も見やしなかつてよ。何を見たなんて妾に問うちやいけないわ。貴方がたはどうして驚きなさるんです？」かう言ひながら彼女はレオの方を向いて、彼の顔を兩手でつかまへてまるで母親がするやうな風に、彼の額に接吻した。私は文明人の中にも野蠻人の中に

も、その時の彼女の眼つきのやうに愛情に充ちた女の眼つきを見たことがない。

「ねえ貴方」と彼女は言つた。若し妾があなくなつても、貴方が夜、手を伸したときに妾の姿が見えなくなつても、時々妾のことを思ひ出して下さいね。妾は貴方の足を洗ふ價值もない女ですけれど、眞から貴方を愛してゐるのです。今のうちに妾たちは存分に愛しあつて幸福であらせう。墓場へ行けば愛も温か味も接吻もありませんものね。ことによると何も起らないかも知れないわ。昔あつたことの苦い記憶かも知れないわ。兎に角今夜は妾たちのものよ、明日は誰のものになるか、そんなことは誰にだつてわかりやしないわ。」

## 第八章 酒宴の後

その翌日になると、その晩に吾々を歓迎するための酒宴が開かれるといふことを知らせて來た。私は、吾々はみんな不調法な人間で酒宴などは好まんと言つて、八方斷つたが、私の辯解は不愉快さうな沈黙で迎へられたので、この上ことわらぬ方がよからうと考へた。そこで日没のすぐ前に、私はすつかり用意が出來たといふ知らせを受けたので、ジョツプをつれて洞窟の中へはひつて行つた。其處で私はレオに會つた。レオの傍には相變らずアステーンがついてゐた。この二人は外へ散歩に行つてゐたので、酒宴のあることをその時まで知らずにゐたのである。此のことをきいたときアステーンの顔には恐怖の表情が浮んだ。彼女はうしろを振りむいて、洞窟の中を通つて行く男の腕をつかまへ

て、何事かをせつかちに訊ねた。彼の答へはいくらか彼女を安心させたと見えて、彼女はほつとした様子だったが、まだくすつかり安心しきつた風ではなかつた。それから彼女はその場の頭分の男に何か諫言でもしようとした様子であつたが、その男は、ぶり／＼怒りながら何か言つて彼女を拂ひのけた。だがまもなく気が變つたと見えて、彼は彼女の腕をとつて、彼と、焚火のまはりに車座をつくつてゐた一人の男との間に彼女を坐らせた。彼女は、何かわけがあつたと見えて、彼の言ひなりになつてゐるのがよいと考へたらしかつた。

その晩の焚火はいつもよりずっと大きく、そのまはりにには廣い環をつくつて三十五人の男と二人の女とが坐つてゐた。二人の女といふのはアステーンとジョップに振られた女とであつた。男はみな、いつものやうに黙つて坐つてゐた。そしてめい／＼自分のうしろの岩に掘り抜いた穴に眞つ直ぐに大きな槍をたてかけてゐた。前に言つた黄色つばい麻の上衣を着てゐる者は一人か二人で、他の者は腰に豹の皮をまきつけてゐるだけだつた。

「これからどうなるんです、旦那様」とジョップは心配さうに言つた。「おや／＼またあの女が來てゐる。だがもう私を追ひまはす氣遣ひはありませんよ。私はてんで相手にしなかつたんですから。奴等を見つるとむす／＼しますよ、どいつもこいつも、まつたくですよ。おや、奴等はマホメッドにも食事をやるやうに言つてゐますね。ほら、あの女が、マホメッドをあんなに鄭重に案内して來ますよ。やれやれ、私でなくて助かりました。」

吾々が見ると、たしかに、問題の女が起ち上つて、かはいさうなマホメッドを隅つこからつれ出してゐた。彼は、何かしら恐ろしい豫感に打たれて、アラーの名を念じながら、そこに慄へてゐたのである。彼はついてゆくのが氣が進まぬらしかつた。だがそれは恐らく、これまで別の食事を與へられてゐた彼が、急に慣例を破つてこのやうな恩典に浴したので薄氣味が悪かつたのであらう。いづれにしても彼はひどく恐怖にうたれて、膝がた／＼ふるへるので、頑丈な、大きな身體を支へるのがやつとやつとだつた。彼が兎も角承知してついて來たのは、彼の手をとつてつれて來た女がなだめすかしたからといふよりも、むしろ後の方に大きな槍をもつたアマハッガー人の巨漢がひかへてゐたせゐだと私は思ふ。

「どうも様子が變だ。」と私は言つた。「だが當つて碎けるより外にしようがない。皆んな拳銃をもつてゐるかね。もつてゐるなら彈丸がこめてあるかどうかしらべておくがよい、ぜ。」

「私はもつてますよ」とジョップは彼のコルト（拳銃の名）を軽く叩きながら言つた。「けれどもレオ様は獵刀をもつてゐらつしやるきりですよ。尤もあれはすゑぶん大きいから大丈夫ですけれど。」

置きわすれた武器をとりに行つてゐる間もないので、吾々は大胆に前へ進み出て、洞窟の壁に脊をむけて一列に竝んで坐つた。

吾々が座を占めるとすぐに酒を入れた土製の甕がまはされた。この酒はカフィール黍といふ名で南阿地方に知られてゐる穀物でこしらへたもので、飲むと胃の腑がむか／＼しさうであつたが味は決して

て悪くはなかつた。酒の容れ物は非常に妙な形をした、ずつと昔にこしらへたもので、大きさは様々だつた。かうした甕は、あとで適當な時に詳しく述べようと思ふが、岩の墓場でよく見つかつた。私はそれは埃及人の流儀に従つて死人の内臓を入れるために使はれたもので、この土地の古代の住民と埃及人との間には多少の聯絡があつたのかも知れないと考へたが、レオは、それはエトラスカンの流儀に従つて、死人の靈が使ふために墓場に置いてあるのだといふ意見だつた。これ等の甕には皆二つづ、把手がついてをり、大小さまざまで高さ二呎位もあるのから三呎位のまであつた。形も亦様々であつたが、どれもこれも此の上なく美しく、あまり光澤のない、少し粗い、非常に精巧な土器であつた。この土器の地には、更に一層美しい、生きたやうな象眼がしてあつた。その象眼の繪の中には、非常に無邪氣な、今日の嗜好には投じないやうな自由奔放な戀の場面や、少女の踊つてゐる繪や、狩獵の繪などがあつた。たとへば吾々がその時に酒を飲んでゐた甕には、片側には白人らしい元氣のいい人々が槍で象を攻撃してゐる繪がかいてあり、その反対の側には一人の獵師が矢で走つてゐる羚羊を射てゐる繪がかいてあつた。但しこの方はあまりよい出来榮えではなかつた。

こんな危急の場合に、こんな話をするのは餘計な道草だが、この場合にはこれ位な道草を食つても長すぎはしなかつた。何故かといふと、この場面そのものが實に長くつゞいたからである。時々酒の甕がまはされるのと、焚火に薪を投げこむ外は、かれこれ一時間もの間、何事も起らなかつた。誰か一語も物を言はなかつた。吾々は完全に沈黙して、大きな焚火の燃えるのと、土器でこしらへた

燭臺のちらくする光が投げてゐる影とをちつと見つめてゐた。序に言つておくがこの燭臺は古代のものではなかつた。吾々と焚火との間の空いたところに、短い四つの把手のついた、まるで屠殺屋の盆のやうな大きな木の盆が置いてあつた。盆の側には大きな、柄の長い鐵鉗が一挺置いてあり、焚火の向う側にも同じやうな鐵鉗が一挺置いてあつた。この盆と鐵鉗とは私には何だか薄氣味がわるかつた。この酒宴は實に風變りな饗宴で、まるでバルメシドの酒宴のやうに、食ふ物は何一つなかつた。たうとう、私が、まるで催眠術にでもかゝつたやうな氣持ちになりかけてゐた時、何か言ひ出したものがあつた。何等の豫告もなしに、焚火の向う側に坐つてゐた一人の男が大きな聲をだした。

「これから食ふ肉はどこにあるんだ？」  
すると車座をつくつてゐた一同の者は右の手を火の方へさし出しながら、おさへつけたやうな調子で答へた。

「肉はいまに來る。」

「それは山羊か？」と前の男が言つた。

「角のない山羊だ。山羊よりも上肉だ。みんなでそれを殺すんだ。」一同は聲を揃へてかう答へながら、一齊に半ば身體をめぐらして右手で槍の柄をつかみ、やがて又一齊にそれをはなした。

「それは牝牛か？」とまた前の男が言つた。

「角のない牝牛だ。牝牛よりも上肉だ。みんなでそれを殺すんだ。」一同は答へて、再び槍をつかん

ではなした。

それからちよつと靜になつた。マホメツドの隣りに坐つてゐた女が急に彼にちやほやしはじめた。彼の頬をたゞいたり、やさしい聲で呼びかけたりした。だが彼女の兇猛な眼は、ぶる／＼慄へてゐる。マホメツドの身體を上から下までぢろ／＼見まはしてゐた。私はそれを見ると恐ろしくて毛髪が逆立つた。どうしてそれ程恐ろしかつたのかわからんが、みんなひどく恐ろしがつてゐた。わけてもレオは一番ひどかつた。女は蛇のやうにマホメツドを抱擁した。たしかにこれは、しまひまでやつてしまはなければならぬ或る儀式の一部分だつたに相違ない。私はマホメツドの鶯色の皮膚の下が眞つ蒼なつたのに氣がついた。

「料理の用意はできたか？」と例の聲が早口で言つた。

「用意はできた、用意はできた。」

「壺は熱くなつたか？」とその聲はつゞいて言つた。その聲はけた／＼ましい叫び聲のやうに洞窟の中に沈痛に反響した。

「熱くなつてゐる。熱くなつてゐる。」

「大變だ」とレオは叫んだ。「あの記録をおぼえてゐますか、『彼等は異國人の頭に壺をのせるあたり』と書いてあつたでせう。」

彼がかう言つたとき、そして吾々がまだ身動きもせず、彼の話の意味をよくのみこみもしないうちに、二人の荒くれ男が跳び上つて、長い鐵鉗をつかんで、それを焚火の中へ投げこんだ。その間に、マホメツドを抱擁してゐた女は、突然帯の下から緒綱をとりだして、それをマホメツドの肩にかけてぎゆつと締めつけ、彼の隣にゐた男どもは彼の兩脚をつかんだ。二人の男は同時に鐵鉗をとつて、岩の床に火花をちらしながら、白熱した大きな土製の壺をさし上げた。あつと言ふ間もあらばこそ、彼等はマホメツドの藻掻いてゐるところへ、一度にその壺をつき出した。マホメツドは必死の叫び聲を振りしぼりながら、惡鬼の如くに戦つた。そのために、綱で縛られ、二人の男に脚をおさへられてゐるにも拘らず、前へ進んできた者どもは一時目的を果すことができなかつた。その目的といふのは、戦慄すべき、信ずることでもできないことではあるが、赤熱の壺を頭にのせることであつたのだ。

私はあつと恐怖の叫び聲をあげて跳び上りながら拳銃をとり出して、本能的に、今しがたマホメツドを抱擁して、今は彼の腕をつかんでゐる、惡魔のやうな女をめがけて、眞つ直に發射した。彈丸は彼女の背中に命中して、彼女は即死した。私は今になるまで、それを喜んでゐる。といふのは後でわかつたところによると、アマハツガー人の食人の習慣につけこんで、ジョツプに侮蔑された腹いせに、こんな恐ろしい復讐を企てた張本人はこの女だつたからである。兎も角彼女は死んで倒れた。ちやうど彼女が斃れるときに、恐ろしいことには、マホメツドが人間業とも思はれぬ力で、彼を拷問にかけてゐた者共をふりはらつて、高く空中に跳び上つたかと思ふと、女の屍體の上に折り重なつて死んでしまつた。私の射つた拳銃の彈丸は、二人の身體を一度に射貫いたのだ。そして一舉にして虐殺者を

斃し、犠牲者をそれよりも百倍も恐ろしい死から救つたのだ。それは恐ろしい出来事ではあつたが、それと同時に慈悲深い出来事でもあつたのである。

しばらくの間は、みな、呆氣にとられて黙つてゐた。アマハツガー人はまだ鐵砲といふものを知らなかつたので、その偉力に辟易してゐた。だが暫くすると、吾々のすぐそばにゐた一人の男が氣を取り直して、槍をとつて一番近くにゐたレオを突かうとして身構へた。

「逃げる」と叫びながら、私は、眞つ先に立つて、足のつく限り全速力で洞窟の奥の方へかけ出した。私はできることなら外の方へ進んでゆきたかつたのであるが、途中に人があつたし、それに入口には、遙か彼方の空を背にして立つてゐる群集の影がはつきり見えたからやめたのである。私は洞窟の奥の方へ進んで行つた。私のあとからはジョップとレオとがついて來た。そしてそのあとからは、女を殺された、めに物狂ほしいまでに怒つた食人種の群が、どや／＼と押し寄せて來た。私はぐつたり地べたに斃れてゐるマホメツドの屍體を跳び越えた。その時に、すぐそばにある灼熱した壺の熱が足を打つたのを感じた。そしてその光りで、マホメツドの手がかすかに動いてゐるのが見えた。彼はまだ死にきつてはゐなかつたのである。洞窟のどん詰りには高さ三呎、深さ八呎ばかりの小さな岩の臺があつて、その上には晩になると二つの大きな燭臺が置いてあつた。吾々三人はそこまで着くと、臺の上へ跳び上つて、どうせ死ぬとしても、できるだけ高價に命を賣らうと用意した。ジョップは右に、レオは中央に、私は左に陣どつた。吾々の後には燭臺があつた。レオは前屈みになつて、岩の上に長く曳いた影の路を俯瞰してゐた。それは焚火と火のついた燭臺のところまで終つてゐて、その向うには、吾々を殺さうとしてゐる連中が、槍の穂先をぎら／＼光らせながら右往左往してゐた。彼等はこんな怒つてゐるときでもブルドッグのやうに黙つてゐた。その他に見える物といつては、薄暗い中にまだかつかつと燃えてゐる赤熱した壺だけであつた。レオの眼には妙な光が浮んで、彼の美しい顔は石のやうになつた。彼は右手に大きな獵刀をもち、その革紐を少し手頭の方へずらして、私の身體へ腕をまきつけて抱擁した。

「左様なら叔父さん」と彼は言つた。「あなたは僕の親しい友達でした。僕にとつては父親以上でした。吾々はもう彼奴等から逃れる道はありません。彼奴らはもう數分間のうちに吾々を片付けて、あとで食つてしまふでせう。左様なら。こんなところへつれて來たのは僕です。勘辨して下さい。ジョップも左様なら。」

「何事も神の思召しだ」と私は度胸をきめて、齒がみをしながら言つた。ちやうどその時、ジョップが、わつと叫んで、拳銃をとり上げて發射した。そして一人の男を射つた。序でに言ふが、それは彼のねらつた男ではなかつた。彼のねらひがあつた、めしなどはなかつたのである。

彼等はだん／＼近く押し寄せて來た。私もできるだけ速く射ちつづけて、彼等を喰ひとめた。私とジョップとで、例の女のほかに、既に、五人の男を殺したり重傷を負はせたりしたが、その時はもう彈丸がなくなつてしまつた。しかし彈丸をつめかへてゐるひまなどはなかつた。彼等は吾々がもう彈

丸を射てなくなつたことなどは知らないのに、矢張りすん／＼前へ押し寄せて来た。その大膽き加減は全く驚歎のほかはなかつた。

一人の大男が臺の上へ跳び上つて来た。するとレオは猿臂を伸ばして短刀で突き殺してしまつた。私も一人の男を同じやうに突き殺した。ところがジョップは突き損つてしまつた。一人の筋骨逞ましい男が彼の胴體をつかんで彼を岩からもぎ下した。その時に革靴がしつかりはまつてゐなかつたので、短刀がジョップの手から落ちた。運のよかつたことにはその短刀は柄の方を下にして岩の上に立つたので、下になつて倒れたアマハツガー人の身體にぐざと突き刺さつた。それからジョップがどうなつたかははつきりわからないが、何でも彼は、彼を襲つて来た男の屍體の上に倒れたまゝ、死んだふりをしてゐたらしい。私はすぐに二人の壯漢と格闘をはじめた。彼等は幸ひにも槍を投げすて、とびかゝつて来たのであつた。私は生れてはじめて、もち前の強い腕力がこの時役に立つた。私は殆んど短い劍ほどある獵刀を、柄も通れと一人の男の頭につきさした。あまり力を入れたので鋭い刃物は彼の頭蓋骨を眼のところまで切り裂いてしまひ、かたく中へ喰ひ入つたので、その男が急にばつたり横ざまに倒れたとき、短刀は私の手からねぢれてもぎはなされてしまつた。

すると又別の二人の男が私にとびかゝつて来た。私は彼等がやつて来るのを見ると、彼等の腰へ片つ方づゝの腕をまきつけて一しよになつて岩の床の上へ倒れて上になり下になりして轉げまはつた。彼等は仲々強かつたが、私は憤怒と、いざといふ時になつて來るとどんな文明人の心にも備ひこんで來る恐るべき闘争慾とに燃えきつてゐた。私は二つの腕を、二つの眞黒な悪魔の身體にまきつけて、きゆうきゆう締めつけたので、たうとう肋骨がめき／＼と音をたて、碎けるのが聞えた。彼等は蛇のやうに身體をねぢまげてのたうちまはりながら、拳で私を打つたり搔いたりしたが、私は少しもゆるめなかつた。上からつき下す槍を避けるために、私は仰向きになつて二人の身體を私の上へのせて身をかばひながら、徐々に彼等を締めつけていつた。その時に、私はどういふものか、今では平和協會の會員になつてゐる、ケンブリッヂ大學の學長や、私と同輩の校友達が千里眼で、その時の私の姿を見たらどう思ふだらうと考へた。まもなく私を襲撃した二人の男は氣が遠くなつて、腕くのを止めてしまつた。息ももうとまつて、彼等は死にかけてゐた。それでも私は手を緩めなかつた。それは彼等の往生際が誠に悪かつたからである。他の蠻人どもは、吾々が三人とも、出づ張つた岩蔭に倒れてゐたので、みんな死んで終つたと思つたのか、兎に角吾々の小さな悲劇などには介意つてゐなかつた。振り返つて見ると、レオはもう岩からはなれたと見えて、滿身に燈火の光を浴びて立つてゐた。まるで狼の群が一頭の牡鹿を倒さうとするやうに、彼を中心にして、蠻人どもがとびかゝつてゐた。彼の美しい蒼ざめた顔は、彼等の上にすつくとそびえたち、つや／＼した捲毛が前後左右に揺れてゐた。彼は渾身の力を出して、必死になつて戦つてゐた。それは勇ましい光景でもあつたと同時に、はらはらする光景でもあつた。彼は一人の男を短刀でつき刺した。彼等は、レオのすぐそばまで押し寄せて、轟めきあつてゐたので、彼等の大きな槍を使つて彼を殺すことはできなかつたのだ。それに彼

等は短刀も棒ももつてゐなかつたのである。刺された男が倒れる拍子に、レオの手から短刀がもぎとられて、彼は今は身に寸鐵も帯びなくなつたので、もういよいよおしまひだと私は思った。ところが、どうしてなかく、彼は、必死の力をふるつて一同をつき飛ばし、たつた今殺した男の屍體をつかんで宙にさし上げ、彼を襲つて来る群集を目がけてそれをふりつけた。そのはずみを食つて、五六人の男は地べたに倒れてしまつた。しかし、頭蓋骨を打ち砕かれた一人の男を除くほかは、すぐに起き上つてまた彼に襲ひかゝつて来た。たうとう、狼の群はライオンを壓倒して来た。それでも彼は一度顔勢を挽回して、一人のアマハツガー人を拳で打ち倒したが、長い間には衆寡敵せず、遂に、彼は檜の木が倒れるやうに岩の床の上に倒れてしまつた。彼にしがみついてゐた連中も彼と一緒に倒れた。彼等は、彼の手足をおさへて、彼の身體からすつかり邪魔物をなくした。

「槍をもつて来い」と一つの聲が叫んだ。「こいつの咽喉を刺すんだ。それからこいつの血を入れる容れ物をもつて来い。」

私は觀念の眼を閉ぢた。何故かといふと、一人の男が槍をもつてやつて来たのに、私はレオを助けに行くことができなかったからである。私自身ももう弱つてゐたし、それに私の上につかつてゐた二人の男はまだ死にきつてゐないで、私はひどい苦しみに悩まされてゐたのである。

その時何か急に騒ぎが起つたので、私は思はず眼を開けて、殺人の場面の方を見た。少女のアステーンが、レオの倒れた身體の上へ身を投げかけて、身をもつて彼の身體をかばひ、彼の首つたまへしつかと抱きついたのであつた。皆の者は彼女を彼から引き離さうとしたが、彼女は自分の足をレオの足へまきつけて、ブルドッグのやうに、或は木へ攀ち登る人のやうに彼にしがみついてゐたので彼等ははどうすることもできなかった。そこで彼等は、女を傷つけないやうに横の方からレオを突き刺さうとしたが、彼女がどうにか自分の身でかばつたので、レオは負傷しただけであつた。

たうとう彼等は我慢ができなくなつた。

「男も女も一緒に田樂刺しにしてしまへ。」と先刻の物凄しい酒宴の席で色々な質問をしたのと同じ聲が言つた。「さうすりや、二人はほんたうに夫婦になれるだらう。」

ついで私は一人の男が仁王立ちになつて槍をしごいてゐるのを見た。冷たい刃物が上の方できらきら光るのが見えたので、私はまた眼を閉ぢた。

ちやうどその時、一人の男の聲が、凜として洞窟の中に鳴り響いて、岩の道に反響した。

「止めろ！」

それつきり私は氣が遠くなつた。そして氣を失ふ瞬間に、私の朦朧とした意識に、これが最期だといふ考へがちらりと閃いたのであつた。

## 第九章 小さい足

眼を開いて見ると、私は、あの恐ろしい酒宴の時に吾々が取り圍んで集まつてゐた焚火から、あま



り遠くないところに、毛皮の敷物の上に横はつてゐたのであつた。私のすぐそばには、レオがまだ氣を失つて横はつてをり、脊の高い少女アステーンは、彼が脇腹に受けた深い槍傷を麻布で繃帯するために冷水で洗つてゐた。彼女のうしろに、洞窟の壁に凭れてジョツプが立つてゐた。彼は見たところ負傷はしてゐなかつたやうだが、打撲傷を受けて、ぶる／＼慄えてゐた。焚火の向う側には、ぐたぐたに疲れて眠つてでもゐるやうに、吾々が物凄い血闘で殺した連中の屍體が、不規則にのたうつてゐた。數へて見ると、私が手にかけて可哀さうなマホメッドと例の女とのほかに十二人の屍體があつた。左手の方には多勢の人が、生き残つた食人どもをうしろ手に縛りあげて、二人づゝ一緒につなぎあはせてゐた。兇漢どもはむつとりとして無關心に運命に服従してゐた。それは、彼等の無氣味な眼にきらきら輝いてゐる内心の憤怒とそぐはない妙な光景であつた。縛られた人々の前に、一同の動作を指圖してたつてゐたのは、外ならぬ吾々の友人ビラリであつた。彼は少し疲れてゐたやうではあつたが、長髯をたれてたつてゐる姿は、ことの外鷹揚なもので、まるで牡牛を切るのを監督でもしてゐるやうに、冷やかな、無頓着な様子をしてゐた。

やがて彼はこちらを振り向いて、私がおき上つて坐つてゐるのを見て、もう氣分がよくなつたであらうと非常に丁寧にたづねた。私は、氣分がい、かわるいか今のところ自分にもわからぬが、身體中が痛むと答へた。

それから彼はレオの身體の上へかゞみこんで傷をしらべた。

「たちのよくない傷ぢやが」と彼は言つた。「槍は内臓までは貫つてゐないから、きつとよくなりますわい。」

「あなたが来て下さつたので助かりましたよ、長老」と私は答へた。「もう一分もおくれたら助かりつこはなかつたんです。あなたの部屋の悪魔どもは、吾々の従者を殺したやうに吾々をみんな殺さうとしてゐたんですから」と言ひながら、私はマホメッドの方を指した。

老人は齒ぎしりをした。彼の兩眼には異常な憎悪が閃いたのを私は見た。

「もう大丈夫ですわい」と彼は答へた。「今に聞いただけで肉が骨からもぎとれるやうな復讐をされるでせう。これからみんな女王様のところへつれてゆくのです、女王様の復讐は、それこそ恐ろしいもんですぢや。あの人は」と言ひながら、彼はマホメッドを指して「この連中がこれから殺される殺され方に比べると、ずつと慈悲ぶかい殺され方をさつしやつた。で、一體全體どうしてこんなことになつたのぢやな？」

私は手みじかに今まで起つたことをかいつまんで話した。

「ほ、う！」と彼は答へた。「此の土地ではな、異國人がはひつて來ると、壺で殺して食ふことになつとりますのぢや。」

「まるであべこべな歡待ですな」と私は力なく答へた。「吾々の國では、異國人が來ると歡待して御馳走を饗應するんですが、あなた方は異國人の肉を食つてあべこべに自分が饗應されるんですね。」

「それは習慣ですわい」と彼は肩を聳して答へた。「わしは悪い習慣ぢやと思つとりますがねえ。ところで」と彼はしばらく躊躇してから言つた。「異國人の味はわしはあまり好まん。ことに沼地を歩いて野生の鳥を食つて来たあとの肉はね。全能の女王が、あなた方の生命を助けよと命令を下されたとき、あの黒人のことについては何とも仰言らなんだものだから、あいつらはあの黒人の肉に飢ゑてゐたんですわい。そこへもつて来て、あなたが殺しになつたあの女が、あの黒人を焼壺で殺すやうにあいつ等をけしかけたんです。だがその仕返しはきつとありますぢや。女王の怒りにふれるよりも一生日の眼を見ん方がましな位ですぢや。あなたの手にかゝつて死んだ奴等は果報者ですわい。」

「それにしてもあなたは分勇ましく戦ひなされた」と彼は言葉を吐いた。「あなたはまるで、年をとつた手長狒々みたいだ。あの二人の男の肋骨を卵の殻か何ぞのやうにくだいてしまひなされた。それからあの若いのは獅子ぢや、あんなに多勢のものを相手にして、見事に抵抗なされた。あの人の手にかゝつて三人の者は即死しとります。それから、もう一人も」と言ひながら彼はまだびく／＼動いてゐる男の身體を指さした。「今に死んでしまひます。何しろ頭を碎かれてゐますからな。それから縛られてゐる連中の中には、怪我をしてゐるものが大分ある。何にしても勇ましい戦ぢやつた。だがな、狒々さん——あなたの鬚だらけの顔がさういへば狒々をつくりですぞ——あの身體に穴のあいてゐる男をあなたはどうして殺しなされた？ 何でも奴等の話によると、あなたはでかい音をさせな

私にはできるだけ納得するやうに説明してきかせた。しかし説明はごく簡單にした。といふのは私はひどく疲れてゐたので、たゞ説明しなければ、全能の女王の逆鱗に觸れるかもしれないと思つたのでそれが恐ろしさに、仕方なしに火薬といふものゝ性質を話してきかせたのであつた。すると老人は縛られてゐる男を一人だめしに鐵砲で殺して見せてくれんかと言つた。私がそんな残酷なことはできんから、身體がよくなつたら、何か獸を射つて見せると言つたら彼は怪訝な顔をしてゐたが、このことを約束すると、彼は、子供が新しい玩具を約束された時のやうに喜んでゐた。

ちやうどその時にレオが、少量のブランデーで正氣づいて眼を開いた。吾々はまだ少しばかり、ブランデーをのこしてゐたので、ジョップがそれをレオの咽喉に滴らしこんだのである。そこで吾々の會話は終つた。

そのあとで、吾々は勇敢な少女のアステーンに助けられて、レオを安全に寢臺まで運んで行つた。レオはまだすつかり弱りきつて、半意識の状態だつた。私は、自分の身を賭してレオの命を救つてくれたアステーンの勇氣に感謝のあまり、彼女に接吻したかつたが、そんなことをして怒られたら大變だと思つてやめた。私は打ち傷や、擦り傷を負うてはゐたが、この四五日間つひぞ味はつたことのない安らかな氣持ちで、私の小さい幕場へこつそり引き返した。寢る前に私は神に感謝することは忘れなかつた。その日の吾々くらゐ死のそばへ近づいて助かつた者は、かつて、澤山はなかつたことであらう。

私はどんなに氣持ちのよい時でも眠つきの悪い方である。その晩やつとのことで眠りついてから見た夢はあまり愉快な夢ではなかつた。氣の毒なマホメッドが、赤く焼けた壺から逃れようとしてもがいてゐる姿が幾度びも幾度びも夢の中に現はれた。それから、此の幻影の背景には、ヴェールをまとつた人の姿が、つゞけざまにふはく浮んで、時々ヴェールを脱いでゐるやうに思はれた。ヴェールを脱いだ姿は、或る時は素敵な妙齡の美人となり、或る時は、げらげら笑つてゐる白骨のむくろとなつた。そして、ヴェールを脱いだり、着たりしながら、不思議な文句をしやべつた。それはちよつときくとまるで無意味な文句のやうであつた。

「生ける者はかつて死せし者なり。死せるものも死する能はず。心靈の輪廻には生も死もなければなり。萬物は、時に眠りて忘らるゝことあれど永久に生くるものなり。」

そのうちに、たうとう夜が明けた。けれども、私は、身體ぢゆうが硬ばつて、痛んで、起き上れなかつた。七時頃にジョップがひどく跛をひきながらやつて來た。彼の丸い顔は、腐つた林檎のやうな色をしてゐた。そして彼は、レオはよく眠つてゐるが大層弱つてゐると言つた。それから二時間程たつとビラリがやつて來た。ジョップはこの老人のことをビリーの山羊とかたゞビリーとか呼んでゐた。此奴の白い髯が山羊に似てゐるやうに彼は思つたのだ。彼は燭臺を手にもつてゐた。脊の高い彼の身體は、殆んど小さい室の屋根まで届いた。私は眠つたやうなふりをして、臉をすこしあけて、老人の皮肉ではあるが上品な顔を見てゐた。彼は鷹のやうな眼でちつと私を見ながら、白い見事な髯をしごいてゐた。序に言つておくが、このやうな髯なら、倫敦のどの理髮屋でも、廣告用として、年百碼位は出すだらうと思ふ。

「あゝ、と彼は言つた。ビラリは獨語を言ふくせがあつたのだ。「この人は醜い——もう一人の人の美しいのにひきかへて、まことに醜い。ほんたうに狒々そつくりだ。狒々とは吾ながらよい名前をつけたものぢやて。だがわしはこの人が好きだ。この年になつて人が好きになるなんて不思議なこつたわい。かういふ諺がある——『誰も信じてはならぬ。そして一番信用のおけない奴は殺してしまへ、凡ての女からは逃げるがよい。女は邪惡なもので、しまひには相手を滅ぼしてしまふから。』これは良い諺ぢや、わけてもしまひの方がよい。これはきつと太古から傳はつた諺ぢやらう。だが、わしはこの狒々が好きだ。かはいさうに、昨夜の戦争でするぶん疲れとるぢやらう。どれ、眼を覺ますといけんから行くでしょう。」

私は彼が向うを向いて、爪先立ちで、そつと入口の處へ歩いてゆくまで待つてゐて、それから彼を呼びとめた。

「長老、あなたでしたか？」と私は言つた。

「左様、わしぢや、だが、お邪魔はしませんわい。わしはほんの、あなたがどうしとるかと思つて見に來たんですわい。それから、あなたがたを殺さうとした奴等はもう女王様のところへ向けて旅立つたことをお知らせしようと思つてな。女王様はあんた方にもすぐ來て貰ひたいといふことぢやが、ま

だ行けますまいの？」

「え、もう少しよくならなくちや」と私は言った。「しかし日のあたるところへ出していただけませんか、私はどうもこゝが嫌ひなんです。」

「もつともですわい」と彼は答へた。「こゝは何だか陰気ぢや。わしはよくおぼえとるが、子供の時分に、ちやうど今あなたが寝てゐるその腰掛の上に美しい女が寝てゐるのを見ましたわい。あまりその女が美しかったもんだから、わしは、燭臺をもつて、そつとこゝへしのんで来てその女の顔をつくづく眺めたもんだ。手が冷たくさへなかつたら、わしは、その女は、眠つてゐるので、そのうちに眼をさますかも知れんと思つたこつちやらう。それ程美しく、それほど安らかに、その女は白い上衣を着て横つてをりましたのぢや。その女も白人で、黄色い髪は殆んど足まで垂れとりましたわい。女王のおすまひになつてゐらつしやるところには、かういふ静かな墓場が澤山ありますぢや。そこに墓場を設けた人たちは、どうしてか知らんが、戀人の手などを腐らんやうにし、死んでも死な、いやうにするすべを知つとりましたのぢや。毎日々々わしはこゝへ来てその女の顔を見ました——笑つちやいけませんぞ、わしはまだほんの馬鹿な子供ぢやつたのでう——ところがそのうちにわしはその屍體を戀するやうになつてしまひましたぢや、命の抜け殻をですぞ。わしはその女のそばへしのびよつて、その冷たい顔に接吻しました。そして、この女が生きてゐた時分から今までに、どんなに多くの人が生れたり死んだりしたことであらう。遠い昔に誰がこの女を愛して抱擁したのだらうなどあやしんだ

ものですわい。わしはな、佛々さん、この死んだ人から随分いゝんな學問をしましたぞ。生の小さいこと、死の長いこと、日の下にある凡ての物が一つの道を通つて、永久に忘られてしまふのだといふやうなことを知りましたわい。ところが、そのうちに、何事にもよく氣はつくが、少々せつかちなわしの母が、わしの様子のかはつたのに氣がついてわしのあとからついて来て、その美しい白人の女を見て、わしとその女の妖術にかゝつたのぢやないかと心配したのですわい。實際またわしは妖術にかかつてゐたのですぢや。そこで、恐ろしさで腹立たしさと、わしの母は、その女をまつ直ぐにあそこの壁にたてかけて、髪に火を點けたので、その女は足のところまで燃えてしまつたのですわい。といふのは、こんな風にして保存してある人間はまことに燃えがよいもんですぢや。まあ御覽、その女の燃えた烟がまだ天井にのこつとる。」

私はまさかと思つて上を向いて見ると、まきれもない油煙のやうな煤ぼけたあとが岩の天井にのこつてゐた。

「その女は足首まで燃えてしまひましたぢや」と老人は感慨深い聲で言葉を吐いた。「だがすぐにわしは引き返して来て、足だけはとりとめました。そして黒焦げになつた骨を切りとつて、麻の布につんで、あそこの石の腰掛の下へかくしときましたぢや。考へて見ると、それはまだ昨日のことのやうな氣がする。誰も見つけてゐなきや、ことによるとまだあそこにあるかも知れん。實はその時から、今までわしはこの部屋へは入つたことはなかつたぢや。まあおまちなさい、ちよつと見て來

る。」かういひながら、ピラリはしやがんで、石の腰掛の下の穴を手探りした。やがて、彼の顔は輝いた。そして彼は叫び聲を出しながら、何か埃だらけのものを取り出して、埃を床の上へ拂ひ落した。それはぼろ／＼になつた布につゝんであつた。彼はそれをほどこいて、中から恰好のいゝ、殆んど白人らしい女の足をとり出した。それは生き／＼として、形もちやんとしてゐて、まるで昨日そこにおいたもの、やうであつた。私は驚いてそれをしげ／＼と眺めた。

「なあ、狒々さん、わしの言つたことはほんたうぢやろ」と彼は沈んだ聲で言つた。「こゝにまだ片足がのこつとるんぢやからな、さあ、手にとつてよく御覽なさるがい。」

私は、この冷たい人間の小片を手にとつて、燭臺の光でつく／＼と眺めた。私は何とも名狀することのできない、驚愕と、恐怖と、魅惑との一しよ／＼になつた感じがした。それは軽かつた。生きた人間の足よりもずつと軽いやうに思つた。けれども肉はどう見てもまだ肉であつた。たゞ微かな香料の匂ひがしてゐるだけであつた。その他の點では、この足は皺が寄つたり凋びたりもしてゐず、埃及のミイラの肉のやうに黒く醜くもなつてゐず、少しばかり焦げたところを除けば、死んだ時と同じに完全であつた。偉大なる香料の防腐力は正に驚歎に値する。

私はこの過去の遺物を、ぼろ／＼の麻布に包んだ。この麻布は、この足の持主の屍衣の一部分だつたと見えて少しばかり焦げてゐた。私はそれを旅行鞆の中に藏つた。妙な安息所だと私は思つた。それからピラリに纏つて、私はレオの様子を見に行つた。レオはひどく傷ついてゐた。恐らく皮膚が

あまり白過ぎた爲でもあらう、私よりも一層ひどく見えた。それに側腹に受けた傷からひどく出血したので、餘程弱つてゐたが、それでも非常に快活で、何か朝食が欲しいなどと言つてゐた。ジョップとアステーンとは彼を駕籠の底、といふよりも、わざ／＼彼を寝かせるために柱から取つて敷いた粗麻布の上へのせた。そしてピラリ老人も手傳つて、洞窟の入口の物蔭へ彼をつれて行つた。序に言つておくが、洞窟の中は、昨夜の争闘のあとはずつかり取り片附けてあつた。そこで吾々一同は朝食をすまし、その日と、その次の二日間の大部分とをそこで過した。三日目の朝になると、ジョップと私とは事實上恢復した。レオも大分快くなつたので、私はピラリの幾度もの懇請をいれて、すぐにコオルへ旅立つことに同意した。コオルといふのは、不思議な女王の住んでゐるところだといふことを吾は聞かされた。だが私は内々そんな旅をしてレオの身體にさばりはしないかと心配した。わけても、やつと薄い皮がついたばかりの傷口が、身體を動かした／＼めに破れはしないかと心配した。實を言へば、ピラリがあまり出立を急ぎさへしなければ、私はこんなに早く出立することを承知するのぢやなかつたのだが、彼があまり氣をもむので、彼の言ふことをきかねば、何か厄介なことか危険かぢやりか、つて来るやうな氣がしたのだ。

## 第十章 萬感交々

愈々出立ときまると、一時間もたぬうちに、五挺の駕籠が洞窟の入口まで運ばれた。駕籠にはそ

れぞれ四人づつの駕籠かきと二人づつの補缺とがついてゐた。そしてんでに武器をもつた五十人のアマハッガー人の一隊が、護衛と荷物の運搬とのために来て来た。五つの駕籠の中で三つは勿論吾君のためのもので、一つはビラリをのせるためであつた。私はビラリがついて来てくれると聞いてほとと安心した。五番目の駕籠はアステーンのだらうと私は思った。

「長老、あの女も吾々と一緒に行くんですか？」と私は其の場の指圖をしてゐるビラリにたづねた。彼は肩をそびやかして答へた。

「若しあの女の希望ならね。此の國では、女はすきなことができるのですぢや。吾々男は女を崇拜しとる。そして何事も勝手にさせておく。といふのは女がなくちや世の中はたつて行きませんからな、女は生命のもとぢやからな。」

「は、あ」と私は、妙な見方があるもんだと思ひながら言つた。

「あんまり男が女を崇拜するもんだで」と彼は言葉をつづけた。「しまひには奴等は箒にも棒にもかゝらなくなつて來ますのぢや。大抵二代目毎にさういふ風になりますがな。」

「さうなつたら、どうするんです？」と私は好奇心にかられてたづねた。

「その時には」と彼はかすかに笑ひながら答へた。「男が奮然として起ちあがつて、若い女への見せしめに老年の女を殺してしまひませあ。そして、一番強いものは男だつてことを見せてやるんですわい。わしの女房も、かはいさうに、一三年前にそんな風で殺されちまひました。ずゑん分悲しかつた

が、實をいふと、それからこつち人生は幸福になりましたわい。この年ぢや、女子ども、寄りつきませんからな。」

「要するに」と私は或る政治家の言葉を引用して言つた。「汝は、より大なる自由と、より小なる責任との位置にたつてりといふわけですな。」

私は十分要領を言ひあらはすやうに翻譯したつもりだけれども、はじめはこの文句の意味が彼にはよく呑みこめなかつたが、そのうちに意味がわかつたと見えて言つた。

「その通りですわい、狒々さん、やつとわかりました。だが、その責任はみんな殺されちまうんです。だから老年の女は少なくなつてわけなんです。奴等は自分で責任をしよつてゆきますだよ。それから彼は莊重な口調で言つた。「あの娘についていぢや、どう言つたらよいかわかりませんが、あの娘は勝氣な娘で、おつれの獅子さんに惚れとりますわい。あの兒が獅子さんのあとをおひまはして、あの人の命を救けたことは御存じぢやろ。それにわし共の習慣によると、あの娘は獅子さんと結婚したんぢやから、あの人のゆくとこへはどこへでも行く権利がありますぢや。」彼はこゝで一段と意味ありげにつけたした。「もし女王様さへいけないと仰言らなければですぞ。女王様の御言葉は誰の権利よりも強いですからな。」

「で若し女王が彼の女に彼から別れると言はれて、あの娘がそれを肯かなんだら、どうなります？」  
「若し」と彼は肩をそびやかして言つた。「暴風が樹に狂がれと命令して、樹がそれをきかなんだら、

「どうなりますか？」

かう言ひながら彼は答へも待たずにくるりと向きをかへて、彼の駕籠の方へ歩いて行つた。それから十分間のうちに吾々はすつかり出發の用意をと、のへた。

盃形の噴火孔を横切るのに一時間以上もかゝり、その縁をのぼつて外側へ出るのにまた半時間かかつた。そこは素晴らしい景色であつた。吾々の前には、ゆるやかな勾配になつた草原が横はつてをり、草原のあちこちには大部分荆棘類の樹が、群生してゐた。このおだやかな勾配の底にあたる、九哩か十哩ほどさきに、吾々は、朦朧たる沼の海を認めた。沼の上空には、ちやうど都會の上空に煤煙がかゝつてゐるやうに、どす黒い水蒸氣がかゝつてゐた。この勾配を降りてゆくのは駕籠かきどもにとつて難作はなかつたので、正午までに吾々は陰氣な沼の縁まで來た。そこで吾々は駕籠を停めて晝食をした。め、それからうね／＼した小徑をつたつて沼地の中へはひつて行つた。吾々のやうに馴れない者には、すぐに道は殆んどわからなくなつてしまつた。今でも私は駕籠かきどもが、どうしてあんな道を迷はずに歩けたかを不思議に思つてゐる。行列の先頭には二人の男が長い竿をもつて進んで行き、時々それを前の地面へさしこんでゐた。それは、どういふわけか土壤の性質がよく變つて、一箇月前には安全だつた處でもその次には旅人の身體を呑んでしまふやうなことが屢々あつたからである。こんな退屈な陰氣な景色は私はつひぞ見たことがない。何處まで行つても果しない沼地であつた。この沼地の中に生きてゐるものといつては水禽類と、それを食つてゐる獸とで、ところ／＼にある水溜りには、小さい鰐の一種や、黒い色をしたいやな水蛇や大きな蛙などがうぢやうぢやしてゐた。蚊ときては、若しさういふことがあり得るとすれば、前に苦しめられた河よりもひどかつた。しかなによりも一番たまらなかつたのは、あたりに立ちこめてゐる、腐つた植物のひどい惡臭であつた。

ずん／＼その中を進んで行くと、たうとう日は沈んだ。その時ちやうど吾々は、廣さ二エーカーばかりの、高い地面に着いたのであつた。そこは、沼地の中の乾いたオアシスで、ピラリは、そこで夜營をするのだと言つた。しかし、夜營といつても極く簡單なもので、ひからびた草や、吾々がつて來た少しばかりの薪でこしらへた小さい焚火をかこんで車座に坐ればよかつたのである。そこで吾々は食事をしたり煙草をふかしたりした。この低地の暑さは非常なものであつたが、不思議なことに、時々冷くなることもあつた。けれどもどんなに暑くても吾々は火のそばがなつかしかつた。といふのは蚊は煙がきらひだからである。やがて吾々は毛布にくるまつて眠らうとしたが、ほかのことはまあ我慢するとして、蛙の啼聲と、空に何百となく群がつて飛んでゐる鳴の聲とのために、とても私は眠つたかになかつた。私は、横を向いて隣にゐるレオを見ると、彼はうと／＼まどろんではゐたが、彼の顔はいやに赤みを帯びてゐた。そして、ちら／＼する焚火の明りで見ると、向う側にあるアステーンが時々眩をついて顔を上げて、ひどく心配さうに彼の寝顔を見てゐた。

それでも私にはどうすることも出来なかつた。吾々のもつてゐた唯一の豫防薬のキニーネはもう澤

山服んでゐたのである。そこで私はごろりと横になつて幾千となく現はれて来る星を見まもつてゐた。そのうちに、巨大な空の穹窿はきら／＼光る點で一ぱいになつてしまつた。その點はみんな一つの世界なのだ。このすばらしい光景を見ると、人間といふものの弱少さがつく／＼と感ぜられる。まもなく私はそんなことを考へるのをやめた。無限を掴まうとしたり、世界から世界へと大股に歩いてゆく全能の神の歩みのあとをつけようとしたり、神の仕事から神の目的を察知しようとしたりすると心はすぐに疲れて来るものだ。こんなことは吾々の知るべきことぢやない。知識は強者のものだ。然るに吾々は弱者なのだ。あまり物を知りすぎると、吾々の不完全な視力は却つて盲目になり、あまり力をもちすぎると吾々の理性は壓倒されてしまふ。真理にはヴェールがかつてゐるのだ。吾々は太陽を見つめることができなると同じやうに、真理の光輝を見ることはできないのだ。真理は吾々を打ちくだいてしまふ。十分な知識は到底地上の人間には得られるものでない。吾々は吾々の能力を買ひかぶり勝ちなものだが、それはとるに足らぬものなのだ。小さな容れ物はすぐに一杯になつてしまふ。あの天體を回轉させる力、それを司る叡智の千分の一でも詰めこまうものなら、吾々は粉微塵に粉碎されてしまふだらう。外の世界では、又他の時代にはさうでないかも知れないが、そんなことは誰にもわかりはしないのだ。この世界では、人間の運命は、たゞ勞苦に耐へる事だ。運命に吹きまゝくられてゐる泡沫のやうな快樂を捉へようとして、吾々はあくせくしてゐるが、その泡沫がこはれてしまはないうちに一瞬間でも手の中にのこつてゐれば、まだよい方である。

仰向きに寝てゐる空には、永遠の星が輝いてゐる。下には、沼から生れた小さな悪魔のやうな火の玉が、あちこちに亂れ飛んでゐる。私はこの二つに人間のすがたが見られるやうな氣がした。その晩はどうしたものか、かうした考へが私の頭の中で次から次へと起つて來た。かうした考へは吾々を苦しめるばかりだ。何故なら考へるといふことは、思考の無力を示すだけの役にしかた、ないからである。吾々は一體何のために黙々たる空間に叫びかけるのだらう？ 吾々の曇つた理知で、星のちらばつた大空の祕密を読むことができるだらうか？ 空から何か解決がやつて來るだらうか？ 決して何も來はしない。來るものは反響ととりとめのない幻影とだけだ！ しかも吾々は墓場の彼方に解決があつて、信仰がそれを與へてくれるのだと信じてゐる。信仰がなければ、吾々は精神的に死んでしまはねばならん。信仰の助けによつて、吾々はなほ天國に攀ぢのぼることができるとだ。私は疲れてゐたが、眠つたれないので、たうとう、吾々のいまやつてゐることを考へはじめた。何といふ亂暴な冒険だらう。しかもそれでゐて、幾世紀も前に壺の破片に記された文句と何と不思議に符合してゐることだらう。滅びた文明の廢墟の中に、不思議な人民を支配してゐる女王とは一體どのやうな女だらう？ 無限の生命を與へるといふ火の柱の意味は何だらう？ 肉體を何年も何年もの間腐らずに保存する藥液があり得るものだらうか？ それはあり得るではあらうが、實際にはありさうに思はれぬ。氣の毒なヴィンシイが言つたやうに生命といふものが生じて、一時繼續するのが不思議でないなら、生命がいつまでもつゞくことは猶更ら不思議ではないかも知れん。若しそれがほんたう



だとしたならどうなるだらう？ その方法を見出した者はきつと世界の支配者になるに相違ない。その人は世界中の富と智慧と力とを蓄積するに相違ない。普通の人間の一生づつを費して、色々な藝術や科學ををさめることもできる。若しさうであるとしたならば、そして、私は一時もそんなことは信じなかつたが、その女王が實際に不死であるならば、わざ／＼食人種の中に交つて、洞窟の中に住つてるといふのは一體どういふわけだらう？ この一點で疑問は氷解する。あの話は諛つばちなのだ。あれを書いた時代には人々が迷信を信じてゐたから、あんな話を信じたのだ。それは兎に角、私は無限の生命などはほしいとは思はぬ。私はもう四十年の間にあまりに多くの悲しみや苦しみを味ひ過ぎたから、この上そんな状態が無限に續いたりしてはやりきれない。とは言つても、他の人と比較して見ると、私の生涯は幸福の部なのだが。

しかし現在のところでは、吾々の生命は無限に續きさうであるよりも、非常に短く切りつめられてしまひさうであることを思ひめぐらしながら、私はどうにか眠りに就いた。私が眠つたので、きつと讀者は大助かりであらうと思ふ。

私が眼をさました時はちやうど夜明けであつた。護衛の者どもや駕籠かきどもは、濃い朝霧の中に、幽霊のやうに動きまはつて出發の用意をしてゐた。焚火はもうすっかり消えてゐたので、私は寒さにがたく／＼慄へながら起ち上つてのびをした。それからレオを見ると、彼は床の上に坐つて兩手で頭を抱へてゐた。彼の顔は眞赤になり、眼はきら／＼光つてゐたが、それでゐて瞳のまはりには黄色くなつてゐた。

「どうだい気分は、レオ？」と私は言つた。

「今にも死にさうな気がしますよ」と彼は皺喰れ聲で答へた。「頭は割れさうだし、身體ぢうが胴慄ひして、むか／＼するんです。」

レオはひどい熱病にとつつかれたのだ。私はジョップのところへキニーネをとりにゆくと、幸ひにキニーネはまだたつぷりあつたが、ジョップもどうも背中の方がちく／＼痛んで、眩暈がしさうでしやうがないと言つてこぼしてゐた。外にどうもしやうがないので、私は二人にそれ／＼十グレンブ、キニーネを服ませ、私も用心のために少しばかり服んだ。それがすむと、私はビラリに會つて彼に事情を話して、どうしたらよからうかとたづねた。彼は私と一緒にやつて来て、レオとジョップとを見た。序に言つておくれが、彼はジョップのことを肥つてゐて顔が丸くて、眼が小さいので、豚と呼んでゐた。

「やれやれ」と彼は相手に聲の聞えないところまで来ると言つた。「熱病だ！ わしもさうだと思つた。獅子の方は大分悪いが、まだ若いから命は助かるだらう。豚のはうはたいしたことではない。この方は軽い熱病できつとはじめには背中痛むやつだ。まああれだけ肥つとりや、少々痩せてもいゝだらう。」

「二人は旅をつゞけられますか、長老？」と私はたづねた。

「そりや勿論つゞけてゆかにやららん。こゝでとまつた日にや死ぬにきまつてますからな。それに、地べたより駕籠の方がいゝですわい。途中に差支へさへなけりや、今晚までには沼地をとほり抜けてよい空気のところへ行けますちや。さあ、あの二人を駕籠へのせて出かけよう。朝霧の中に立つてるのはひどく身體に毒だから、今事は歩きながらすることにしよう。」

吾々はそのとほりにした。そして重い心で、また不思議な旅に旅立つた。はじめの三時間程は無事に過ぎたが、そのあとで、もう少して一番先頭につて行つたピラリの命を失うやうな事件が起つた。吾々はその時、沼地の特に危険な場所を通つてゐたので、駕籠かきは時々膝まで泥の中へ沈むことがあつた。どうしてこんな道を重い駕籠をかついで行けるのか私にはわからなかつた。

やがて、吾々が、えつきくと進んでゐると、鋭い金切聲がきこえ、つゞいてわつといふわめき聲と、ひどい水のはねる音とがきこえて、行列はびつたりととまつてしまつた。

私は駕籠からとび出して前の方へ走つていつた。二十碼ほどさきに、一つの水溜りがあつて、吾々の行列はその水溜りの峻しい岸を通つてゐたのであつた。この水溜りを見ると、恐ろしいことにはその水面にピラリの駕籠が浮いてゐて、當のピラリの姿はどこにも見えなかつた。はつきり言つてしまへば、ピラリの駕籠かきの一人が運悪くも、日向ぼつこをしてゐた蛇を踏んだので、蛇に踵を噛まれて、無理もないことだが、擔いでゐる棒を離してしまつたのである。そして彼は峻しい岸の上でよろよろしたので駕籠にしがついたところが、駕籠が傾いたので残りの駕籠かきが手を離した拍子にピラリと例の駕籠かきとは諸共に、水溜りの中へころがり落ちてしまつたのである。私が水の縁まで行つた時には、二人とも姿は見えないんだ。實際、その駕籠かきは、かはいさうに、それつきりたうと、水溜りの中へ沈んでしまつたのである。泥に吞まれてしまつたものか、或は多分蛇に噛まれて瘻を起したものであらう。とにかくこの男は消えて失くなつてしまつたのである。ピラリの姿も見えなかつたが、彼が下でどの邊で藻掻いてゐるかといふことは水の上に浮いてゐる駕籠がたゞ動いてゐるのでよくわかつた。

「あ、あそこにある、長老様はあそこにある」と一人の男が言つたが、その男は彼を助けに行かうとするでもなく、他の者も誰一人助けに行かうとはしないで、たゞ立つて水のうへを眺めてゐるだけだつた。

「そこを退け畜生！」と私は英語でどなつて、帽子を抜きすてて、かけつけて、ざんぶと泥池の中へ跳びこんだ。二泳ぎばかりで、私はピラリが着物の下にこんぐらがつて藻掻いてゐるところまで泳ぎつた。

どうしてしたか私自身にもわからぬが、私は兎も角、着物を引きちぎつて、ピラリの身を自由にした。彼の頭は、まるで、蕨の葉をつけた黄色いバツカス神の頭のやうに、緑色の泥をかぶつて水面へばかりと浮んだ。それから先は樂であつた。ピラリは仲々氣のきいた老人だつたので、溺死者がよくやるやうに、私にしがつくやうなことをせぬだけの常識をもつてゐた。そこで、私は彼の腕をつか

んで、岸の方へひいてゆき、やつとのことで泥の中から上つて来た。こんなひどい目にあつて、泥だらけになつてゐながら、美しい長髯から滴をたらしてたつてゐたビラリの姿に、まだ押しも押されぬ氣品があつたのは驚くべきことであつた。

「この犬奴等！」と彼は、やつと物が言へるやうになると駕籠かきどもに向つて言つた。「貴様等は、このわしが、長老のわしが濡れか、つてゐるのを平氣で見てもくさつたな。この人がゐなきやわしはきつと濡れ死んでゐたんだ。このことはよくおぼえとくぞ。」かう言ひながら彼は、ぎら／＼光る濡れた眼でちつと一同を見据ゑた。その様子を駕籠かきどもは氣味悪く思つたらしかつたが、むつつりして、平氣を装うてゐた。

「あんたは」と老人は私の方へ向きなほつて私の手を握りしめながら言葉を吐いた。「安心さつしやい、良いにつけ悪いにつけわしはあんたの味方ぢや。あんたはわしの命を助けて下さつたが、ことによると、今度はわしがあんたの命を助けるやうなこともあらうて。」

そのあとで、吾々はできるだけ綺麗に身體を拭いて、駕籠をひき上げて、濡れ死んだ一人だけをあとにのこして旅をつづけた。私はこの瀕死した男が、偶然評判のよくない男だつた、めか、それともこの國の人間の生れつきの冷淡と利己主義のためかは知らぬが、突然一人の仲間を失つたことに對して、誰一人悲しんでゐるものはなかつた。悲しんでゐたのは彼のかはりに駕籠をかつぐ番になつた者だけであつた。

## 第十一章 コオルの平原

日没までにかれこれ一時間もある頃に、吾々は、沼地からやつと抜け出して、逆捲く波のやうに次に高まつてゐる土地へ着いたので、限りなく有り難かつた。ちやうど最初の波の峰の手に吾々はその夜を明かすことにした。私は何をしておいてもレオの容態をしらべてみた。彼の容態は、朝よりもつといけない位であつた。そして新たな危険の徴候がおこつて、明けがたまで、それがつゞいた。私は一睡もしないで、アステーンの手傳をした。この女は、私がこれまでに見た中で、最も親切な最も倦むことを知らぬ看護婦で、一生懸命にレオとジョップとの看護をしてゐた。こゝは、空氣も暖く、きれいで、蚊もあまり多くはなかつたので、比較的凌ぎよかつた。

翌朝の明け方になると、レオはすつかり頭が變になつて、身體が半分に割れたなんて囁語を言つた。私はしまひにはどうなることかと思つてはらく／＼した。この種の熱病にかゝると大抵助からんといふことを私は何遍もきいてゐたのだ。私が心配してゐるところへちやうどビラリがやつて来て、早速出かけにやならぬ、特に、レオは十二時間以内にもつと靜かに落ちつける處まで行つて、まともな看護を受けなくちや一兩日中に死ぬにきまつてゐると言つた。私は彼の言葉に従ふより外はなかつたので、レオを駕籠にのせて出發した。アステーンは彼のそばを徒歩でついて行つて、蠅を追つてやつたり、駕籠から落ちないやうに見張つてやつたりしてゐた。

日の出から半時間のうちに、吾々は、先刻言つた高臺の頂についた。素晴らしい景色が吾々の前にひらけて来た。眼下には青々とした草原が横つてをり、ところ／＼青葉が繁り、花が咲いてゐた。その背後の遙か彼方には、大きな、不思議な山が平原の中にひよつこり聳え立つてゐた。吾々の立つてゐるところからそこまでは、かれこれ十八哩もあるだらうと私は思った。山の麓は草原の傾斜地のやうに見えたが、だん／＼のぼつてゆくと、さうだ、あとで観察したところによると、平原の地平面から約五百呎ものぼつてゆくと、とてつもない大きな、壁のやうに眞つ直ぐな岩の斷崖があつた。それは高さが千二百呎乃至千五百呎はたつぶりあつた。この山は疑ひもなくとは火山だつたらしい。その形は圓いやうであつたが、圓の一部分しか見えないのだから、その大きさは正確なところはわからなかつたが、何しろ随分大きな山であつた。あとになつてから私はこの山の底面積は五十平方哩以下ではあり得ないことを發見した。

私は吊網の上に坐つて、平原の彼方に見えるこの莊嚴な光景を眺めてゐた。するとビラリがそれに氣が附いたと見えて、彼の駕籠を私の駕籠のそばへ並べさせた。

「あれが全能の女王の御殿ですぢや。」と彼は言つた。「これ程立派な宮殿をもつてをられた女王がありませんかな？」

「まったく驚きましたね」と私は答へた。「だがどうしてあの中へはひるんです？ あの崖はとてものぼれさうにないぢやありませんか？」

「下を見なさい、獅々さん。ほら道があるだらう。あれは何だと思ひなされるかな。あんたは物識りのやうぢやが、さあ言つて御覽。」

見ると、山の麓まで一直線に、道路のやうな線がつゞいてゐた。だがその上には芝が一杯生えてゐた。そして、その兩側には高い堤防が築いてあつて、それはところ／＼切れてゐたが、大體に於ては續いてゐた。私には何のためかわからなかつた。道路に堤防をこしらへるのをかきな話である。

「さうですね。」と私は答へた。「あれは道路でせう。でなければ、河床かそれとも」と言ひながら、それが非常に眞つ直に切り開いてあることに氣づいて、私は附け足した。「運河かと言ひたいところですが。」

前日の災難にもかゝらず、すつかり元氣になつてゐたビラリは、大きくうなづきながら答へた。

「その通りぢや。あれは前にこの土地に住んでゐた人が、水を流し出すために切り開いた水路ですぢや。わし共がこれから行く山の岩で圍まれた窪地は昔は大きな湖ぢやつたのだが、わし共の先祖が、どうしてやつたのか、あの山の堅い岩を湖床まで切り抜いて水のはけ口をつくつたのですわい。で愈水があつた湖から流れて来て、この平地を通つて、あの高地の向うにある低地まで流れてゆきまして、わしどももの通つて来た沼地は多分そんな風にしてできたものぢやらうて。で、湖がすつかり干上つてしまつたものだからわしども先祖は、その湖床に、立派な都市をこしらへたのぢやが、今では、その廢墟と、コオルといふ名前とだけしか遺つてをらんわけで、その後年々、そこに洞窟や

通路が切りひらかれたのぢやが、それは今に見ることができませんわい。」

「さうかも知れんが」と私は答へた。「若しさうだとすると、湖水が雨水や、泉の水でまた一杯になら

ないのはどうして？」

「それはな、わしどもの先祖は賢い人ぢやつたので、矢つ張り水のはけ口はのこしといたんぢや。ほ

ら、右手の方に河が見えるだらう？」と言ひながら、彼は吾々のあるところから四哩程はなれた平

原をうねうねと流れてゐるかなり大きな河を指さした。「あれが下水ぢや、あれはこの道と同じ山腹から

出てゐますのぢや。はじめにはこの水路から水は流れて出たのぢやらうが、わしどもの先祖が水を迂

廻さして、この方は道路につかふやうにしましたのぢや。」

「ではその下水の外にはあの山へはひる道はないんですか？」と私は答へた。

「一とこあるにはあつて、牛や徒歩の人が非常に骨を折つて中へは入れるけれどそれは秘密ぢや。あ

んたが一月探したつて見つかりつこはない。それは一年に一度、山腹や平地で草を食つて肥つた牛を

あの中へ入れるときにつかふだけですわい。」

「女王はいつもあそこに住んでをられるのですか、それとも時々山の外へ出て来られるんですか？」

と私はたづねた。

「女王は何處へでもいらつしやるぢや。」

そのうちに吾々は大平原に着いた。そこには、半熱帯性の花が咲き、樹が生えてゐた。樹は大抵一本

づゝ生えてをり、せいとく三四本かたまつてゐる位で森になつてはゐなかつた。犀や、野牛や、羚羊

や、その他澤山の獸や駝鳥などが、樹蔭や草原の上などをぞろぞろと歩いてゐるので私はもう我慢が

できなくなつた。私は「エクスプレス」ぢや面倒なので短銃身のマルチニ型獵銃を駕籠の中へ入れて

もつて来たのだが、それをとり出し、一本の樹の下に身體をこすりつけてゐる大羚羊を見つ

て、雀躍して、できるだけそばまで近づいて行つた。彼は私が八十碼の處へ近寄つてゆくまで知

らずにゐたが、やがて、くるとこちらを向いて、私をにらみつけながら逃げ出す準備をした。私は

銃を上げて、横向きになつてゐる大羚羊の肩の下をめぐり引金をひいた。私は私の乏しい經驗を

通じて、こんなに見事に獲物を斃したことはない。彼は一跳び宙に跳び上つて、ぱつたり倒れてしま

つたのであつた。駕籠かきどもは何事が起つたかと思つて立ち停つて、ひそく驚歎の囁きをかほし

た。どんなことにも吃驚しない、むつつりしたこの連中にとつては異例のことであつた。その間に護

衛の連中は獲物のそばへかけつけた。私は獲物を見にゆきたいのは山々だつたが、それをぢつと抑へ

て、まるで一生羚羊撃ちをして来た人間のやうに、ぶらぶらと自分の駕籠の方へひきかへして来た。そ

して、鐵砲を射つことを不思議な魔法と心得てゐたアマハッガー人は、これで私に對する尊敬を大分

増したとらうと内心に北叟笑んでゐた。

ビラリは感歎して叫んだ。「まったく不思議ぢや、わしはこの眼で見なきやあんなの話信じないと

ころだつた。あんなはわしに、さういふ殺しかたを教へてくれるつて言ひましたな。」

「教へますとも長老」と私は軽く言つた。「こんなことはわけはありません。」  
とは言ひながら、私は、ピラリが愈々鐵砲を射つときにはきつと腹這ひになるか、どつかへ身をかくしてゐようと堅く決心してゐた。

それから何事もなかつたが、日没から約一時間半前に、吾々は、前に言つた、舊火山の下まで来た。辛抱強い駕籠かきどもが、昔の運河の河床に沿うて、えつちら、おつちら、駕籠をかついで、たうとう、雲表にそびえたつ褐色の絶壁のそばまで来たとき、その莊嚴な眺めは、何とも口で言ひ表はすことはできなかった。私はその閑寂と、その壯大とに壓倒された。上へのぼつてゆくにつれて、だんだんと上から蔭が這ひ寄つて来て、そのうちに、たうとう吾々は天然石を切り抜いた切り通しの中へはひつて行つた。火薬もダイナマイトもなしに、どうしてこんな大工事ができたものか私にはわからない。この工事や、岩の中に洞窟を切り開く工事は、いづれもコオルの人民の國家事業で、埃及のピラミッドと同じやうに何萬人の奴隷を使役して、何百年もかゝつてこしらへられたものであらう。たうとう吾々は絶壁の正面についた。そして現代の技師たちが鐵道を敷設するときこしらへる隧道を思はせるやうな暗い隧道の入口をのぞきこんだ。この隧道からは多量の水が流れ出してゐた。實を言へば天然石の切り開き工事はじまつてゐる地點から吾々はこの水流に沿うて上つて来たのだ。この水流はやがて下へ流れて、前に言つた平野の中をうねうねと流れてゐる河になつてゐるのだが、上流の方では、切り通しの半分は水路となり、それより八呎ばかり高くなつた他の半分は道路に用

ゐられてゐたのである。吾々の一隊は隧道の入口でとまつた。そして、或る者が、もつて来た土器のランフに火を點してゐる間に、ピラリは駕籠から降りて来て、吾々に向つて、女王の命令でこれから、山の中の秘密の道を知られては困るから眼かくしをしてもらはねばならぬと、親切に、しかし、きつぱりとした口調で言つた。私は喜んでこれに同意したが、旅の疲れにも拘らずもう餘程よくなつてゐたジョツプは、燒壺で殺される準備とでも思つたのか、眼かくしをするのを嫌がつた。しかし私がここには壺もないし、焚火もない様子だから大丈夫だと言つたので彼はいくらか安心した。氣の毒なレオは、何時間も轉輾反側して苦しんでゐた擧句、有り難いことには、ぐつすり寢こんでしまつたので眼かくしをする必要はなかつた。尤も眠つてゐたといふより昏睡してゐたといつた方がよいかも知れぬ。私にはどちらだか、わからなかつた。この眼かくしといふのは、アマハツガー人が着物をこしらへる黄色い麻布の切れつばしで、眼のまはりをしつかりとくゞつて、うしろでかたく結ぶことであつた。この麻布は、その後私の発見したところによると墓場から掘り出したもので、私の想像したやうに土民のこしらへたものではなかつた。

序に言つておくが、アステーンも眼かくしをされた。これは、彼女が吾々に秘密を聞かすかもしれんといふ用意のためだつたのであらう。

それがすむと、吾々はまた歩き出した。やがて、私は、駕籠かきどもの蹻音の反響と、狭い空間に響き渡る爲に水の音が大きくなつたのとで、山の中へはひつてゐることを知つた。岩の死んだ心臓の

中を何處へとも知れずつれてゆかれるのはあまり氣持のよいものではないが、私はもうかうした経験には馴れつこになつて終つて、どんなことにも驚かぬやうになつてしまつてあたのである。そこで、私はちつと横になつて、駕籠かきの蹻音や水音をきながら、愉快な旅路だと信じようとつとめた。しばらくすると駕籠かきどもは陰鬱な小歌を歌ひはじめた。それは吾々がポートの中で俘虜にされたときにきいたのと同じ歌だ。そのうちに沈滞した空氣はだん／＼重苦しくなつて息が詰りさうになつて來た。そして遂に駕籠が幾度も角を曲つて、水の音はもう聞こえなくなつてしまつた。すると空氣はまたいくらかさわやかになつて來たが、曲り角はそれから幾つも幾つもつゞいて、眼がくしされてある私は、全く見當も何もつかなくなつてしまつた。私はいつかこの道を通つて逃げなければならぬやうなことがあるかも知れんと思つたので、頭の中で、通路の地圖を描いておかうと思つたが、それは到底だめであつた。それからまた半時間もたつと、私は外氣の中へ出たことに氣がついた。眼かくしをとほしてぼんやり光りが感じられたし、顔に新鮮な空氣があたるのをおぼえた。それから數分間の後、駕籠は停つた。そしてピラリがアステーンに向つて眼かくしをとるやうに命じ、吾々の眼かくしもとつてくれるやうに命じた。私は彼女の注意もまたずに、自分の眼かくしをほどいてあたりを見廻した。

案の定吾々は絶壁を通り抜けて、その反対側の、突き出た岩の眞つ下にあたのであつた。一番はじめに私が氣のついたことは、こゝから見ると絶壁はそんなに高くはないといふことであつた。實際、五百呎などはなかつた。このことは、この湖床、或は太古の噴火孔の床は、外側をとりまいてある平原の地面よりもずつと高いといふことを證明してゐた。吾々の立つてゐるところは、岩にかこまれた大きな盃形の盆地で、前に吾々があたところとそつくりであつた。たゞ大きさはその十倍もあつて反対側の絶壁の輪郭がやつと見わけがつく位であつた。かやうに自然の障壁で圍まれた平野の大部分は耕されて、石の壁で墻がしてあつた。それはこの平野に澤山すんでゐる牛や山羊が畑の中へはいつて來ないやうにするためであつた。

この平野のあちこちには草の生えた丘がもち上がつてゐて數哩彼方の中心に近いところに非常に大きな廢墟が見えるやうに私は思つた。だがその時には私はそれ以上のものは何も見てゐるひまなどはないなかつた。といふのは、すぐに吾々は、吾々のこれまでによく知つてゐるアマハツガー人に寸分違はぬアマハツガー人にとりかこまれたからである。彼等はあまり物は言はなかつたけれども、すぐ吾々のそばまでよく／＼たかつて來た。その時、多くの武器をもつた人々が隊をつくつて現はれ、象牙の杖をもつた士官に指揮されて吾々の方へ駆足で進んで來た。彼等は、まるで蟻が巢の中から出るやうに、斷崖のおもてからとび出して來たのであつた。士官も兵卒も、豹の革のほかにみんな上衣を着てゐた。てつきりこれは女王の護衛兵だと私は思つた。

そのうちに隊長がピラリの前へ進み出て、象牙の杖を額に横たへて敬禮し、何かたづねてゐたが、私にはその意味は全くわからなかつた。ピラリが簡單に答へると、軍隊は廻れ右をして崖の縁に沿う

て行進をはじめた。吾々の駕籠の行列はそのあとについて行つた。かうして半哩も歩いた頃、吾々はもう一度停つた。そこは高さ六十呎、幅八十呎もある途方もない大きな洞窟の入口であつた。こゝでビラリは駕籠から下り、ジョップと私とにあとからついて来るやうに言つた。勿論レオはまだ身體がひどく悪かつたので、そんなことをするどころでなかつた。私はビラリの言葉に従つて大きな洞窟の中へはひつた。かなり奥の方まで夕日がさしこんであたが、日の光りがとゞかないところはランプでかすかに照されてゐた。このランプの行列は、まるで人通りのない倫敦の町の瓦斯燈のやうに、果しない遠くまで延びてゐるやうに思はれた。

私が第一に氣のついたことは、洞窟の壁には一ぱいに浮彫の彫刻がしてあつたことであつた。それは大部分前に言つた酒壺にかいてある繪のやうなものであつた。繪と繪との間には文字が書いてあつたが、私にはそれはどこの文字かまるでわからなかつた。兎に角それは希臘文字でも、埃及文字でもヘブライ文字でも、アッシリア文字でもなかつたことはたしかである。それは私の知つてゐるどこの國の文字よりも支那の字によく似てゐた。入口の方は繪も字も擦れてよくわからなかつたが、奥の方へはひるにつれて、まるで彫刻師がたつた今鑿をやめたかのやうに新しく完全であつた。

護衛兵の一隊は洞窟の入口でとまつて、吾々を中へ案内した。しかし中へはひつてゆくと白衣を着けた一人の男が、無言のまま、うやうやしく吾々に敬禮した。が、あとからきくと、それは啞だつたのである。

入口から二十呎ばかりのところ、洞窟と直角に兩側の岩をくり抜いて、小さい洞窟、或は廣い廊下のやうなものがこしらへてあつた。そして、この廊下の入口の正面から向つて左側に二人の番兵がたつてゐたが、それで見ると、これは女王の居間へ通ずる廊下の入口であらうと私は思つた。右側の廊下には番兵はゐないで、例の啞者が、吾々に中へはひれと手眞似で示した。ランプの點いたこのを道數碼進んでゆくと、一つの室の入口へ來た。そこにはザンジバルの敷物に似た草でこしらへたカーテンがかゝつてををつた。啞者は又丁寧にお叩頭をして、固い岩をくり抜いてつくつた相當に廣い室へ案内した。しかし、有り難いことには、この室は、斷崖の表面まで鑿穴が掘り抜いて、そこから明りを探るやうになつてゐた。この室には一つの石の寢臺と、洗面用の水を入れた壺と、毛布の代用にするための美しく鞣した豹の皮とが備へつけてあつた。

レオはまだぐつすり眠つてゐたので吾々はこの室に彼を残しておいた。アステーンもレオと一緒に残つた。例の啞者はアステーンに鋭い一瞥を與へて「お前は誰だ。誰の命令で此處へ來たんだ？」ととがめるやうな様子をしてゐた。それから彼はジョップとビラリと私とに、次々に、同じやうな室へ案内してくれた。

第十二章 女王

レオの病氣を見舞つたあとで、ジョップと私とが何はにおいても先づ第一に身體を洗つて綺麗な着物



と着替へた。吾々の着てゐた着物は、アラビヤ船が沈没した時からまだ一度も着替へないのであつた。前にも言つたことだが、吾々は運よくも、荷物の大部分はボートへ移してゐたので、それを駕籠かきどもがもつて来てくれてゐたのである。吾々の着物は、大抵、よく縮んだ、丈夫なフランネルでこしらへたものであつたが、かういふ土地を旅行するには、これに限ると私は思つた。

この時身體を洗つて、髪にブラシをかけて、清潔なフランネルに着替へたときの氣持のよさはいつまでも忘れられぬ。たゞ一つ物足りなかつたのは石鹼のないことであつた。

あとでできたところによると、アマハツガー人は石鹼の代りに焼土をつかふといふことであつた。これは馴れないうちは氣持がわるいけれども、石鹼の代用として中々隅におけないものだといふことである。

私は着物を着替へ、ビラリに狒々と呼ばれたのも無理のない黒い鬚に刷子をかけてこぎれいにする、ひどく空腹を感じて来た。だから、別の啞者——今度の啞者は若い娘であつた——が何とも合圖をせず、だしぬけにカーテンを開けて、紛れつこない手眞似——といふのは口をあけて奥の方を指さすのであつた——で食事の用意ができたことを知らせに来てくれたとき、私は少しも失敬だとは思はなんだ。私は彼女のあとについて、吾々のまだはひつたことのない、隣の室へはひつた。そこにはもうジョップが来てゐた。彼も美しい娘に案内されて来たので困つてゐた。彼は、例の「焼け壺」の娘が彼のそばへ進んで来たときのことをいつまでも忘れないで、そばへ寄つて来る娘つ子はみんな同じやうな目的でやつてくるのぢやないかと疑つてゐたのだ。

「この若い娘どもの人を見る眼つきは、どうも作法になつてゐるとは言へませんね」と彼は辯解がましく言ひ言ひした。

この室の大きさは寢室の二倍もあつて、もとは食堂としてつかはれたものらしくもあつたが、又僧侶が死人に防腐用の香料を塗るためにつかはれたものらしくもあつた。といふのは、これ等の洞窟は、大きな地下墓所のやうな形をしてゐて、その兩側には、天然岩をそのまま、切つてこしらへた縦横三呎高さ六呎ばかりのテーブルがあつて、そのテーブルの上は人間が坐つたときに膝がはひるやうにくり抜いてあつた。それから、よく験べて見ると、はひつて左手にある一つのテーブルははじめ食卓に使はれたのだと思つたが、それは思ひちがひで、これは屍體に香料を塗るために用ゐられたものであることが明瞭になつた。といふのはその上に子供から大人に至るまでの様々な大きさの人間に丁度びつたりあふやうに五つの人間の型が浅くくり抜いてあり、時々液を流し出すために、下へ穴が掘り抜いてあつたからである。それでもまだ疑はしいと思へば、その室の周囲の壁を見ると、そこには、古代の、王が長者からしい白髯の老人の、臨終から、香油を塗つて、葬るまでの畫面が彫刻であらしてあるのが見られた。

私はこの浮彫の彫刻を大急ぎで一とほり見てまはつてから、山羊の焼肉と、新鮮な牛乳と、玉蜀黍でこしらへた菓子とからなる素敵な食事の椅子にすわつた。これ等の食物はみなきれいな木の皿に入

れてあつた。

食事がすむと吾々はレオの様子を見に引き返して来た。といふのは、レオは當分女王に謁見してその命令をきかなくてもよいといふことだつたからだ。レオの室へはひつて見ると、彼はまだひどく悪かつた。もうすつかり昏睡から醒めて、頭の調子が全く變になり、ともすれば亂暴をはじめようとし、しよつちゆうカム河のボート・レースのことなどを口走つてゐた。實際吾々がはひつて行つた時にはアステーンが、彼をぢつと抱いて抑へつけてゐた位であつた。私が彼に話しかけると、私の聲をきいて落ちついたと見えて、彼は大分おとなしくなつたので、やつとすかして、キニーネを服ませた。

私は彼のそばにこれ一時間も坐つてゐた。少くも私は、大分暗くなつて来て、吾々が袋を毛布で包んで即席にこしらへた枕の上のつてゐる彼の黄金色の頭がやつと見える位であつたことをおぼえてゐる。その時、突然、ビラリが非常に物々しい様子ではひつて来て、女王が私に會ひたいといふ旨を知らせた。こんなことは滅多にない優遇だと彼はつけ足して言つた。ビラリは私がそれをあまり有り難がらんで少しびく／＼してゐたやうであつた。併し、實のところ、私は、どれ程、權力をもつた、不思議な女王かは知らんが、色の淺黒い、野蠻人の女王と會見するのだと思ふと大した有り難味は感じられなかつた。まして私の心は、可愛いレオのことで一ぱいで、彼の命が助かるかどうか心配になり出した矢さきであつたのだ。それでも、私は起ち上つて彼のあとについて行つた。すると床の上に何か光つたものが落ちてゐたので私はそれを拾ひあげた。讀者諸君は、おぼえてゐるだらうが、例の箱の中に、壺の破片と一緒に、鷲鳥と一日輪の御子といふ意味の妙な象形文字の記した甲蟲形の寶石とがはひつてゐたのである。この寶石は非常に小さいもので、レオはこれを、普通に通に印の代りにつかふ大きな金の指環にはめさせてゐた。私がこの時拾ひ上げたのは、その指環であつたのだ。彼は、熱の發作が起つたときに、思はずそれを抜いて床の上へ投げすてたものだらうと思つた。うつちやつておけばなくなるかも知れないと思つたので、私はそれを自分の小指にさしてジヨップとアステーンとレオとをあとにのこしてビラリのあとについて行つた。

吾々は通路を出て、廊下のやうな大きな洞窟を横ぎつて、向う側の通路へ行つた。入口には二人の番兵が塑像のやうに立つてゐた。吾々の姿を見ると、彼等は頭を低げて敬禮し、それから、槍をもち上げて、前に士官が象牙の杖でしたやうに、それを彼等の額に横たへた。吾々は二人の間をとほつて中へはひつた。廊下は吾々の室へ行く廊下と同じであつたが、この方はランプの光りがずつと明るかつた。五六歩降りてゆくと、吾々は四人の啞者に會つた。二人は男で二人は女である。彼等は丁寧にお叩頭をしてから、女は先にたち、男はあとからついて来た。それから、吾々の室にかゝつてゐたのと同じやうなカーテンのかゝつてゐる幾つかの入口の前を通りすぎて進んで行つた。これ等の入口はあとでわかつたところによると、女王のつきそひの啞者たちの室だつたのである。それから又數歩進んでゆくと、今度は左側ではなく正面を向いた入口の前へ来た。そこで通路は終つてゐるらしくかつた。こゝには、二人の、白いといふよりも、黄色つばい上衣を着た番兵が立つてゐて、吾々に敬禮をし

てから、重いカーテンをあげて、吾々を縦横四十呎づゝもある大きな控への室へ通した。この室の中には八人か十人位の黄色い髪カミの女が象牙の針ハリで刺繡シシュウらしいものをしてゐた。この女たちも矢張り聾啞ソウオウであつた。このランプの點いた大きな室の端には更にも一つの入口があつて、吾々の室の入口にかつてゐるのは全くちがつた東國製らしい綴織ツヅオリがかゝつてゐた。そして、そこにはとりわけ美しい二人の啞の娘が立つてゐて、頭を低く下げ兩手をくみ合せて恭順な態度を持してゐた。吾々が進んでゆくと、彼女等はめいめい片方の腕をのばして、カーテンを開けた。するとピラリが妙なことをしはじめた。あの人品のある老紳士のピラリはそこにいきなりしやがんで、兩手と兩膝とを地べたにつけて四つん匍ひになり、長い髻マヒを地べたにひきづりながら、向うの室の方へ匍ひ出したのである。私は普通の姿勢で、立つたまゝあとからついて行つた。すると彼は肩ごしにそれを見て言つた。「匍ふんだ、匍ふんだ、狒々さん、兩手と兩膝とをついて。これから女王の御前へ出るのぢやから、鄭重にしないと、きつと、其の場で殺されてしまひますぞ。」

私は立ち停つた。そしてこはくなつて來た。膝がしらがぐくくして歩けなくなつた。だが、すぐに私は考へ直した。私は英國人だ。その英國人たる私が、なる程猿と人には言はれたが、實際猿のやうな眞似をして、得體の知れぬ野蠻人の女王の前へ出る理由がどこにある？ それも殺されるにきまつてゐるとすれば別だが、さうでないかぎり私にはそんな眞似はできんし、又しもしない。はじめに匍つて出れば、しまひまで匍つてゐなければならぬ。それは自分の劣等さを承認するやうなものだ。かう思つて私は大膽に立つて歩いて行つた。やがて吾々は別の室へはひつた。それは控への室よりすつと狭く、壁には、入口にかけてあつたのと同じやうな、綴織のカーテンがかけてあつた。それは、控への室に坐つて刺繡をしてゐた啞者たちがこしらへたものであることが、後になつてわかつた。室内のところどころには、黒檀らしい黒い木でつくつて、象牙の嵌めこみ細工をした長椅子が置いてあり、床には、絨氈ジュタンのやうな敷物が敷いてあつた。この室のつきあたりには床の間のやうなものがあつて、そこにもカーテンが下つて、その間から光が洩れてゐた。それきりで、この室には人は誰もゐなかつた。

ピラリは、苦しうに、ぼつぼつと、この洞窟の中を匍つて行つた。私はそのあとから威張つて大股に歩きながらついて行つた。だが私はこれは少し失策つたと感じた。第一、老人が蛇のやうに腹をうめてゆくあとから歩いてゆくのは大して威嚴のある筈がない。ピラリについてゆつくり歩いために、一歩ごとに數秒間づゝ足を宙に振るか、或はスコットランドのメリー女王が演奏に出る時のやうに、一歩歩いてはどつと立ち停つてゐなければならなかつた。ピラリは、年齢のせゐもあつたらうが、あまり匍ふのは上手でなかつたので、その室まで行くのには随分長くかゝつた。私は時々もどかしくなつて、うしろから蹴つてやりたくなることもあつた。蠻人の女王の前へ、愛蘭人が隊をつくつて市場へ出かけるときのやうな風をして出てゆくなんて實に馬鹿げてゐた。實際吾々の様子はそれこそつくりだつたので、私はもう少しで聲を出して笑ふところだつた。

たうとう吾々はカーテンのところまで来た。するとビラリは胸を地べたにびつたりつけて平伏し、両手を死人のやうに前へのばした。私はどうしてよいかわからなかつたので、室内をじろく見廻しはじめた。まもなく私はカーテン越しに誰か吾々を見てゐる人があるのに気がついた。姿はわからないが、はつきりと誰かに見つめられてゐるやうな気がするのだ。しかもその凝視は私の神経に妙な作用を起した。私は何故か知らんが、空恐ろしくなつた。實際此處は妙なところであつた。壁は美々しく飾つてあり、柔かいランプの光りが照つてゐるにか、はらず、どうも淋しいのだ。これ等の附屬物は淋しさをへらすよりも淋しさを増してゐたのである。それは人つ子一人ない街燈のついた夜の街の方が、却つて眞つ暗な街より淋しいのと同じ理窟だ。室内は實に靜かで、ビラリは屍體のやうに重いカーテンの前に平伏してをり、カーテンの間からは、芳香が洩れて、薄暗い丸天井の方へ浮び上つてゆくやうに思はれた。一分、二分と時は経つたが、生き物のゐるやうな氣配はなく、カーテンも動かなかつた。けれども、私を見てゐる人の凝視は益々深く私の體の中へ泌みこむやうに覺えた。私は何とも名狀すべからざる恐怖に充され、額には油汗がにじみ出して来た。

そのうちにたうとうカーテンが動き出した。その蔭には一體何者があるのだらう？ 裸體の蠻人の女王だらうか？ 憂ひにしづむ東國の美人だらうか？ それとも當世風の若い婦人が午すぎのお茶を飲んでゐるのだらうか？ 私には皆目見當がつかなんだ。で、そのうちの誰かゐらつて驚きはしなかつたであらう。實を言ふと私には驚く餘裕もなかつたのだ。やゝあつてカーテンがひとりで動いて、その折り目の間から雪のやうに白い手がにゆつと現はれた。そのしなやかな指のさきには薄桃色の爪がついてゐた。この手はカーテンをつかんでそれをわきへよけた。すると、私がこれまでに聞いたことのないやうな柔かい、それでゐて鈴のやうにすきとほる聲がきこえた。その聲はまるで小川のせゝらぎのやうであつた。

「異國の方」とその聲はアラビア語で言つた。アラビア語とは言つても、アマハツガー人の話す言葉よりもずつと純粹な、ずつと古いアラビア語だつた。「異國の方、何故そんなに恐がりなさるのです？」私は内心ではびく／＼してゐたが、おもてにはそんな氣ぶりは毛ほども出してゐないと自惚れてゐたのだが、この問ひをきいて少し驚いた。私がどう答へようかとまごまごしてゐるうちに、カーテンがあげられて、脊の高い姿が私の前に立つた。私が姿と言つたのは身體も顔も、眞つ白な柔い薄紗にすつかり包まれてゐて、一目見たときは、屍衣をまとうた死人にそっくりだつたからである。しかし、私はどうしてそんな聯想が浮んで来たのか知らない。といふのは、このまとひ物は非常にうすくて、その下に桃色の肉體がはつきりとわかつたからである。それは、偶然か、或は多分わざとであらうと思ふが、着物のきこなしのせいでそんな聯想をしたのだらうと思ふ。いづれにしても私は、こんな幽靈のやうなものが現はれて来たので、一層恐ろしくなつて来た。そして、私の前にもものはたゞ者ではないといふことが確實になつて来たので、頭の髪が逆立つて来た。だけど、私は私の前に立つてゐる白衣をまとうた木乃伊のやうな姿は、脊の高い美しい女で、身體の凡ての部分に生れつきの美し

さをそなへてをり、私がこれまでに見た何者にも匹敵しがたい蛇のやうなしなやかさをもつてゐること  
とがはつきりとわかつた。彼女が手や足を動かすときには全身がうねるやうに見え、首を垂れるとき  
にも、うね／＼とまがつた。

「何故そんなに怖がりなさるのです？再」びやさしい聲がたづねた。その聲は、此の上なく柔かな音  
樂の旋律のやうに、私の心臓をひきずり出すやうな気がした。「妾に、男の人を怖がらせるやうなとこ  
ろがあるのですか？さうだとすると、今の男は、前とはずるぶん變つたのですね！」かう言ひなが  
ら、彼女は少し嬌態をつくりながら、うしろ向きになつて片腕をのばしたので、美しい腕はすつかり  
あらはになり、ふさ／＼とした漆黒の毛髪が、雪白の上衣の上をしなやかに垂れて、殆んど踵のとこ  
ろまでとゞいてゐるのが見えた。

「女王があんまり美しいので恐ろしくなつたのです」と、私は恭しく答へた。その實私はどう答へ  
てよいかわからなかつたのである。私がさう答へた時にまたもとの通りに平伏してゐたビラリが、  
「よしよし、でかしたぞ狒々！」とつぶやいてゐるのが聞えたやうに思つた。「男はまだ矢つ張り諷  
を言つて女を迷はすべを知つてゐるのですね」と彼女は笑ひながら答へた。その笑ひ聲は遠くの方  
で鈴を鳴らすやうに聞えた。「あなたは、妾の眼が、あなたの心をさがしてゐたから恐かつたのでせ  
う。それだからでせう。だけど妾は女ですから、その諷は堪忍してあげます。あなたは丁寧に仰言つ  
たからです。それで、あなたはどうしてこの洞窟住ひの人間の國へお出でなすつたのですか？この

沼の國へ、いやなものばかりの國へ、古い死人の無氣味な幽霊の國へ？何を見にいらずしやつたの  
ですの、何故あなたは全能の女王の手中にとびこんで命の安賣りをなさるのです？それに又どうし  
て私の話す言葉を知つておゐるのです？これは古い言葉ですよ。まだこのやうな言葉が使はれて  
ゐるのですか？御覽のとほり、妾は洞窟の中で、死人と一緒に住んでゐるので、世間のことはまる  
で知りもせず、又知らうともしなかつたのです。ねえ、見知らぬ方、妾は、妾の形見と、もに住ん  
來たのです。そして私の形見は、私の手で掘つた墓場の中にあるのです。」彼女の聲はふるへて、森の  
小鳥の聲のやうなやさしいしらべを帯びて來た。突然彼女の眼は、腹ばつてゐるビラリの姿の上に落  
ちた。すると彼女は急に氣をとりなほしたやうであつた。

「あゝ、老人、お前はそこにあるのね。一體どうして、お前の家族に問ちがひが起つたの？實際、  
妾の客人たちは非道い目におあひなさつたらしいね。そして、そのうちの一人は、もう少して「嬌  
童」で殺されてお前の子供等に食はれてしまふところだつたのだね。他の方も勇ましく戦ひなさらな  
んだら殺されてしまふところだつたのだ？妾にだつて一旦身體からはなれてしまつた生命をよびか  
へすことはできないのだよ。どうしたと言ふのだ？何が言ひ開きができるなら言つて見い。でない  
とお前を、妾の復讐執行人に引き渡しますよ。」

女の聲は怒りのために甲ばしつて、岩の壁に、冷たく澄み渡つて鳴り響いた。顔にまとうてゐるツ  
エールの奥で彼の女の眼がきら／＼と輝いてゐるやうに私は思つた。どんなことにも恐れるやうなこ

とのない人間だと思つてゐたビラリも、かはいさうに、彼女の言葉をきくと、恐怖のために眼に見え  
る程わななく、慄ひ出した。

「お、女王様、女王様！」と彼は白髯を地べたにつけたまゝで言つた。「偉大なる女王様、どうぞお  
なさけをおかけ下さいまし。わたしは昔も今も變りはない心からのあなたのしもべでございます。あ  
れは、決して決して、わたしのたくらんだことでもなければ、わたしのとがでもございませぬ。みん  
な、あのたちの悪いわたしの子供等のしわざでござります。女王様の客人のあの豚に嫌はれた女にそ  
そのかされて、奴等が、この土地の習慣にしたがひまして、女王様の客人の狒々や獅子と一緒にまゐ  
りました肥つちよの黒ん坊を食はうとしたのでござります。女王様から黒人については何のお達しも  
なかつたものでござりますから。ところが狒々と獅子とはそれを見て、その女を殺し、又その下僕を  
殺して恐ろしい燒壺から助けたのでござります。すると悪者どもは、血に饑ゑて狂氣になり、獅子と  
狒々と豚との咽喉をめぐけて跳びかゝつて來たのでござります。けれどもこの仁たちは勇ましく奴等  
と戦はれたのでござります。お、女王様！ あなたの客人たちはほんたうに勇敢に戦つて澤山の相手  
を殺して自分たちの命は全うしました。そこへ私がかつけまして、この人たちをお助け申し、悪者  
どもは、このコオルへ送つて、女王様のおさばきを受けさせることにいたしましたのでござります。」

「よろしい、そのことはもう知つてゐるよ老人、で明日は大廣間の席について、悪者どもの裁判をし  
ます。こはがらんでもよい。お前は許しがたいところだが、許してあげる。もつとよくお前の家族の  
監督をするがよいぞ。さあもう行きなさい！」  
ビラリは、びつくりするほど元氣よく起き直つて、腕き、三度お叩頭をした。そして白い髯を地に  
ひきずりながら、はひつて來た時と同じやうに四つん匍ひになつてうしろへさがり、遂にカーテンの  
むかうへ消えてしまつた。私は、この恐ろしい、それでて此の上なく心をひきつける女と二人つき  
りであとにのこされたので少なからず驚いた。

### 第十三章 アツシヤ面被をとる

「さあ、去つちまつた」と彼の女は言つた。「あの白い髯の老人のお馬鹿さんが！ でも人間といふも  
ものは一生かゝつて、ほんの少しばかりの知識しか得られないものですわね。水のやうに知識をかき  
集めるが、知識は又水のやうに指の間から逃げていつてしまふのですよ。でも手が、ほんの露で濡れ  
たほどでも濡れてゐると、馬鹿者どもがよつてたかつて、あの人は物識りだなんてはやし立てるので  
す。さうぢやありませんか？ ところであの連中はあなたを何とか言ひましたね？ 狒々なんて言ひ  
ましたね」と彼女は笑ひながら言つた。「でもそれがあの連中の習慣なんです。想像力が乏しいも  
んだから、すぐに自分等によく似た獸を聯想して、それを名前につけてしまふのです。あなたの國で  
は、あなたは何と仰言るのですか？」  
「ホリイと言はれてをりますよ、女王」と私は答へた。

「ホリイ」と彼女は言ひにくさうに言った。けれどもその調子には此の上ない魅力があつた。「でホリイといふのはどういふ意味なのです？」

「ホリイといふのは棘のある樹のことなんです」と私は答へた。

「さう、さう言へばあなたには棘がありますね。それでめて矢張り樹のやうですわ。あなたは強くて、醜いけれど、わたしの見るところが間違つてゐなければ、心の底は正直な、頼み甲斐のある方で、それに頭のある方ですわ。だが、ホリイ、そんなとこに立つてゐないで、こちらへはひつて妾のそばにかけなさい。妾は奴隷どものやうにあなたを四つん匍ひにさせたくはありません。妾はあの連中が妾を拜んだり恐れたりするのに飽きてゐるのです。で、時々氣に入らぬことがあると、妾は、なぐさみに奴等をすくめ殺して、死骸が心臓まで蒼ざめてしまふのを見てやることがあります。」かう言ひながら彼女は象牙のやうな手でカーテンをわきへやつて、私を通れるやうにした。

私はがた／＼慄へながら中へはひつた。この女は非常に恐ろしい女であつた。カーテンの内側には、十二呎に十呎ばかりの凹んだところがあつて、その中に一つの長椅子と一つのテーブルとおいてあつた。そしてテーブルの上には果物と水晶のやうな水とがあつた。そのそばには石をくりぬいてこしらへた聖水盤のやうな容器があつて、それには清らかな水がなみ／＼とはひつてゐた。あたりは柔かなランプの光で照され、空氣にもカーテンにもえならぬ芳香がたゞよつてゐた。そして、女王のつや／＼した毛髪や、身にまとうてゐる白衣からも芳香が發してゐるやうに思はれた。

私はその小さい室の中へはひつて、びく／＼しながらそこに立つた。

「かけなさい」と彼女は長椅子を指さしながら言つた。「まだあなたは怖れる理由はありませんわ。若し怖がる理由があるとすれば、妾はすぐに殺してしまひますから、矢張り長く恐がらなくてもよいのですわ。ですから、まあ安心していらつしやい。」

私は水盤の近くの長椅子の脚許に坐つた。女王は長椅子の別の端にゆつたりと身を沈めた。

「さて、ホリイ」と彼女は言つた。「あなたはどうしてアラビア語が話せるやうになつたのです？ アラビア語は妾の大好きなつかしい言葉です。といふのは妾はアラビア生れなのです。半樺のアラビヤ人なのです。ヤーマン地方の美しい舊都オザールの生れで、カータンの子ヤラブの一族なのです。でもあなたのお言葉には妾のきゝたいハミヤル族の言葉のやうな床しい響きはありませんわね。それに或る言葉は變化してゐますわ。ちやうどこのアマハツガー人の使つてゐる言葉のやうに。アマハツガー人はアラビア語をすっかり下品なものにしてしまつてゐるので、あの連中が口をきく時には、妾はまるで他國の言葉を話してゐるやうな氣がするのですよ。」

「私は自分で勉強したのです」と私は答へた。「すゑん長い間勉強しました。でもアラビヤ語は今でも埃及やその他の國で使はれてはゐますけれど。」

「またアラビア語は使はれてゐるんですか？ それに埃及はまだあるのですか？ 今の埃及の國王は誰ですか？ 矢張り波斯人の子ですか？」

「波斯人はもう二千年も前に埃及を去りました。その後トレミイ人や羅馬人や其の他いろくな民族がニール河を支配してゐましたが、みんな盛りを過ぎて滅びてしまひました。」と私は呆れながら言つた。「でも女王はどうして波斯のアルタクセルクセスのことを御存じなのですか？」

彼女は笑つて何とも答へなかつた。また私はぞつとして全身が凍るやうな氣がした。

「それから希臘ですね」と彼女は言つた。「希臘はまだありますの？ あゝ妾は希臘人が好きですわ。あの時分の希臘人は美しくて賢こかつた。けれども、心の中は、移り氣なくせに、荒つぽいところがありましたけれどね。」

「さうです」と私は答へた。「希臘はまだあります。そして希臘の國もできてゐます。けれども今の希臘人は昔の希臘人とはちがひますし、希臘の國だつて、昔の希臘と比べてはお話になりません。」

「では、ヘブライ人はまだエルサレムにゐますの？ そして賢王の建てた寺はまだ立つてゐますか？ヘブライ人はどんな神を拜んでゐるのでせう？ヘブライ人が仰山に説教したり豫言したりしてゐたメシアは來ましたの？そしてそのメシアは地上を支配してゐますか？」

「猶太人はちりちりになつて滅びてしまひました。そしてその破片は世界ぢうに散らばつてゐます。それからエルサレムはもうありません。ヘロド王の建てた寺は——」

「ヘロド王ですつて」と彼女は言つた。「私は、そんな人は存じませんよ。だがまあ次を話して御覽なさい。」

「羅馬人が焼いてしまひました。そして羅馬の鷲はその廢墟の上を翔んで行つて、今では猶太は沙漠になつてゐます。」

「さうく、羅馬人は偉大な國民だつた。そして、運命の神のやうに、いや彼等の鷲が餌に向つてとぶときのやうに、眞つ直ぐに最後の滅亡につき進んで行つた！そしてあとには平和をのこしていつたのですわね。」

「孤獨をつくつて平和と呼ぶですかね」と私はラテン語で言つた。

「まあ、あなたはラテン語もお話しなされるのですね」と彼女は吃驚して言つた。「随分長く聞かなかつたので、ラテン語は妙に妾の耳に響きますわ。それにあなたの話は、羅馬人の話の様に語尾が下りませんね。今あなたが仰言つた文句は誰が書いたのです？私はその文句は知りませんけれど、あの偉大な國民をよく穿つてゐますわ。どうやらあなたは物識らしいですね。希臘語もおできになるの？」

「え、それにヘブライ語も少しはできます、よく話はできませんけれど、こんな言葉は今みんな死語なんです。」

彼女は子供のやうによるこんで手を打つた。「全くあなたは醜い樹だけれど、その樹には智慧の實があつてゐることね。ねえホイリさん」と彼女は言つた。「だけど、猶太人は、妾が彼等に學問を教へると異人だとか異教徒だとか言つたから妾はきらひですが、あの猶太人どものメシアは來ましたか、そして世界を支配してゐますか？」



「メシアは來ました」と私は恭々しく答へた。「けれども貧しい賤しい姿で來たものですから、猶太人は、このメシアを歓迎しないで、却つて迫害して十字架にかけました。けれどもメシアは神の子ですから、その言葉と事業とは今だに生きのこつて世界の半分を支配してゐます。尤も地上の國を支配してゐるのではありませんか。」

「あゝ、實に兇暴な狼どもだ」と彼女は言つた。「多くの神を信じ、利慾には眼がなく、徒黨をくんで争ひあつてゐるあいつ等の黒い顔が今でも見えるやうな氣がする。では、彼等は彼等のメシアを十字架に架けたのですか？ さうでせう、妾にもそれは信じられますわ。メシアがほんたうに生ける精靈の子だつて彼等には何でもなかつたでせう。そのことは後で話させう。彼等は、傲然として威張つて來なければ神だとは思はんですわ。エホバを拜むかと思へばパールを拜み、アストレトを拜むかと思へば埃及の神々に手を合せるといふ風で、利慾のためにはどんなことでもする奴等です。さうですか、奴等はメシアが卑しい服装をして來たといふので十字架にかけたのですか、そして今は世界の各地にちり／＼ばら／＼になつてゐるのですか。さう言へば猶太の或る豫言者がそんなことを言つたのをおぼえてゐますわ。だが、猶太人のことなどは妾はどうでもいゝ。抑も妾の心を傷つけて、ひがませて、妾をこんな處へ追ひやつたのは奴等の爲業ですもの。奴等は妾がエルサレムで學問を教へてゐたときに、妾に石を投げましたよ。寺の門の前でね。白い鬚を生じた猶太の偽善者や學者どもが人々をけしかけて妾に石を投げさせたのです。御覽なさい。まだその傷痕がのこつてゐますわ！」

かう言ひながら、突然彼女は紗の被布をめぐつて、腕を出し、ミルク色の美しい肌のにこつてゐる赤い傷痕を指して見せた。

私は恐ろしさにうしろへ身を退いた。

「失禮ですが、女王」と私は言つた。「猶太の救世主がゴルゴタで十字架をになはれてからもうかれこれ三千年もたつてゐます。それなのに、まだ救世主のゐない前に貴女が猶太人に學問を教へたといふのはどういふわけなのです？ 貴女は御婦人です。精靈ではありません。その女がどうして二千年も生きられるのですか？ 貴女は私を馬鹿にしてゐなされるのですか？」

彼女は長椅子にもたれた。私はまた彼女のかくれた眼が私の心を探してゐるのを感じた。

「あなた」と彼女は非常にゆつくりと用心ぶかく言つた。「この地上には、まだあなたがよくお知りにならぬ秘密がのこつてゐるやうですね。あなたはまだあの猶太人が信じてゐたやうに、生れた者は皆死ぬと信じていらつしやるのですか？ 何だつて死にやしませんよ。そりや變化といふことはありませんけれど、死といふことはないのです。御覽なさい」と言ひながら彼女は岩の壁に彫つてゐる彫刻を指した。「この彫刻を彫つた人種の最後の一人が疫病のために斃れてから、二千年の三倍もたつてゐるのですが、この人たちは死んでゐるませんよ。今でも生きてゐます。これによるとこの人達の靈は、現在こゝへ來てゐるのかも知れません。」と言ひながら彼女をちらりとあたりを見廻した。「妾の眼にはさういふまゝとそれが見えるやうですよ。」

「ですけれども、此の世では死んでゐるのでせう？」

「さうです、一時はね。だけど、此の世へも何遍も生れかはつてゐるのです。妾は、この妾、アッシヤは——妾を愛してゐた人が生れかはつて来るのをこゝに待つてゐるのです。妾は、その人が妾を見つくるまで此處にゐるのです。その人が妾に會釋をする場所はこゝより外にはないのです。妾のやうな全能のものが、幾度びも詩人たちに誦はれた希臘の女神ヘレンよりも美しく、賢者ソロモンの智慧にもまさる深く廣い智慧をもつてゐる妾が、地上の祕密を知り、その富を知り、凡ての物を妾の役に立つやうにかへることのできる妾が、そして暫くの間なら、あなた方が死と呼んでゐる變化にさへも打ち勝つことのできる妾が、こんなところで、畜生にも劣る野蠻人を相手に暮してゐるのは何のためだとあなたはお考へですか？」

「私にはわかりません」と私はへり下つて答へた。

「それは妾が戀人を待つてゐるからなのです。妾の生涯はことによると邪惡なものであつたかも知れません。それは妾は知りません、何が惡で何が善だといふやうなことは誰にだつてわかりはしませんからね、ところで妾は時が來なければ死ぬことはできないのですけれど、たとひ死ぬことができたとしても死んであの人に會ひにゆくのは心配なのです。といふわけは、妾とあの人との間に妾にはよぢ上れないやうな障壁ができてゐるかも知れないからですわ。それに澤山の星が永劫に飛びかうてゐる大無廣變な空間の中で、道に迷ふ心配もあります。けれども、いつかは、——五千年もさきのことか或

は明日のことかも知れませんが——妾の戀人が生れかはつて、どんな人間の巧案した掟よりも強い掟に従つて、こゝで、昔妾たちが接吻をしたこゝで、妾を見つけ出す日が來るに相違ありません。妾は以前にあの人に罪を犯したけれども、あの人のはきはきつと妾に對して柔らぐにきまつてゐます。あの人にはもう妾を見覚えてゐないかも知れませんが、それでも妾を愛するにきまつてゐます。妾の美しさのためだけでも妾を愛するにきまつてゐます。」

しばしの間私は呆氣にとられて答へもできなかつた。あまり途方もない話なので、私の理知はそれをつかむことができなかったのだ。

「でも女王」と私はたうとう口を開いた。「たとひ吾々は幾度も生れかはつて來るとしても、貴女はさうではないでせう、若しあなたのお話がほんたうなら？」この時彼女の見えない眼がまた鋭く輝いたのを私は見た。「貴女はまだ死んだことではないのでせう。」と私は急いでつゞけて言つた。

「さうです」と彼女は言つた。「といふわけは、半分は偶然のおかげで、半分は研究のおかげで、妾は世界の最大の祕密の一つを解いたからです。いゝですか、生命といふものはあるのですよ。して見れば、その生命をしばらくの間長びかすことができないうわけがありますか？ 生命を歴史で一万年とか二万年とか五万年とかいふでせう？ 一万年くらゐたつたつて、雨や風のために、山の高さは餘りかはりはありませんわね。二千年の間に、この洞窟は少しも變りませんでしたよ。變つたのは獸と獸と同じやうな人間とだけです。生命こそは不思議なものです。しかし生命を少し長びかす位の事は不思

識でも何でもありませんわ。自然には、自然の子である人間にと同じやうに物を活かす精氣があるのです。この精氣を發見して、それを自分に通はせることまでできれば、その人は自然の生命と、もに生きることができなのです。尤もその人も永久に生きることにはできません。自然の生命も永久ではないのですからね。自然も亦死なねばならぬのです。月の自然が死んでしまつたやうにですね。尤も自然は死ぬといふよりも變化するといつた方がよいでせう。自然もまた生れかかつてきて生きるのですからね。では自然が何時死ぬか？ といふと、それはまだ中々だと思ひますわ。そして自然の祕密をすつかり知つてゐる人は、自然が生きてゐる限り生きて居られるのです。妾はまだ自然の祕密をすつかり知つてはゐませんが、いくらかは知つてゐます。多分これまでにこの世界にすんでゐた誰よりも多く知つてゐるかも知れません。ところで、この事は、あなたには大きな祕密であるに相違ありませんわね。ですからいまそれをお話してあなたを驚かすのはやめませう。若し氣が向いたら、もう少しはしく話してあげるかも知れませんが、まあ多分この事は二度とお話ししないでせう。あなたは、妾がどうしてあなたの方がこの國へおいでになつたのを知つて、あなたの方が壺で顔を焼かれるのを助けてあげたか不思議に思つていらつしやるでせう？」

「不思議です」と私は力なく答へた。

「ではあの水を御覽なさい。」かう言ひながら彼女は例の水盤を指し、その上へ身を屈めて手をかざした。

私は起ち上つて水面を見つめた。すると忽ち水面は暗くなつたが、再び澄み渡つて来て、その中には、吾々のボートが、あの恐ろしい運河に浮んでゐる光景がはつきりと見えた。レオはその中に横はつて蚊をよけるために上着を頭からすつぽりかぶつて眠つてゐた。私と、ジヨップとマホメッドとは岸でボートを曳いてゐた。

私は慄然として身を退き、これは魔法だと叫んだ。實際、私が見たのは實際にあつた通りのことであつた。微細な點にわたるまですつかりそのまゝだつたのである。

「いゝ、さ、ホリイさん」と彼女は答へた。「これは魔法ぢやありませんよ。魔法なんては愚人の夢です。魔法なんていふものはありません。この水は妾の鏡です。妾は時々過去のことをよび起して見たいと思ふとこの水の中にそれが映るのです。この國のことや、妾の知つてゐることや、あなたの知つてゐることなら何でも映して見せてあげませう。若しおのぞみなら、誰かの顔のことを考へて御覽なさい。さうすると、その顔があなたの心からこの水に反射して映つて見えますから。妾にはまだ祕密がすつかりわからぬので、未來のことは何もわかりません。アラビヤや埃及の魔法使はずつと前にそれを知つてゐたといふことですが。まあそんなわけで、妾は或る日のこと、二十年前に一度船で通つたことのある、あの古い運河のことを思ひ出して、その様子を見ようと思つたのです。すると運河に一隻のボートが浮んでゐて、三人の男は岸を歩いてをり、一人若い男がボートの中に眠つてゐるのが見えたのです。眠つてゐる人の顔はわかりませんでした。何でも人品卑しからぬ若者のやうに思は

れました。ですから私は人をやつて助けさせたのです。ところで、もうこれでお別れにしませうね。だが、ちよつとお待ちなさい。あの若い人のことをきかして下さい。ピラリが獅子と言つた人のことを。妾はあの人を見たいのですが、あの方は病氣なのださうですね。熱病で、それに負傷をしてあらつしやるといふことですね？—

「ひどい重態なんです」と私は悲しげに答へた。「女王、いろ／＼なことを知つてをられるあなたに、あれの病氣はどうにもならんでせうか？—

「それはなりません。妾は癒してあげることができません。だが、あなたはどうしてもそんなに悲しさに仰言るのです。あの若者を愛していらつしやるのですか？ 若しかしたらあなたの御子さんなのですか？—」

「あれは私の養子なのです。あの子をあなたの前へつれて参りませうか？—」

「いやそれには及びません。發病してから一體何日になりますか？—」

「今日で三日目です。」

「では、もう一日寝かしておきなさい。さうすればあの方はことによると自分で病氣を追ひ拂ふことができるかも知れん。その方が妾が癒してあげるよりよいのです。妾の療法は、生命の城砦を揺るがすやうな療法ですからね。でも明日の晩の、發病した時刻までによくならか、らなかつたら、妾があの方のそばへ行つて治してあげます。一寸お待ち、誰があの方を看護してゐるのですか？—」

「私どもがつれて来た白人の召使です。ピラリ老人が豚と言つた奴です、それから」とこゝまで言つた時に、私はちよつとためらつてから言葉をつづけた。「アステーンといふ女も介抱してくれてあります。この國の大層きれいな女です。この女ははじめてあの子を見たときに、あの子のそばへ寄つて来て、あの子を抱擁し、それからずつとあの子のそばについてゐるのです。これは女王の人民の習慣なのださうですね。」

「妾の人民です！ 妾に向つて、妾の人民だなんて言はないで下さい。」と彼女は大急ぎで答へた。

「この奴隷どもは決して妾の人民ぢやありません。奴等は妾がゆるしてやつてゐる間だけ妾の命令することをしてゐる犬です。あいつ等の習慣なんて、妾には何もか、はりはないのです。それから、妾を女王なんて言はないで下さいね。私はおべつかを言はれたり、尊稱で呼ばれたりするのに飽きてゐるのです。妾をアツシヤと言つて下さい。この名は妾の耳に快よく響きます。それは過去の反響です。そのアステーンとやらいふ女は妾は知らないが、ことによると、あの女かも知れない。妾にその女を警戒せよと言つた者がある。そして妾もその女に警告をしておいた。その女かも知れない。その女は、——一寸お待ちなさい、見て見ませう。」かう言ひながら彼女は前へ屈んで、水盤の上へ手をかざして、ちつとその中を見つめてゐた。

「ちよつと」と彼女は静かに言つた。「これがその女ですか？」

私は水の中をのぞきこんだ。すると、静かな水の面にアステーンのきりつとした横顔が映つてゐ

た。彼女は前こゝみになつてゐたが、その容貌は無限のやさしさをこめ、栗色の捲毛を右の肩に垂らして何か下の方をちつと見てゐた。

「この女です」と私は低聲で言つた。又もや私はこの竝々ならぬ光景にすつかり度膽を抜かれてしまつたのである。「この女がレオの眠つてゐるのをみてゐてくれてゐるのです。」

「レオです」とアツシヤは氣の抜けた聲で言つた。「レオといへばラテン語で獅子のことだ。あの老人もこれだけはうまい名前をつけたもんだ。妙なことがあるものだ」と彼女は獨言をつづけた。「實に妙だ、ことによると——だがそんなことは有り得ない！」

彼女がいら／＼した手つきで又水の上へ手をかざすと、水の面は暗くなつて、そこに映つてゐた像は、それが現はれた時と同じやうに、音もなく、不思議に消えてゆき、再びランプの光が、おだやかな、澄み渡つた生きた鏡の面を照した。

「ホリイさん、行く前に私に何かのごみはありませんか？」と彼女はしばらく考へた後で言つた。「あなたはこのからこ、で随分ひどい生活をしなければなりませんわ。この住民は皆野蠻人で、文明人の習慣は少しも知つてゐません。妾は別段そのために困つてはゐませんが」と言ひながら彼女は小さいテーブルの上の果物を指した。「妾の口を通るものは果物だけですのよ。果物と麥料でこしらへた菓子と、少しばかりの水とだけです。妾はあの娘たちに貴方の御用をするやうに言ひつけておきました、御承知のとほりあの娘たちは髯で唾ですから、あの娘たちの聲色や手眞似をよむことので

きない者には一番安全です。妾はあんな風に仕上げるのに何百年もかゝりましたのよ。やつと成功したと思つとその娘があまり醜い子だつたので殺してしまつたりしたこともありました。ところで何か妾にお希みはありませんか？」

「さうですね、一つだけありますよ、アツシヤ」と私は大膽に言つた。併し他目には私が思つてゐる程大膽には見えなかつたやうな氣がした。「私はあなたのお顔が見たいのです。」

彼女は鈴のやうな響のある聲で笑ひ出した。そして「よく考へなさい、ホリイ」と答へた。「あなたは希臘の神々の傳説を知つてをられるやうですが、アクテオンといふ神は、あまり美しいものを見たために、無殘にも身を滅ぼしてしまつたでせう？ 妾があなたに顔を見せたら、もしかするとあなたも同じやうに身を滅ぼしなされるかも知れませんよ。抑へても抑へても抑へきれぬ慾情のために生命を蝕むやうなことになるかも知れませんよ。い、ですか、言つておきますが、妾はあなたのもものではありませぬよ、誰のものでもないのです。ただ、かつてこの世にゐた人で、まだ此の世へ出て來ないやつた一人の人の女ですよ。」

「ところがアツシヤ、私はあなたの美しさなどは恐れはしませんよ、女の美しさなんてものは、花のやうに儚なく過ぎ去つてゆくものです。そんな下らないものを私の心は見向きはしないのです。」

「あなたの言ふことは間違ひです」と彼女は言つた。「女の美しさは過ぎ去つてしまふものではありませぬ。妾の美しさは妾の生きてゐる限りつゞくのです。でも、どうしても我を通したいなら、通しな

さるがい、けれども埃及の調馬師が小馬を御するやうに、あなたの情慾が理性を御して、あなたが行きたくもないところへつれて行つたからつて、妾をたがめてはなりませんよ。妾の顔を一度見たら、それで病みつきにならない人はないのです。ですから妾はこゝの野蠻人にすら顔を見せないのです。でないといついうるさくなつて、彼等を殺さねばならぬやうになりますからね。それでもあなたは御覽になりますか？」

「是非見せて欲しいです」と私は答へた。私はどうしても好奇心を抑へる事ができなかったのである。彼女は白い丸味のある、これまで私が見たことのないやうな兩の腕をあげて、ごくゆつくりと毛髪の下のところのとめ金を抜いた。すると突然、長い、屍衣のやうな覆ひ物がするくくと彼女の身體から地上へ送り落ちた。私の視線は彼女の姿に注がれた。彼女の身體には、びつたりと密着した白衣がまとはれてゐるだけで、それは、生命以上の生命と、人間以上の、一種蛇のやうな艶麗さをもつて、ふくよかな、壓倒するやうな肉體美を見せるに役立つだけであつた。小さい足には金鍔でとめた雪駄を穿いてゐた。踝の美しさは、彫刻家などの夢想を超絶した完全なものであつた。腰のまはりの白い肌着は純金の二頭の蛇のとめ金でとめてあつた。そしてその上へ、美しい清らかな輪郭をふかいて彼女の身體がふくれ上つて居り、肌着は雪白の胸のところでおはつてゐた。そしてその胸のところでは彼女が兩手を組んでゐた。私はそれから尙ほも上の方へ視線をはこんで、彼女の顔を見た。私は大袈裟なことを言ふわけではないが、まつたく、眼が眩んで、驚歎して思はず身を退いた。私は天女の美

しさを噂さには聞いたことがあるが、今それを見たのだ。たゞこの美しさは、えも言はれぬ愛らしさと、純潔さともか、はらず惡の美しさであつた。といふよりもむしろ、その時には、私はさういふ印象を受けた。どうしてそれを言ひあらはしたのか、私には言ひ表はせない。たゞもう言ひ表はせないのだ。私の見た感じを筆で書きあらはすことのできるやうな人は此の世にはない。此の上なく黒い、柔かな、絶えまなく動いてゐる眼のことや、ほんのりと櫻色を帯びた顔のことや、高い高貴な顔のことや、その上にふさふさくと垂れ下つてゐる髪のことや、繊細な、ひきしまつた顔のことなら言へるかも知れん。これ等のものもなる程美しい。何物にも増して美しい。けれども彼女の美しさはそんなところにあるのではないのだ。それは生きて御光のやうに、彼女の晴々とした顔から發出してゐる何とも名狀のできない神々しさにあるのだ。私の前にたつてゐる顔は三十を越さぬ若い女の、完全に健かな、熟しきつた美しさがはじめて外へあらはれたばかりの顔であつたが、それでゐて、名狀すべからざる世故の辛酸をなめ、悲しみも情慾も味はひつくしたあとがまきれもなく刻まれてゐるのだ。口のまはりの脛に徐々にうかんで來る微笑も、この罪と悲しみとの影をかくすことはできなかった。それは、輝く眼の光りにも、堂々たる態度にもあらはれてゐて、まるで「妾を見なさい、世の中のだの女にも増して美しいけれども、妾は年々歳々過ぎし日の思ひ出に惱まされ、情慾にかられ、邪しきなことをしたために苦しんでゐるのです。そして贖罪の日が來るまでは、いつまでもいつまでも、邪惡と悲痛とを重ねてゆくのです」とでも言つてゐるやうに思はれた。

磁力にでも吸ひ寄せられるやうに、どうしても抵抗することができない力で私の眼は彼女のきらきらと光る雙の眼に吸ひ寄せられていった。すると彼女の眼から私の身體へ電流が傳はつたやうな気がして、私はどきまきして眼がくらんで來た。

彼女は、えならぬ音楽のやうな聲で笑ひながら、勝ち誇れるヴィーナスにもふさはしい、崇高な媚を含んだ様子で、私を見てうなづいた。

「向う見ずな人？」と彼女は言つた。「あなたはアクテオンのやうにのぞみをかなへなかつたが、アクテオンのやうにみじめに身を滅ぼさないやうに用心しなさい。あなたの心の中の煩惱の犬に身を咬み碎かれないやうに用心しなさい。妾もたつた一人の人にしか心を動かさない處女の女神ですよ。しかもその人といふのはあなたではないのですよ。どうです、もう十分御覽になりました？」

「私はあまり美しいものを見たので眼がくらんで來ました。」と、嗚聲で言ひながら私は手をあげて兩の眼をおほふた。

「だから言はないこつちやありませんか。美は電光のやうなものです。美しいけれども、破壊力をもつてゐます。特に樹は危険ですよ、ホリイさん。かういひながら彼女はまたうなづいて笑つた。

こゝでアツシヤは、ばつたり話をやめた。私が指の隙間から見ると彼女の顔は酷く變つて來た。大きな眼は急にちつと据つて來て、恐怖が、暗い魂の底から湧き起つて來た何かたゞならぬ希望と争闘してゐるやうな表情を帯びて來た。美しい顔は硬ばつて來て、柳のやうにしなやかな姿はびんと伸びてしまつたやうに思はれた。

「おやー」と彼女は將に獲物に向つて跳びかゝらんとする蛇のやうに頭をうしろへひいて、半ば嘔くやうに、半ば吐くやうに言つた。「その手にはめてある甲蟲形寶石はどこで手に入れなかつた？ 言ひなさい。でないと、生命の精氣によつてその場であなを打ち殺してしまひますぞ！」かう言ひながら彼女は心持ち私の方へにちり寄せた。彼女の眼はその間も爛々と焰のやうに輝いてゐたので、私は恐ろしさに打たれて地べたに倒れながら、何かしどころもどろに言つた。

「靜かに！」と急に彼女は様子をかへて、以前のやうなやさしい調子になつて言つた。「妾はあなたを吃驚させましたわね。勘辨して下さい。だがね、ホリイさん。殆ど無限の心は、時々、有限な心のろまさ加減にたまらなくなつて、つい癩癩をおこしたくなるのです。もう少しでああなたの命はなくなるころでしたよ。だが、私は思ひ出しました。ところで、その甲蟲形寶石は？」

「拾つたんです」と私はまた立ち上りながら、力なくつて吃つて言つた。あまりに氣が顛倒してしまつたので、私はその時は、この甲蟲形寶石のことについては、たゞそれをレオの洞窟で拾つたことだけしか思ひ出すことができなかったのである。

「随分妙ですね」と彼女は、いかめしい女にも似ず、急に女らしく身を慄はして、そはくしながら言つた。「妾も前にそのやうな形をした甲蟲形寶石を知つてゐたのですよ。それは妾の戀人が首にかけてゐたのです。」かう言つて彼女は少しばかりすゝり泣いた。私はそれを見て、この女も非常に年をと

つてゐるかは知れんけれど、要するにたゞの女だといふことがわかつた。  
「して見ると」と彼女は言葉を續けた。「あの寶石は對のものだつたに相違ないが、妾はこれまで一つしか見たことがないので。何しろあの寶石は由緒附のもので、もつてゐる人は随分珍重したものですからね。だけど妾の見たのは、こんなに指環に嵌てはなかつたのです。さあ、ホリイ、もう行きなさい、行きなさい。そしてできるなら、アッシヤの美しさを見たあなたの愚かしさを忘れるやうにしなければ」そして彼女は、私から身をそむけて、長椅子によりかゝり、クッションの中に顔を埋めた。  
私は彼女の前から、よろ／＼しながら引き退つた。どうして私の洞窟まで歸つて來たのか私はおぼえてゐない。

#### 第十四章 地獄の精

私が床の上に身を投げて、散り／＼になつた心をかき集めて、見たり聞いたりしたことを思ひかへしはじめたのは夜の十時近くであつた。併し、考へれば考へる程私は何が何やらわからなくなつた。私は氣が狂つてゐたのだらうか、酔つ拂つてゐたのだらうか。それとも夢を見てゐたのだらうか。或はまたすばらしい大きなてんに一ぱいかつがれてゐたに過ぎんのだらうか？ 私のやうな理性のある、吾々の歴史の主要な科學的事實にも通じてをり、歐羅巴で超自然と言はれてゐる魔術などを絶對に信じない人間が、たつた今、二千年も生きてゐた女と話をしてゐたことを信ずることができたなんていふことがどうしてほんとうと思へよう。全く、これは人類の經驗と矛盾してゐる。絶對に不可能なことだ。それにあの女の此の世のものとも思はれぬ美しさはどうだ。あんな美しい姿を見て迷はぬ男は絶對にないだらう。私のやうに、その方の道にかけては、女嫌ひとしてとほつてゐる男でも、恐しいには恐しいが、あの女の幻を追ひ拂ふことはできなかつたのだ。その悪魔のやうなおそろしさが、却つて私の心を惹きつけたのだ。いゝ年をして今更らあんな女に戀を感じるなんて、馬鹿げてゐる。馬鹿げてゐる。あの女は私に警告した。それを私はきかなんだのだ。そしてあの女のヴェールを脱がせたのだ。何といふことだらう。

私は何かしなくては氣が狂つてしまひさうな氣がしたので、髪をかきむしりながら長椅子から跳び上つた。それに女王が甲蟲形寶石について言つたことは一體何のことだらう？ あれはレオのもので、二十一年程前に、ヴェインシイが私の室にのこしていつた箱の中にあつたのだ。するとあの話は結局ほんたうなのだらうか？ 壺の破片に書いてあつた文字も贋物ではなかつたのだらうか？ さうだとすると、あの女が待つてゐたのは、死んだ戀人の生れ代つて來るのを待つてゐたのは、つまりレオのことだらうか？ そんなことは有り得ない！ そんな想像は正氣の沙汰ぢやない！ 人間が生れ代

るなんていふ話がどこにあるものか？  
だが二千年も生きてゐる女があり得るとすれば、そのことだつて有り得るかも知れん。さうなればどんなことだつて有り得るわけだ。現にこの私だつて、誰かの生れ代りで自分の前身をも忘れてしま



つてあるのかも知れん。私はこの馬鹿げた考へに思はず笑ひ出して、岩の壁に彫つてある、氣むづかしい顔をした古代の戦士の彫刻に向つて大きな聲で呼びかけた。「なあ、大將、ことによると君と僕とは同じ時代に住んでゐたのかも知れんぜ。もしかすると、君が僕で、僕が君なのかも知れんぢやないか。」かう言ひながら私はまた笑つた。すると私の笑ひ聲は陰氣な洞窟の中にまるで、その戦士の亡靈が答へたかのやうに反響した。

それから、私はレオの様子を見にゆくのを忘れてゐたことに氣がついて、私のそばにともしてあつたランプを一つとつて、靴を脱いで彼の寢室にあてられた洞窟の方へそつと出て行つた。夜の風が、彼の室のカーテンをしづかになぶつてゐるのが、まるで眼に見えぬ靈のしわざであるかのやうに思はれた。私はこつそり、窖のやうな室の中へしのびこんで四邊を見廻した。ランプの明りで見るとレオは長椅子の上に横はつて、熱のために、しきりに身悶えしてはゐたが、眠つてゐた。彼のそばには、半身を床の上に投げ出し、半身を石の長椅子にもたせかけて、アステーンがゐた。彼女は片手でレオの手を握つてゐたが、彼女の方も矢張りうと／＼まどろんでゐた。それはまことに愛すべき、といふよりもむしろ哀切な一幅の畫面であつた。かはいさうに、彼の頬は赤く燃え、眼の下には黒い隈がつき、息をするのも大儀さうであつた。彼の病氣はひどく悪いのだ。私は、またレオが死んで私一人此の世にのこされるんぢやなからうかといふ恐ろしい恐怖に打たれた。しかも、生きてをれば彼はアッシヤに對して私の戀仇になるらしい。たとひあの女の待つてゐる戀人といふのレオではないにしても、この醜い中年の男の私と、若い美男のレオとちや、まるで私の方に勝ち味はない。だが、有り難いことには私の正義感はまだ死んでしまつてはゐなかつた。女王はまだそれを殺してしまひはしなかつた。で私はその場に立つたまま、私の子供、否子供以上のものが、たとひ女王の待つてゐる男であるとしても、生命に別條のないやうにと心から天に祈つた。

それから、私は行くときと同じやうにこつそりと引き返して來た。それでも私はまだ眠ることはできなかつた。レオが重態でゐた姿を見たり、そのことを考へだしたりしたのは却つて、私の不安を益々募らせるばかりであつた。身體はぐたく／＼に疲れ、頭は無暗に昂奮して、想像力ばかりが、不自然に逞ましくなつて來る。いろ／＼な考へ、いろ／＼な幻影、いろ／＼な靈感が、驚くほどはつきりと浮んで來る。大抵怪奇なものばかりで、中には氣味の悪いのもあれば、中には、數年來、過去の生活の滓の中に埋もれてゐた考へや感覺を喚び起すものもある。だがそれ等凡ての背後に、上に、あの恐ろしい女の姿がつきまとひ、あの得も言はれぬ蠱惑的な美しさの思ひ出が、それ等凡ての中から輝き出て來るのである。私は洞窟の中をあちこち歩き廻つた。

突然私は、それまで氣のつかなかつたものを見つけた。岩の壁に一つの狭い孔があるのだ。私は燭臺をとり上げて、それをしらべて見た。穴の先は通路になつてゐた。かうした場合に、自分の寢てゐる室に、何處へ通ずるとも知れぬ通路が開いてゐるのを見出すのは、誰だつてあまり氣持のよいものではない。通路があるとすれば人が通ることも出来る。眠つてゐる間に通ることも出来るわけだ。

私はその通路が何處へ通じてゐるのか知りたのが半分と、何かしなければちつとしてゐられない不安が半分とでこの通路へはひつて行つた。通路の先には階段があつて、その階段を降りて行くとまた通路になつてゐた。通路といふよりもトンネルと言つた方がよいかも知れぬ。何でも私の判断では、このトンネルは、私たちの室へはひる廊下の真下を通つて、中央の大岩窟を横断してゐるらしい。私はずん／＼歩いて行つた。あたりは墓場のやうにしんとしてゐたが、私は何とも名状しがたい感じといはうか誘惑といはうか、兎に角何物かにひきずられて、進んで行つた。靴下だけ穿いた私の足は、滑がの岩の床の上へ音もなく降りて行つた。五十碼も歩いたと思ふ頃、もとの道と直角に交つてゐる第三の通路へ出た。そこで大變なことが起つてしまつた。強い風がさつと吹いて来て、私のもつてゐた手燭の灯を消してしまつたのだ。私はこの不思議な眞つ暮な岩の腸の中に一人でのこされてしまつたのである。私は直角になつた通路へ二歩ばかり踏みこんで立ちどまつた。若し途中で迷ひ兒になつたら愈々大變だと思つたのである。どうしたらよいであらう。私は燐寸をもつてゐない。眞暗な長い道をあへとへ引き返すのは大變だし、さうかといつて一晩その場に立ちつくしてゐるわけにもゆかぬ。それに一晩立ちつくしてゐたところで、恐らく何にもならぬだらう。岩窟の中のトンネルの中では眞晝だつて眞夜中だつて同じやうに眞つ暗に相違ない。私はうしろを振り返つて見た。何も見えなければ何の物音もしない。前の闇をすかして見た。するとたしかに、ずつと向うの方に、かすかな火の燃えてゐるやうな光が見えた。あそこまで行けば明りが手にはひるだらう。兎に角しらべて見なくてはならぬ。私はゆつ／＼と、非常に骨を折つて、手を壁にあて、穴にでも落ちては大變だと思つて一歩ごとに足で地面をさぐつて歩いて行つた。三十歩ばかり行くとカーテンの隙間から明滅してゐる明りが洩れて見えた。五十歩行くと、もうすぐ明りのそばへ來た。六十歩進んだ、やれ／＼、私はほつとした。

すぐ鼻の先にカーテンがかゝつてゐるのだ。カーテンには隙間ができてゐたので、私は、その向うにある小さな洞窟をはつきり見ることができた。それは墓場のやうで、中央に燃えてゐる焚火で照されてゐた。焚火の焰の色は白つぼくて煙は上つてゐなかつた。左手には三時かそこの高さの小さい縁のついた石の棚があつて、その上には屍體らしいものがのせて、何か白いものがかけてあつた。右にも同じやうな棚があつて、その上には、刺繍をした被覆が散らばつてゐた。そして一人の女の姿が、火の上へ身を屈めてちら／＼する焰を見つめてゐた。女は私の方から見ると横向きになつて、屍體の方へ向いて跪づいた。身には、黒い被布をまとひ、ちようど尼僧の外套のやうにすつぽりと全身をつゝんでゐた。私がどうしようかと思つてゐたときに、突然起ち上つて黒い外套を脱ぎすてた。

それは實に女王であつたのだ！

女王は私の前でヴェールを脱いだときと同じやうに胸のところまで低く切れた身體にびつたり密着した白い肌衣を着て、腰には不氣味な兩頭の蛇をまきつけ、縮れた黒髪はゆつたりと殆んど足のところまで垂れてゐた。併し悪に魅られたやうに私の眼を捉へたのは彼女の顔であつた。だが今度はその美

しさのためではなくて、蠱惑的な恐怖の力のためであつた。美しいことも美じかつたが、その慄へる顔と、上を向いた苦しき眼附きとに現はれた恐ろしい執念深きとは、何とも言ひ現はすことのできないものであつた。

しばらくの間私はちつと立ちすくんでゐた。すると、彼女の両手は高く頭の上になり、白衣は金の帯のところまでするく、迂り落ちて、眼もくらむやうな美しい裸體が現はれた。彼女が、指をにぎりしめてそこに立つてゐる間に、彼女の顔には恐ろしい悪の形相が益々加はり深まつて行つた。

突然、彼女が若し私を見つけたらどんなことが起るだらうと思ふと、ぞつとして氣が遠くなつた。けれども、たとひ、そこにぐずぐずしてをれば殺されることがわかつてゐたとしても、私はそこから立ち去ることができなかつたであらう。それ程にも私はすつかり魅惑されてしまつてゐたのだ。

彼女の握りしめた手が兩側へ下り、又頭の上へ上るにつれて、白い火焰は殆んど天井にとゞく迄舞ひ上つて、その氣味の悪い光は彼女の姿を照し、被覆に包まれた棚の上の白い姿を照し岩窟の隅々まで鮮やかに照した。

象牙のやうな腕は再び下へ下りた。ちようどその時に彼女はアラビヤ語で、疾風のやうな鋭い聲で語り出した。その響きをきくと私の血は凝結してしまひ、忽ち心臓の働きはとまつてしまつた。

「呪はしき女、永久に呪はれてあれ。」  
腕が下りると焰も下りる。腕が上ると大きな火の舌が燃え上る。そしてまた下りる。

「呪はしき女の記憶——埃及女の記憶よ呪はれてあれ。」

焰は燃え上り、また下火になる。

「吾よりも美はしきニールの娘、呪はれてあれ、」

「吾が魔法を破りし女、呪はれてあれ、」

「吾が戀人をはなさざりし女、呪はれてあれ。」

焰はまた小さくなつた。

女王は眼の前へ手をやつて、今度は叱咤するやうな調子をやめて、高い聲で泣きだした。

「いくら呪つて見ても何にならう。あの女は妾に勝つたのだ、そして死んでしまつたのだもの。」

それからまた彼女は前よりも一層恐ろしい精力をふりしぼつてはじめた。

「呪はしき女、現在ある場所にて呪はれてあれ。吾が呪ひそこへ届きて彼女の女の休息を妨げよ。」

「星の空をこえて女を呪へ。彼の女の影、呪はれてあれ。」

「吾が力、そこまで届きて彼女を見出せよ。」

「彼女に吾が呪ひを聞かしめ、黒闇に身をかくさしめよ。」

「彼女を絶望の穴に落ちしめよ、いつか吾彼女を見出すべければ。」

焰はまた下火になり、女王は両手で雙の眼をおほうて泣いた。

「馬鹿なことを、誰が全能の翼の下に眠つてゐるものところまで行けよう？」

妾にだつて行けはし

ない。

「またもや女王の呪咀ははじまつた。」

「彼女の生れ代れる時彼女を呪へ、呪はれて生れしめよ。」

「生れ落ちたるその日より、眠りにつくその日まで彼女は呪はれてあれ。」

「さなり、呪はれてあれ。かくてこそ吾が復讐成りて、彼女を打ち破るべければ。」

かうして火焰は燃え上つたり下火になつたりして、それがアツシヤの苦しみ悶える眼に反照した。呪ひの聲は洞窟の中に物凄く響き渡り、火焰は明るく暗く明滅した。

しかし、たうとう彼女は疲れたと見えてやめてしまひ、岩の床の上にくづをれて、顔から胸へ美しい毛髪を打ち慄はしながら、身も世もあらぬ思ひに苦しんでひどくむせび泣いた。

「二千年の間」と彼女は呻いた。二千年の間妾はぢつと辛抱して待つてゐたのに、年はたてども、世紀は變れども、あの苦しい思ひ出は少しも薄らがない。希望の光りは少しも明るくならない。お、二千年の間、情慾に心を蝕まれ、目のあたりに罪を見て生きてゐるなんて！

「戀しい！ 戀しい！ 私の戀人！ 今度来たあの他國の人はどうしてこんなにあなたのことを思ひ出させるのでせう？ この五百年の間、妾はこんなに苦しい思ひをしたことはない。妾はあなたに罪を犯したけれども、その罪はもう拭ひ去つてしまつたではありませんか？ 何時あなたは私のところへ歸つて来るのですか？ 妾は凡ての物をもつてゐるが、あなたが缺けてゐては何にももたぬと同じ

ことです。妾はどうしたらよいのでせう？ どうしたら？ もしかすると、あの埃及の女はあなたのそばにゐて、妾のことを思ひ出して嘲つてゐることとせう。どうしてあなたを殺した妾が死ぬことができなかつたのでせう？ あ、妾は死ぬないのがうらめしい！ あ、！」かう言ひながら地べたにたふれて、心臓が裂けたのぢやないかと思ふまでよ、とむせび泣いた。

急に彼女は泣くのを止めて、起ち上り、着物をなほして、長い捲毛をいらくしながらうしろへかきあげ、棚の上に横はつてゐる屍體の方へ歩みよつた。

「お、カリクラテス！」と彼女は叫んだ。私はこの名をきくとぞつと身慄ひがした。「妾は苦しいけれど、もう一度あなたのお顔を見なければなりません。妾は、妾のこの手で殺したあなたを見るのはこれで三十年振りです」かう言ひながら彼女は、慄へる指さきで、屍體の上にかけてある敷布のやうな布の隅をつかんでちよつと手を止めた。それから彼女はまるで自分の考へてゐることが自分ながら恐ろしいかのやうに、おごそかな囁聲で再び語り出した。

「あなた、起こしてあげませうか」と彼女はまるで屍體に話しかけるやうに言つた。「さうすれば昔のやうに妾の前に立つてゐるでせう？ 妾、起してあげることならできてよ。」かう言ひながら彼女は両手を屍體の上へさし出した。彼女の身體は見るも恐ろしい様に硬ばり、兩眼は光を失つてぢつとすわつて来た。私はカーテンのうしろで、それを見て、恐ろしさに毛髪を逆立てて思はず身じろきした。そして、氣のせいだったのかそれとも事實だったのか知らぬが、被布の下がぶる／＼慄ひ出し、